

カスタム プロパティのリファレンス

2020 年 12 月 28 日

vRealize Automation 7.5

最新の技術ドキュメントは、VMware の Web サイト (<https://docs.vmware.com/jp/>)

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave.
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴィエムウェア株式会社
105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5
浜松町スクエア 13F
www.vmware.com/jp

Copyright © 2008-2020 VMware, Inc. All rights reserved. [著作権および商標情報。](#)

目次

カスタム プロパティのリファレンス 5

更新情報 6

1 カスタム プロパティとプロパティ ディクショナリ 7

カスタム プロパティの使用 7

カスタム プロパティとプロパティ グループの作成および追加 8

マシン プロビジョニングにおけるプロパティの使用 8

カスタム プロパティの優先順位について 9

機能別にグループ化されたカスタム プロパティ 11

展開のためのカスタム プロパティ 13

展開の名前の表示と分析のためのカスタム プロパティ 14

OpenStack エンドポイント用のカスタム プロパティ 16

クローン ブループリント用カスタム プロパティ 16

リンク クローン ブループリント用カスタム プロパティ 19

FlexClone ブループリントのカスタム プロパティ 21

基本ワークフロー ブループリントのカスタム プロパティ 24

Linux キックスタート ブループリントのカスタム プロパティ 25

SCCM ブループリントのカスタム プロパティ 27

WIM ブループリントのカスタム プロパティ 28

vCloud Air および vCloud Director のブループリントのカスタム プロパティ 31

ネットワークおよびセキュリティのカスタム プロパティ 34

コンテナのカスタム プロパティとプロパティ グループ 44

PXE プロビジョニングのカスタム プロパティ 45

OVF インポートのカスタム プロパティ 48

vRealize Automation ゲスト エージェントのカスタム プロパティ 48

BMC BladeLogic Configuration Manager との連携用のカスタム プロパティ 51

HP Server Automation との連携用のカスタム プロパティ 53

名前別にグループ化されたカスタム プロパティ 56

カスタム プロパティ アンダー スコア () 56

カスタム プロパティ A 57

カスタム プロパティ B 59

カスタム プロパティ C 60

カスタム プロパティ E 61

カスタム プロパティ H 63

カスタム プロパティ I 64

カスタム プロパティ L 65

カスタム プロパティ M 66

カスタム プロパティ N	66
カスタム プロパティ O	69
カスタム プロパティ P	70
カスタム プロパティ R	71
カスタム プロパティ S	71
カスタム プロパティ V	76
カスタム プロパティ X	97
プロパティ ディクショナリの使用	97
プロパティ定義の使用	98
プロパティ グループの使用	119
コンポーネント プロファイル設定の定義	121
カタログ展開用コンポーネント プロファイルのイメージの設定	122
カタログ展開用コンポーネント プロファイルのサイズの設定	124

カスタム プロパティのリファレンス

カスタム プロパティのリファレンス には、vRealize Automation を使用するとき使用可能なカスタム プロパティとその使用方法に関する情報が提供されています。

このドキュメントは、<https://docs.vmware.com/jp/vRealize-Automation/index.html> の vRealize Automation 製品ドキュメントから入手可能な vRealize Automation 製品ドキュメントと共に使用することを意図しています。

対象者

この情報は、vRealize Automation の IaaS 管理者、ファブリック管理者、およびビジネス グループ マネージャを対象としています。この内容は、Windows または Linux のシステム管理者としての経験があり、仮想テクノロジーおよび『基盤と概念』に記載されている基本的な概念に詳しい方を対象としています。

更新情報

このカスタム プロパティのリファレンスは、製品のリリースごと、または必要に応じて更新されます。

カスタム プロパティのリファレンスの更新履歴は次のとおりです。

リビジョン	説明
2020 年 2 月 14 日	マイナー更新。
2019 年 9 月 09 日	マイナー更新。
2019 年 7 月 18 日	カスタム プロパティ V で、VirtualMachine.Software.Execute、VirtualMachine.Admin.UseGuestAgent、VirtualMachine.Customize.WaitComplete、および VirtualMachine.Admin.CustomizeGuestOSDelay を更新しました。
2019 年 3 月 01 日	カスタム プロパティ V を更新しました。
2019 年 1 月 25 日	カスタム プロパティ アンダー スコア (L) を更新しました。
2018 年 11 月 13 日	マイナー更新。
2018 年 10 月 4 日	マイナー更新。
2018 年 9 月 20 日	初期リリース。

カスタム プロパティとプロパティ デ ィクショナリ

1

提供された vRealize Automation のカスタム プロパティを使用して、マシン プロビジョニングのさまざまな側面から制御できます。また、プロパティ ディクショナリを使用して、特定のニーズに合わせてカスタマイズした新しいプロパティ定義およびプロパティ グループを作成することも可能です。

プロパティを使用すると、ネットワーク、プラットフォーム、ゲスト エージェント、および他の多くの展開に関連するパラメータの設定や、既存またはデフォルトの値をオーバーライドすることができます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [カスタム プロパティの使用](#)
- [機能別にグループ化されたカスタム プロパティ](#)
- [名前別にグループ化されたカスタム プロパティ](#)
- [プロパティ ディクショナリの使用](#)
- [コンポーネント プロファイル設定の定義](#)

カスタム プロパティの使用

vRealize Automation のカスタム プロパティを使用すると、ネットワーク、プラットフォーム、ゲスト エージェントの設定、および他の多くの展開パラメータを設定するために、値を追加したり、既存またはデフォルトの値をオーバーライドしたりできます。

一部のプロパティは、すべてのマシンに指定する必要がある標準設定によって決まります。たとえば、すべてのブループリントにはメモリ値とディスク サイズ値が必要です。ブループリントおよび予約では、追加のプロパティを個別に指定するか、またはプロパティ グループとして指定することができます。

プロパティをブループリントまたはプロパティ グループに追加するときには、それを必須プロパティとしてマークすることができます。プロパティが必須に指定されている場合、ユーザーは、マシンを申請するときに、そのプロパティについて以下の例にあるような値を指定する必要があります。

- マシンの割り当てストレージを共有する複数のディスクに関する情報が必要です。
- マシンのローカル グループに追加するユーザーまたはグループに関する情報が必要です。
- マシンのホスト名が必要です。

Windows ゲスト エージェントは、プロビジョニングされたマシンの %SystemDrive%\VRMGuestAgent\site\workitem.xml ファイルにプロパティ値を記録します。

Linux ゲスト エージェントは、プロビジョニングされたマシンの /usr/share/gugent/site/workitem.xml ファイルにプロパティ値を記録します。

カスタム プロパティとプロパティ グループの作成および追加

カスタム プロパティを使用して、マシン プロビジョニングを制御できます。指定したカスタム プロパティを追加し、独自のプロパティとプロパティ グループを作成および追加することもできます。

ブループリント全体、ブループリント内のコンポーネント、予約のほか、エンドポイント タイプなどの vRealize Automation アイテムに、プロパティとプロパティ グループを追加できます。新しいカスタム プロパティとプロパティ グループを作成することもできます。

ブループリントの作成時、またはブループリントがドラフトまたは公開済みの状態の場合、プロパティとプロパティ グループを追加できます。カスタム プロパティとプロパティ グループは、ブループリントの個々のコンポーネントに追加することもできます。

ブループリント全体に適用されたカスタム プロパティは、コンポーネント レベルで構成されたカスタム プロパティより優先されます。カスタム プロパティの優先順位の詳細については、[カスタム プロパティの優先順位について](#)を参照してください。

ブループリント レベルのプロパティを編集するには、[ブループリントのプロパティ] ページを使用します。

カスタム プロパティでは、必要に応じて、ユーザーがマシン申請を作成する際のプロパティ値の指定を必須にできます。

- カスタム プロパティの名前と値には、通常大文字と小文字の区別があります。たとえば、hostname として表記されるカスタム プロパティと、HOSTNAME として表記される別のカスタム プロパティは、異なるカスタム プロパティと見なされます。
- カスタム プロパティ名にスペースは使用できません。カスタム プロパティを作成して使用する場合、このプロパティ名にスペースを含めないでください。
- 一部のカスタム プロパティ名は予約されているため、新しいカスタム プロパティを作成する場合に名前として使用できません。たとえば、プロパティ名 Encrypted と encrypted は予約されています。

新しいカスタム プロパティとプロパティ グループの作成の詳細については、[プロパティ ディクショナリの使用](#)を参照してください。

マシン プロビジョニングにおけるプロパティの使用

カスタム プロパティは、vRealize Automation によって提供されるプロパティです。さらに、独自のプロパティを定義することもできます。プロパティは、マシンの属性の指定またはデフォルト仕様のオーバーライドに使用される名前と値のペアです。

カスタム プロパティを使用し、次の例のように、さまざまなプロビジョニング方法、マシン タイプ、マシン オプションを制御できます。

- 特定のタイプのゲスト OS を指定します。

- リファレンス マシンの Windows イメージ ファイル形式 (WIM) イメージを使用して新規マシンをプロビジョニングする場合の WIM ベースのプロビジョニングを有効にします。
- マシン接続時の Remote Desktop Protocol の動作をカスタマイズします。
- 仮想マシンを XenDesktop Desktop Delivery Controller (DDC) サーバに登録します。
- 複数のディスク ドライブの追加など、仮想マシンのシステム仕様をカスタマイズします。
- 選択したローカル グループに指定ユーザーを追加するなど、マシンのゲスト OS をカスタマイズします。
- ネットワークおよびセキュリティの設定を指定します。
- ドロップダウン メニューなどの他のコントロール オプションを追加して、申請時に入力と選択のオプションがユーザーに表示されるようにします。

ブループリント、予約、または他のフォームにプロパティを追加する場合、プロパティを暗号化するかどうかと、プロビジョニング時に値を指定するようにプロンプト表示する必要があるかどうかを指定できます。これらのオプションは、プロビジョニング時にはオーバーライドできません。

定義済みオプションのリストからユーザーの選択に基づいてカスタム プロパティを動的に設定するコントロール オプションを追加する方法については、「[vRA 7 へのネットワーク選択ドロップダウンの追加](#)」ブログ ポストを参照してください。

ブループリントで指定されたプロパティが、プロパティ グループで指定された同一のプロパティをオーバーライドします。これにより、プロパティ グループのプロパティの多くを使用しながら、異なるプロパティのみをブループリントで設定できます。たとえば、標準的な開発者ワークステーション プロパティ グループが組み込まれたブループリントで、グループの英語（米国）設定を英語（英国）設定にオーバーライドします。

予約およびビジネス グループ内のプロパティを多くのマシンに適用できます。通常、その用途は、リソース管理などのソースに関連する目的に限定されます。プロビジョニングされるマシンの特性の指定は、一般にブループリントとプロパティ グループにプロパティを追加することによって行います。

カスタム プロパティの優先順位について

適切な権限が与えられたユーザーは、ブループリント、エンドポイント、ビジネス グループ、および予約のカスタム プロパティを指定できます。複数のソース内に同じプロパティが存在する場合、vRealize Automation は、一定の優先順位に従って、マシンにプロパティを適用します。

プロビジョニングされたマシンに適用するカスタム プロパティは、次の要素に追加できます。

- 予約：予約からプロビジョニングされるすべてのマシンにカスタム プロパティを適用する。
- ビジネス グループ：環境、およびビジネス グループ メンバーによってプロビジョニングされるすべてのマシンにカスタム プロパティを適用する。
- ブループリント：ブループリントからプロビジョニングされるすべてのマシンにカスタム プロパティを適用する。
- プロパティ グループ：ブループリントに設定可能。ブループリントからプロビジョニングされるすべてのマシンに、グループ内のすべてのカスタム プロパティを適用する。

ブループリントには、1 つ以上のプロパティ グループが含まれます。

- マシン申請：プロビジョニングされるマシンにカスタム プロパティを適用する。

- 承認ポリシー（高度な承認サポートが有効な場合）：承認するマシンの値を提供するように承認者に要求する。

次のリストに、カスタム プロパティの優先順位を示します。ソースで指定されているプロパティ値は、このリスト内で数字が大きい方が、小さい方より優先されます。

vRealize Automation で指定されたプロパティ名とユーザー定義によるプロパティ名との間で競合が発生する場合、vRealize Automation で指定されたカスタム プロパティ名が優先されます。

- 1 プロパティ グループ
- 2 ブループリント
- 3 ビジネス グループ
- 4 コンピュート リソース
- 5 予約
- 6 エンドポイント
- 7 ランタイム

プロパティ グループ、ブループリント、およびビジネス グループのカスタム プロパティは申請時に割り当てられ、他のコンピュー ト リソース、予約、およびエンドポイントのプロパティはプロビジョニング時に割り当てられます。

この順序は、次のようにさらに分類されます。

- 1 ブループリント レベル全体でのカスタム プロパティおよびグループ
- 2 コンポーネント レベルでのカスタム プロパティおよびグループ
- 3 ビジネス グループ用のカスタム プロパティ
- 4 コンピュート リソース用のカスタム プロパティ
- 5 予約用のカスタム プロパティ
- 6 エンドポイント用のカスタム プロパティ
- 7 ネストされたブループリント申請レベルでのカスタム プロパティ
- 8 コンポーネント申請レベルでのカスタム プロパティ

ほとんどの場合、ランタイム プロパティは、他のプロパティよりも優先されます。ランタイム プロパティを使用するには、次の条件を満たす必要があります。

- ユーザーにプロンプトを表示するカスタム プロパティ オプションが選択されている。これは、ユーザーがマシンのプロビジョニングを申請するときにプロパティの値を指定する必要があることを表します。
- ビジネス グループ マネージャがマシンのプロビジョニングを要求していて、マシン申請の確認ページのカスタム プロパティ リストにプロパティが表示される。

この優先ルールには例外があります。たとえば、VMware.VirtualCenter.Folder カスタム プロパティをビジネス グループに追加し、プロパティ値を指定しますが、申請でプロパティを表示するオプションを選択しないとします。さらに、同じカスタム プロパティをブループリントに追加し、申請でプロパティを表示することを指定するとします。指定されたユーザーがカタログからプロビジョニングを申請するとき、プロパティはカタログ申請フォームに表示されません。これは、プロパティは、プロビジョニングの申請時ではなくプロビジョニングが開始された後でのみ入手可能な予約情報に適用されるためです。

カスタム プロパティのタイプ

クローン作成されたマシンで、vRealize Automation の外部およびアップデートされたプロパティ タイプを使用できます。 クローン作成されたマシンでは、内部および読み取り専用のプロパティ タイプは使用できません。

次の vRealize Automation カスタム プロパティ タイプを利用できます。

■ 内部

指定された値はデータベースのみで保持されます。 たとえば、マシン申請を承認したマネージャの電子メールアドレスは `VirtualMachine.Admin.Approver` プロパティに記録されますが、プロパティはマシンに影響しません。

■ 読み取り専用

指定された値はマシンに実装されますが、変更できません。 たとえば、`VirtualMachine.Admin.UUID` ではマシンの UUID を指定しますが、その UUID は変更できません。

■ 外部

仮想化プラットフォームがマシンを作成するとき、またはビルド プロセスの WinPE フェーズ中に、マシンの外部プロパティが決定されます。 これらのプロパティを設定するには、プロパティの値をプロキシ エージェントに提供する必要があります。プロキシ エージェントがその値を仮想化プラットフォームまたはゲスト エージェントに渡すと、その値は WinPE フェーズに実装されます。

指定された値はマシンに実装されますが、アップデートされません。 たとえばプロパティ `VirtualMachine.Admin.AddOwnerToAdmins` が `true` に設定された場合、マシンの所有者がローカル管理者グループに追加されます。所有者が後でこのグループから削除されても、プロパティは `false` にアップデートされません。

■ 最終アップデート

指定された値はマシンに実装され、データ収集時にアップデートされます。 たとえば、マシンのコンピュータ リソースが変更されると、プロキシ エージェントによってマシンの `VirtualMachine.Admin.Hostname` プロパティの値がアップデートされます。

内部および読み取り専用プロパティ タイプは、テンプレートで決められる属性を設定します。

vRealize Automation マシン メニューを使用して、読み取り専用プロパティの `VirtualMachine.Admin.AgentID`、`VirtualMachine.Admin.UUID`、および `VirtualMachine.Admin.Name` を除く、予約されたすべてのカスタム プロパティを変更できます。

機能別にグループ化されたカスタム プロパティ

カスタム プロパティを使用して、vRealize Automation の追加の制御を提供できます。

ここで示すカスタム プロパティは、機能別にグループ化されています。 名前別にグループ化されたカスタム プロパティについては、[名前別にグループ化されたカスタム プロパティ](#)を参照してください。

■ 展開のためのカスタム プロパティ

vRealize Automation は、ほとんどの展開に適用可能な複数のカスタム プロパティを提供します。

- **展開の名前の表示と分析のためのカスタム プロパティ**

プロビジョニングが失敗すると、vRealize Automation はカタログ アイテムに含まれるすべてのリソースをロールバックします。複数のコンポーネントが含まれるデプロイ環境の場合、カスタム プロパティを使用してデフォルト値をオーバーライドし、エラーのデバッグ用の情報を得ることができます。これらのプロパティは、ブループリント全体に適用することをお勧めします。

- **OpenStack エンドポイント用のカスタム プロパティ**

vRealize Automation には、vRealize Automation で OpenStack エンドポイントを構成するときに使用できるカスタム プロパティが用意されています。

- **クローン ブループリント用カスタム プロパティ**

vRealize Automation には、クローン ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

- **リンク クローン ブループリント用カスタム プロパティ**

vRealize Automation には、リンク クローン ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

- **FlexClone ブループリントのカスタム プロパティ**

vRealize Automation には、FlexClone ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

- **基本ワークフロー ブループリントのカスタム プロパティ**

vRealize Automation には、基本ワークフロー ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

- **Linux キックスタート ブループリントのカスタム プロパティ**

vRealize Automation には、Linux キックスタート ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

- **SCCM ブループリントのカスタム プロパティ**

vRealize Automation には、SCCM ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

- **WIM ブループリントのカスタム プロパティ**

vRealize Automation には、WIM ブループリント用の追加の制御を提供するカスタム プロパティが含まれます。

- **vCloud Air および vCloud Director のブループリントのカスタム プロパティ**

特定のカスタム プロパティを、ブループリント内の vCloud Air または vCloud Director のマシン コンポーネント定義に追加できます。

- **ネットワークおよびセキュリティのカスタム プロパティ**

ネットワークの vRealize Automation カスタム プロパティでは、マシン上の特定のネットワーク デバイスの構成を指定します。

■ コンテナのカスタム プロパティとプロパティ グループ

定義済みのプロパティ グループを vRealize Automation ブループリント内のコンテナ コンポーネントに追加することができます。これらのプロパティを含むブループリントを使用してマシンをプロビジョニングすると、プロビジョニングしたマシンが、Docker コンテナのホスト マシンとして登録されます。

■ PXE プロビジョニングのカスタム プロパティ

PXE は、Cisco UCS Manager でサポートされている唯一のプロビジョニング方法です。ネットワーク ブートストラップ プログラムと vRealize Automation カスタム プロパティを併用して、WIM、SCCM、または Linux キックスタート プロビジョニングを開始できます。またカスタム プロパティを使用して、独自の PowerShell スクリプトを呼び出すこともできます。Linux キックスタート プロビジョニングでは、カスタム プロパティは必要ありません。

■ OVF インポートのカスタム プロパティ

OVF をブループリントにインポートする際に、複数の設定をカスタム プロパティとしてインポートし、設定することができます。

■ vRealize Automation ゲスト エージェントのカスタム プロパティ

vRealize Automation ゲスト エージェントをクローン作成用のテンプレートまたは WinPE にインストールした場合、マシンが完全に展開された後にカスタム プロパティを使用して、プロビジョニングされたマシンのゲスト OS 内でカスタム スクリプトを実行できます。

■ BMC BladeLogic Configuration Manager との連携用のカスタム プロパティ

vRealize Automation には、BMC BladeLogic Configuration Manager と連携するために必要なカスタム プロパティがあります。

■ HP Server Automation との連携用のカスタム プロパティ

vRealize Automation には、HP Server Automation と連携するために必要なカスタム プロパティがあります。HP Server Automation との連携には、いくつかのカスタム プロパティが必要です。その他のカスタム プロパティは、必要に応じて使用します。

展開のためのカスタム プロパティ

vRealize Automation は、ほとんどの展開に適用可能な複数のカスタム プロパティを提供します。

表 1-1. ブループリントと展開用のカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
<code>_debug_deployment</code>	<p>展開の部分的な完了が許可される拡張処理を除いて、デフォルトの動作では、個々のリソースのいずれかでプロビジョニングに失敗すると、展開全体が破棄されます。<code>_debug_deployment</code> カスタム プロパティ値を <code>true</code> に設定すると、デフォルトの動作をオーバーライドできます。プロビジョニングが失敗した場合は、プロビジョニングできなかったコンポーネントを特定できるように、デバッグ用のカスタム プロパティによってリソースのロールバックが停止されます。</p> <p>つまり、<code>_debug_deployment</code> を <code>true</code> に設定すると、プロビジョニングに失敗した場合にマシンが破棄されなくなるため、デバッグのカスタマイズやエージェントなどの初回起動に関する問題を簡単にデバッグできるようになります。これ以外の方法で設定した場合は、プロビジョニングプロセスの内容が直接変更されることはなく、ゲスト エージェントまたはカスタマイズが影響を受けることもありません（たとえば、vCenter Server カスタマイズの仕様を基準として結果を設定する場合）。</p> <p>注：失敗したカタログ アイテムは、障害発生時に直ちにロールバックされるため、通常はアクセスできません。しかし、<code>_debug_deployment</code> が <code>true</code> に設定されている場合、vRealize Automation がそれ以外の場合の失敗した展開を部分的に正常と見なすため、アクセスが可能になります。</p> <p>ブループリントにカスタム プロパティを適用するには、ブループリントの作成または編集時に [プロパティ] タブを使用して、<code>_debug_deployment</code> を [ブループリント プロパティ] ページに追加します。<code>_debug_deployment</code> プロパティは、ゲスト エージェントやマシン プロビジョニングのレベルではなく、ソフトウェア プロビジョニングのレベルで使用されます。</p> <p>VRMAgent.exe.config ファイルの設定を使用して、導入の失敗後に vRealize Automation によって仮想マシンが削除されないように設定することもできます。</p>
<code>_deploymentName</code>	<p>このプロパティをブループリントに追加すると、<code>_deploymentName</code> の値をカスタム文字列に設定して、展開のカスタム名を指定できます。この展開の複数のインスタンスを単一の申請でプロビジョニングする場合は、カスタム名がプリフィックスになります。ユーザーが展開名を指定できるようにするには、このカスタム プロパティを設定してオーバーライドを許可します。このプロパティの使用には、次の 2 点の注意事項があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ このプロパティは、コンポーネント レベルではなく、ブループリント レベルで追加する必要があります。たとえば、ブループリントを作成または編集する際に、[プロパティ] タブをクリックして、[カスタム プロパティ] - [新規] の順に選択し、<code>_deploymentName</code> プロパティをブループリントに追加します。このプロパティは、マシンやブループリントに含まれる他のコンポーネントに追加しないでください。 ■ このプロパティは、プロパティ グループのメンバーとしてではなく、別個のプロパティとして追加する必要があります。

展開の名前の表示と分析のためのカスタム プロパティ

プロビジョニングが失敗すると、vRealize Automation はカタログ アイテムに含まれるすべてのリソースをロールバックします。複数のコンポーネントが含まれるデプロイ環境の場合、カスタム プロパティを使用してデフォルト

ト値をオーバーライドし、エラーのデバッグ用の情報を得ることができます。これらのプロパティは、ブループリント全体に適用することをお勧めします。

表 1-2. 展開を分析するためのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
<code>_debug_deployment</code>	<p>展開の部分的な完了が許可される拡張処理を除いて、デフォルトの動作では、個々のリソースのいずれかでプロビジョニングに失敗すると、展開全体が破棄されます。<code>_debug_deployment</code> カスタム プロパティ値を <code>true</code> に設定すると、デフォルトの動作をオーバーライドできます。プロビジョニングが失敗した場合は、プロビジョニングできなかったコンポーネントを特定できるように、デバッグ用のカスタム プロパティによってリソースのロールバックが停止されます。</p> <p>注：失敗したカタログ アイテムは、障害発生時に直ちにロールバックされるため、通常はアクセスできません。しかし、<code>_debug_deployment</code> が <code>true</code> に設定されている場合、vRealize Automation がそれ以外の場合の失敗した展開を部分的に正常と見なすため、アクセスが可能になります。</p> <p>つまり、<code>_debug_deployment</code> を <code>true</code> に設定すると、プロビジョニングに失敗した場合にマシンが破棄されなくなるため、デバッグのカスタマイズやエージェントなどの初回起動に関する問題を簡単にデバッグできるようになります。これ以外の方法で設定した場合は、プロビジョニングプロセスの内容が直接変更されることはなく、ゲスト エージェントまたはカスタマイズが影響を受けることはありません（たとえば、vCenter Server カスタマイズの仕様を基準として結果を設定する場合）。</p> <p>ブループリントにカスタム プロパティを適用するには、ブループリントの作成または編集時に [プロパティ] タブを使用して、<code>_debug_deployment</code> を [ブループリント プロパティ] ページに追加します。<code>_debug_deployment</code> プロパティは、ゲスト エージェントやマシン プロビジョニングのレベルではなく、ソフトウェア プロビジョニングのレベルで使用されます。</p> <p>VRMAgent.exe.config ファイルの設定を使用して、導入の失敗後に vRealize Automation によって仮想マシンが削除されないように設定することもできます。</p>
<code>_deploymentName</code>	<p>このプロパティをブループリントに追加すると、<code>_deploymentName</code> の値をカスタム文字列に設定して、展開のカスタム名を指定できます。この展開の複数のインスタンスを単一の申請でプロビジョニングする場合は、カスタム名がプリフィックスになります。ユーザーが展開名を指定できるようにするには、このカスタム プロパティを設定してオーバーライドを許可します。このプロパティの使用には、次の 2 点の注意事項があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ このプロパティは、コンポーネント レベルではなく、ブループリント レベルで追加する必要があります。たとえば、ブループリントを作成または編集する際に、[プロパティ] タブをクリックして、[カスタム プロパティ] - [新規] の順に選択し、<code>_deploymentName</code> プロパティをブループリントに追加します。このプロパティは、マシンやブループリントに含まれる他のコンポーネントに追加しないでください。 ■ このプロパティは、プロパティ グループのメンバーとしてではなく、別個のプロパティとして追加する必要があります。

OpenStack エンドポイント用のカスタム プロパティ

vRealize Automation には、vRealize Automation で OpenStack エンドポイントを構成するときに使用できるカスタム プロパティが用意されています。

表 1-3. Openstack エンドポイント用のカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Admin.ConnectAddress.Regex</code>	<p>vRealize Automation 管理者が RDP 接続のようなターミナル接続の IP アドレスと一致する正規表現を定義するために使用します。一致した場合、IP アドレスは <code>VirtualMachine.Admin.ConnectAddress</code> カスタム プロパティに保存されます。それ以外の場合、最初に使用可能な IP アドレスが指定されます。</p> <p>たとえば、プロパティ値を <code>10.10.0.</code> に設定すると、仮想マシンに割り当てられている <code>10.10.0.*</code> サブネットから IP アドレスを選択できます。サブネットが割り当てられていない場合、このプロパティは無視されます。</p> <p>このプロパティは、OpenStack に対して使用できます。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.AdditionAddressM</code>	<p>ネットワーク <i>N</i> の OpenStack インスタンス用に割り当てられる追加の <i>M</i> IP アドレスを定義します。<code>VirtualMachine.NetworkN</code> で指定した IP アドレス セットは除きます。Address. プロパティによって指定された IP アドレス セットは除外します。[ネットワーク] タブの [追加アドレス] 列に、他のアドレスが表示されます。</p> <p>このプロパティは、OpenStack のマシン状態のデータ収集で使用されます。OpenStack エンドポイントによってのみデータ収集が実行されますが、このプロパティは OpenStack に固有ではなく、他のエンドポイント タイプのライフサイクルの拡張性のために使用することができます。</p> <p>このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンドルーティング ネットワークではサポートされません。</p>
<code>VMware.Endpoint.Openstack.IdentityProvider.DomainName</code>	<p>vRealize Automation が必須の Keystone V3 ドメイン名の認証をサポートできるようにします。Keystone V3 を有効になっている場合は、プロパティを使用して OpenStack エンドポイントに特定のドメインを指定して、Keystone V3 OpenStack ID プロバイダで認証できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新しいエンドポイントの場合は、カスタム プロパティを追加して特定のドメインを指定します。 ■ アップグレードしたまたは移行したエンドポイントの場合、アップグレード後または移行後にデータ収集が失敗した場合にだけカスタム プロパティを追加します。
<code>VMware.Endpoint.Openstack.IdentityProvider.Version</code>	<p>OpenStack エンドポイントを認証するときに使用する OpenStack ID プロバイダ (Keystone) のバージョンを指定します。Keystone V3 OpenStack ID プロバイダで認証するには、値 3 を構成します。他の値を使用する場合、またはこのカスタム プロパティを使用しない場合、デフォルトの Keystone V2 を使用して認証が行われます。</p>

クローン ブループリント用カスタム プロパティ

vRealize Automation には、クローン ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

表 1-4. クローン ブループリント用カスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.DiskN.StorageReservationPolicy	<p>ディスク <i>N</i> のストレージを検出するために使用するストレージ予約ポリシーを指定します。また、名前付きストレージ予約ポリシーをボリュームに割り当てます。このプロパティを使用するには、プロパティ名の <i>N</i> をボリューム番号に置き換えて、ストレージ予約ポリシー名をその値として指定します。このプロパティは、ブループリントで指定されているストレージ予約ポリシー名と同等です。ディスク番号は連番にする必要があります。このプロパティは、すべての仮想および vCloud 予約で有効です。このプロパティは、物理、Amazon、または OpenStack 予約では無効です。</p>
VirtualMachine.NetworkN.NetworkProfileName	<p>ネットワーク プロファイルの名前を指定します。このネットワーク プロファイルに基づいて、固定 IP アドレスをネットワーク デバイス <i>N</i> に割り当てたり、クローン作成されたマシンのネットワーク デバイス <i>N</i> に割り当て可能な固定 IP アドレスの範囲を取得したりします。ここで、最初のデバイスでは <i>N</i>=0、2 番目のデバイスは 1、以降同様に指定していきます。</p> <p>プロパティが示すネットワーク プロファイルは、IP アドレスを割り当てるために使用されます。このプロパティにより、マシンの接続先ネットワークが予約に基づいて決定されます。</p> <p>ネットワークが割り当てられた後でこのプロパティ値を変更しても、指定のマシンに割り当てられる IP アドレス値には影響しません。</p> <p>仮想マシンの WIM ベース プロビジョニングでは、このプロパティを使用して、ネットワーク プロファイルおよびネットワーク インターフェイスを指定できます。または、[仮想予約] ページの [ネットワーク] セクションを使用することもできます。</p> <p>ネットワーク プロファイルの次の属性を使用して、クローン作成ブループリントで固定 IP アドレスを割り当てることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VirtualMachine.NetworkN.SubnetMask ■ VirtualMachine.NetworkN.Gateway ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSuffix ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSearchSuffixes <p>VirtualMachine.Network<i>N</i> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。</p>
Linux.ExternalScript.Name	<p>オペレーティング システムがインストールされた後に、Linux ゲスト エージェントが実行するオプションのカスタマイズ スクリプトの名前を指定します (例: config.sh)。このプロパティは、Linux エージェントがインストールされたテンプレートからクローン作成される Linux マシンで使用可能です。</p> <p>外部スクリプトを指定する場合は、Linux.ExternalScript.LocationType プロパティおよび Linux.ExternalScript.Path プロパティを使用して、その場所も定義する必要があります。</p>

表 1-4. クローン ブループリント用カスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
Linux.ExternalScript.LocationType	Linux.ExternalScript.Name プロパティで指定されたカスタマイズ スクリプトの場所タイプを指定します。ローカルまたは NFS のいずれかを指定できます。 また、Linux.ExternalScript.Path プロパティを使用してスクリプトの場所を指定する必要もあります。場所タイプが NFS の場合は、Linux.ExternalScript.Server プロパティも使用します。
Linux.ExternalScript.Server	Linux.ExternalScript.Name で指定された Linux 外部カスタマイズ スクリプトが配置される NFS サーバの名前を指定します (例: lab-ad.lab.local)。
Linux.ExternalScript.Path	Linux カスタマイズ スクリプトへのローカル パスまたは NFS サーバ上の Linux カスタマイズへのエクスポート パスを指定します。値はスラッシュから始まり、ファイル名は含みません (例: /scripts/linux/config.sh)。

カスタム プロパティを受け入れ、プロビジョニングされたマシンをカスタマイズするスクリプトを実行するため、管理者がゲスト エージェントをインストールしている場合、カスタム プロパティを使用して、ゲスト エージェントを使用するクローン マシンをさらにカスタマイズできます。

表 1-5. ゲスト エージェントを使用したクローン マシンのカスタマイズに必要なカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.Admin.AllowLogin	VirtualMachine.Admin.Owner プロパティでの指定に従ってマシン所有者をローカルのリモート デスクトップ ユーザー グループに追加するには、True (デフォルト) に設定します。
VirtualMachine.Admin.UseGuestAgent	クローン作成用テンプレートのサービスとしてゲスト エージェントがインストールされている場合、マシン ブループリントで True に設定すると、そのテンプレートからクローン作成されたマシンのゲスト エージェント サービスが有効になります。マシンを起動すると、ゲスト エージェント サービスが起動します。ゲスト エージェントを無効にする場合は、False に設定します。False に設定すると、拡張クローン ワークフローでゲスト OS タスクにゲスト エージェントが使用されなくなり、機能が VMwareCloneWorkflow に制限されます。指定しない場合、または False 以外に設定した場合、拡張クローン ワークフローからゲスト エージェントに作業アイテムが送信されます。
VirtualMachine.DiskN.Active	マシンのディスク <i>N</i> が有効であることを指定する場合は、True (デフォルト) に設定します。マシンのディスク <i>N</i> が有効ではないことを指定する場合は、False に設定します。
VirtualMachine.DiskN.Label	マシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。ディスク ラベルの最大文字数は 32 文字です。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントに対して使用する場合は、ゲスト OS 内でマシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。
VirtualMachine.DiskN.Letter	マシンのディスク <i>N</i> のドライブ文字またはマウント ポイントを指定します。デフォルトは C です。たとえば、ディスク 1 に文字 D を指定するには、カスタム プロパティを VirtualMachine.Disk1.Letter として定義し、値として D と入力します。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントと組み合わせて使用する場合、ゲスト エージェントは、この値によって指定されたドライブ文字またはマウント ポイントを使用して、追加ディスク <i>N</i> をゲスト OS にマウントします。

表 1-5. ゲスト エージェントを使用したクローン マシンのカスタマイズに必要なカスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Admin.CustomizeGuestOSDelay</code>	カスタマイズが完了してからゲスト OS のカスタマイズが開始するまでの待機時間を指定します。値は HH:MM:SS 形式にする必要があります。値が設定されていない場合、デフォルト値は 1 分 (00:01:00) になります。このカスタム プロパティを含めない場合、ゲスト エージェントの作業アイテムが完了する前に仮想マシンが再起動すると、プロビジョニングに失敗する場合があります。
<code>VirtualMachine.Customize.WaitComplete</code>	すべてのカスタマイズが完了するまで、プロビジョニング ワークフローで作業アイテムがゲスト エージェントに送信されないようにする場合は、True に設定します。カスタマイズが完了する前に作業アイテムを作成できるようにするには、False に設定します。
<code>VirtualMachine.SoftwareN.Name</code>	プロビジョニング中にインストールまたは実行するソフトウェア アプリケーション <i>N</i> やスクリプトの分かりやすい名前を指定します。これは、任意の参照専用プロパティです。このプロパティは、拡張クローン ワークフローやゲスト エージェントでは実質的に機能しませんが、ユーザーインターフェイスでカスタム ソフトウェアを選択する場合や、ソフトウェアの使用状況をレポートする場合に役立ちます。
<code>VirtualMachine.SoftwareN.ScriptPath</code>	アプリケーションのインストール スクリプトへの完全パスを指定します。このパスは、ゲスト OS で参照される有効な絶対パスにする必要があります。また、スクリプト ファイル名が含まれている必要があります。パスの文字列に { <i>CustomPropertyName</i> } を挿入することで、カスタム プロパティ値をパラメータとしてスクリプトに渡すことができます。たとえば、名前が <code>ActivationKey</code> で値が 1234 のカスタム プロパティがある場合、スクリプト パスは、 <code>D:\InstallApp.bat -key {ActivationKey}</code> となります。ゲスト エージェントはコマンド <code>D:\InstallApp.bat -key 1234</code> を実行します。その後、この値を受け入れて使用するようにスクリプト ファイルをプログラムできます。
<code>VirtualMachine.SoftwareN.ISOName</code>	データストアのルートに対する ISO ファイルの相対パスおよびファイル名を指定します。形式は <code>/folder_name/subfolder_name/file_name.iso</code> です。値が設定されていない場合、ISO はマウントされません。
<code>VirtualMachine.SoftwareN.ISOLocation</code>	アプリケーションまたはスクリプトで使用する ISO イメージ ファイルが含まれるストレージ パスを指定します。ホスト予約で表示されるパスの形式に設定します (例: <code>netapp-1:it_nfs_1</code>)。値が設定されていない場合、ISO はマウントされません。

リンク クローン ブループリント用カスタム プロパティ

vRealize Automation には、リンク クローン ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

特定の vRealize Automation カスタム プロパティをリンク クローン ブループリントで使用する必要があります。

表 1-6. リンク クローン ブループリント用カスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.DiskN.Storage</code>	マシン ディスク <i>N</i> を配置するデータストア（たとえば、DATASTORE01）を指定します。このプロパティは、1つのデータストアをリンク クローン ブループリントに追加するために使用されることもあります。 <i>N</i> は、割り当てるボリュームのインデックス（0 から開始）です。ボリュームに割り当てるデータストアの名前を入力します。これは、[コンピュート リソースの編集] ページの [ストレージ パス] に表示されるデータストア名です。ディスク番号は連番にする必要があります。
<code>VirtualMachine.DiskN.StorageReservationPolicy</code>	ディスク <i>N</i> のストレージを検出するために使用するストレージ予約ポリシーを指定します。また、名前付きストレージ予約ポリシーをボリュームに割り当てます。このプロパティを使用するには、プロパティ名の <i>N</i> をボリューム番号に置き換えて、ストレージ予約ポリシー名をその値として指定します。このプロパティは、ブループリントで指定されているストレージ予約ポリシー名と同等です。ディスク番号は連番にする必要があります。このプロパティは、すべての仮想および vCloud 予約で有効です。このプロパティは、物理、Amazon、または OpenStack 予約では無効です。
<code>VirtualMachine.DiskN.Label</code>	マシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。ディスク ラベルの最大文字数は 32 文字です。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントに対して使用する場合は、ゲスト OS 内でマシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。
<code>VirtualMachine.DiskN.Letter</code>	マシンのディスク <i>N</i> のドライブ文字またはマウント ポイントを指定します。デフォルトは C です。たとえば、ディスク 1 に文字 D を指定するには、カスタム プロパティを <code>VirtualMachine.Disk1.Letter</code> として定義し、値として D と入力します。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントと組み合わせて使用する場合、ゲスト エージェントは、この値によって指定されたドライブ文字またはマウント ポイントを使用して、追加ディスク <i>N</i> をゲスト OS にマウントします。
<code>MaximumProvisionedMachines</code>	1つのマシン スナップショットに対するリンク クローンの最大数を指定します。デフォルトは無制限です。
<code>Linux.ExternalScript.Name</code>	オペレーティング システムがインストールされた後に、Linux ゲスト エージェントが実行するオプションのカスタマイズ スクリプトの名前を指定します（例： <code>config.sh</code> ）。このプロパティは、Linux エージェントがインストールされたテンプレートからクローン作成される Linux マシンで使用可能です。 外部スクリプトを指定する場合は、 <code>Linux.ExternalScript.LocationType</code> プロパティおよび <code>Linux.ExternalScript.Path</code> プロパティを使用して、その場所も定義する必要があります。
<code>Linux.ExternalScript.LocationType</code>	<code>Linux.ExternalScript.Name</code> プロパティで指定されたカスタマイズ スクリプトの場所タイプを指定します。ローカルまたは NFS のいずれかを指定できます。 また、 <code>Linux.ExternalScript.Path</code> プロパティを使用してスクリプトの場所を指定する必要もあります。場所タイプが NFS の場合は、 <code>Linux.ExternalScript.Server</code> プロパティも使用します。

表 1-6. リンク クローン ブループリント用カスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
Linux.ExternalScript.Server	Linux.ExternalScript.Name で指定された Linux 外部カスタマイズ スクリプトが配置される NFS サーバの名前を指定します (例: lab-ad.lab.local)。
Linux.ExternalScript.Path	Linux カスタマイズ スクリプトへのローカル パスまたは NFS サーバ上の Linux カスタマイズへのエクスポート パスを指定します。値はスラッシュから始まり、ファイル名は含みません (例: /scripts/linux/config.sh)。

クローン作成されたマシンをカスタマイズするためにゲスト エージェントをインストールした場合、一部のカスタム プロパティの使用頻度が高まります。

表 1-7. ゲスト エージェントを使用したクローン マシンのカスタマイズに必要なカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.Admin.UseGuestAgent	クローン作成用テンプレートのサービスとしてゲスト エージェントがインストールされている場合、マシン ブループリントで True に設定すると、そのテンプレートからクローン作成されたマシンのゲスト エージェント サービスが有効になります。マシンを起動すると、ゲスト エージェント サービスが起動します。ゲスト エージェントを無効にする場合は、False に設定します。False に設定すると、拡張クローン ワークフローでゲスト OS タスクにゲスト エージェントが使用されなくなり、機能が VMwareCloneWorkflow に制限されます。指定しない場合、または False 以外に設定した場合、拡張クローン ワークフローからゲスト エージェントに作業アイテムが送信されます。
VirtualMachine.Admin.CustomizeGuestOSDelay	カスタマイズが完了してからゲスト OS のカスタマイズが開始するまでの待機時間を指定します。値は HH:MM:SS 形式にする必要があります。値が設定されていない場合、デフォルト値は 1 分 (00:01:00) になります。このカスタム プロパティを含めない場合、ゲスト エージェントの作業アイテムが完了する前に仮想マシンが再起動すると、プロビジョニングに失敗する場合があります。
VirtualMachine.Customize.WaitComplete	すべてのカスタマイズが完了するまで、プロビジョニング ワークフローで作業アイテムがゲスト エージェントに送信されないようにする場合は、True に設定します。カスタマイズが完了する前に作業アイテムを作成できるようにするには、False に設定します。
VirtualMachine.SoftwareN.ScriptPath	アプリケーションのインストール スクリプトへの完全パスを指定します。このパスは、ゲスト OS で参照される有効な絶対パスにする必要があります。また、スクリプト ファイル名が含まれている必要があります。パスの文字列に {CustomPropertyName} を挿入することで、カスタム プロパティ値をパラメータとしてスクリプトに渡すことができます。たとえば、名前が ActivationKey で値が 1234 のカスタム プロパティがある場合、スクリプト パスは、D:\InstallApp.bat -key {ActivationKey} となります。ゲスト エージェントはコマンド D:\InstallApp.bat -key 1234 を実行します。その後、この値を受け入れて使用するようにスクリプト ファイルをプログラムできます。

FlexClone ブループリントのカスタム プロパティ

vRealize Automation には、FlexClone ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

表 1-8. FlexClone ブループリントのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.NetworkN.NetworkProfileName	<p>ネットワーク プロファイルの名前を指定します。このネットワーク プロファイルに基づいて、固定 IP アドレスをネットワーク デバイス <i>N</i> に割り当てたり、クローン作成されたマシンのネットワーク デバイス <i>N</i> に割り当て可能な固定 IP アドレスの範囲を取得したりします。ここで、最初のデバイスでは <i>N</i>=0、2 番目のデバイスは 1、以降同様に指定していきます。</p> <p>プロパティが示すネットワーク プロファイルは、IP アドレスを割り当てるために使用されます。このプロパティにより、マシンの接続先ネットワークが予約に基づいて決定されます。</p> <p>ネットワークが割り当てられた後でこのプロパティ値を変更しても、指定のマシンに割り当てられる IP アドレス値には影響しません。</p> <p>仮想マシンの WIM ベース プロビジョニングでは、このプロパティを使用して、ネットワーク プロファイルおよびネットワーク インターフェイスを指定できます。または、[仮想予約] ページの [ネットワーク] セクションを使用することもできます。</p> <p>ネットワーク プロファイルの次の属性を使用して、クローン作成ブループリントで固定 IP アドレスを割り当てることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VirtualMachine.NetworkN.SubnetMask ■ VirtualMachine.NetworkN.Gateway ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSuffix ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSearchSuffixes <p>VirtualMachine.Network<i>N</i> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。</p>
Linux.ExternalScript.Name	<p>オペレーティング システムがインストールされた後に、Linux ゲスト エージェントが実行するオプションのカスタマイズ スクリプトの名前を指定します (例: config.sh)。このプロパティは、Linux エージェントがインストールされたテンプレートからクローン作成される Linux マシンで使用可能です。</p> <p>外部スクリプトを指定する場合は、Linux.ExternalScript.LocationType プロパティおよび Linux.ExternalScript.Path プロパティを使用して、その場所も定義する必要があります。</p>
Linux.ExternalScript.LocationType	<p>Linux.ExternalScript.Name プロパティで指定されたカスタマイズ スクリプトの場所タイプを指定します。ローカルまたは NFS のいずれかを指定できます。</p> <p>また、Linux.ExternalScript.Path プロパティを使用してスクリプトの場所を指定する必要もあります。場所タイプが NFS の場合は、Linux.ExternalScript.Server プロパティも使用します。</p>

表 1-8. FlexClone ブループリントのカスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
Linux.ExternalScript.Server	Linux.ExternalScript.Name で指定された Linux 外部カスタマイズ スクリプトが配置される NFS サーバの名前を指定します (例: lab-ad.lab.local)。
Linux.ExternalScript.Path	Linux カスタマイズ スクリプトへのローカル パスまたは NFS サーバ上の Linux カスタマイズへのエクスポート パスを指定します。値はスラッシュから始まり、ファイル名は含みません (例: /scripts/linux/config.sh)。

次の「ゲスト エージェントを使用した FlexClone マシンのカスタマイズに必要なカスタム プロパティ」の表では、クローン作成されたマシンをカスタマイズするためにゲスト エージェントをインストールしている場合に、最もよく使用されるプロパティについて説明しています。

表 1-9. ゲスト エージェントを使用した FlexClone マシンのカスタマイズに必要なカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.Admin.UseGuestAgent	クローン作成用テンプレートのサービスとしてゲスト エージェントがインストールされている場合、マシン ブループリントで True に設定すると、そのテンプレートからクローン作成されたマシンのゲスト エージェント サービスが有効になります。マシンを起動すると、ゲスト エージェント サービスが起動します。ゲスト エージェントを無効にする場合は、False に設定します。False に設定すると、拡張クローン ワークフローでゲスト OS タスクにゲスト エージェントが使用されなくなり、機能が VMwareCloneWorkflow に制限されます。指定しない場合、または False 以外に設定した場合、拡張クローン ワークフローからゲスト エージェントに作業アイテムが送信されます。
VirtualMachine.DiskN.Label	マシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。ディスク ラベルの最大文字数は 32 文字です。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントに対して使用する場合は、ゲスト OS 内でマシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。
VirtualMachine.DiskN.Letter	マシンのディスク <i>N</i> のドライブ文字またはマウント ポイントを指定します。デフォルトは C です。たとえば、ディスク 1 に文字 D を指定するには、カスタム プロパティを VirtualMachine.Disk1.Letter として定義し、値として D と入力します。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントと組み合わせて使用する場合、ゲスト エージェントは、この値によって指定されたドライブ文字またはマウント ポイントを使用して、追加ディスク <i>N</i> をゲスト OS にマウントします。
VirtualMachine.Admin.CustomizeGuestOSDelay	カスタマイズが完了してからゲスト OS のカスタマイズが開始するまでの待機時間を指定します。値は HH:MM:SS 形式にする必要があります。値が設定されていない場合、デフォルト値は 1 分 (00:01:00) になります。このカスタム プロパティを含めない場合、ゲスト エージェントの作業アイテムが完了する前に仮想マシンが再起動すると、プロビジョニングに失敗する場合があります。

表 1-9. ゲスト エージェントを使用した FlexClone マシンのカスタマイズに必要なカスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Customize.WaitComplete</code>	すべてのカスタマイズが完了するまで、プロビジョニング ワークフローで作業アイテムがゲスト エージェントに送信されないようにする場合は、True に設定します。カスタマイズが完了する前に作業アイテムを作成できるようにするには、False に設定します。
<code>VirtualMachine.SoftwareN.ScriptPath</code>	アプリケーションのインストール スクリプトへの完全パスを指定します。このパスは、ゲスト OS で参照される有効な絶対パスにする必要があります。また、スクリプト ファイル名が含まれている必要があります。パスの文字列に {CustomPropertyName} を挿入することで、カスタム プロパティ値をパラメータとしてスクリプトに渡すことができます。たとえば、名前が <code>ActivationKey</code> で値が 1234 のカスタム プロパティがある場合、スクリプト パスは、 <code>D:\InstallApp.bat -key {ActivationKey}</code> となります。ゲスト エージェントはコマンド <code>D:\InstallApp.bat -key 1234</code> を実行します。その後、この値を受け入れて使用するようスクリプト ファイルをプログラムできます。

基本ワークフロー ブループリントのカスタム プロパティ

vRealize Automation には、基本ワークフロー ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

表 1-10. 基本ワークフロー ブループリントのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.CDRom.Attach</code>	CD-ROM デバイスを使用せずにマシンをプロビジョニングする場合は、False に設定します。デフォルトは True です。
<code>VirtualMachine.Admin.ThinProvision</code>	ESX コンピュータ リソースでシン プロビジョニングを使用するかどうかを決定します。ディスク プロビジョニングは、基盤となるストレージから抽出します。シン プロビジョニングを使用する場合は、True に設定します。標準のプロビジョニングを使用する場合は、False に設定します。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。
<code>VirtualMachine.DiskN.StorageReservationPolicy</code>	ディスク <i>N</i> のストレージを検出するために使用するストレージ予約ポリシーを指定します。また、名前付きストレージ予約ポリシーをボリュームに割り当てます。このプロパティを使用するには、プロパティ名の <i>N</i> をボリューム番号に置き換えて、ストレージ予約ポリシー名をその値として指定します。このプロパティは、ブループリントで指定されているストレージ予約ポリシー名と同等です。ディスク番号は連番にする必要があります。このプロパティは、すべての仮想および vCloud 予約で有効です。このプロパティは、物理、Amazon、または OpenStack 予約では無効です。

表 1-10. 基本ワークフロー ブループリントのカスタム プロパティ （続き）

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Storage.AllocationType</code>	<p>収集したグループを単一データストアに保存します。分散環境では、ラウンドロビン方式でディスクが保存されます。次のいずれかの値を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>Collected</code> すべてのディスクをまとめて維持します。 ■ <code>Distributed</code> 予約で使用可能なデータストアまたはデータストア クラスタにディスクを配置できるようにします。 <p>この <code>VirtualMachine.Storage.AllocationType</code> プロパティを使用してデータストア クラスタを作成する方法の例については、ブログ記事の Keeping Multiple Disks Together を参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.Storage.Name</code>	<p>マシンが存在するストレージ パスを識別します。デフォルトは、マシンのプロビジョニングで使用された予約で指定されている値です。</p>
<code>VirtualMachine.Storage.ReserveMemory</code>	<p>vSwap ストレージ割り当てを管理して可用性を確保し、予約で割り当てを設定する場合は、<code>True</code> に設定します。vSwap 割り当ては、仮想マシンを作成または再構成するときに考慮されます。vSwap 割り当てチェックは、vSphere エンドポイントでのみ使用できます。</p> <p>注： vRealize Automation からマシンを作成またはプロビジョニングするときに <code>VirtualMachine.Storage.ReserveMemory</code> カスタム プロパティを指定しないと、スワップ容量の可用性は確保されません。すでにプロビジョニング済みのマシンにこのプロパティを追加するときに、割り当て済みの予約がいっぱいになっていると、予約での割り当てストレージが実際の割り当てストレージの容量を超過する可能性があります。</p>
<code>VMware.Hardware.Version</code>	<p>vSphere 設定で使用する仮想マシン ハードウェア バージョンを指定します。現在サポートされている値は、<code>vmx-04</code>、<code>vmx-07</code>、<code>vmx-08</code>、<code>vmx-09</code> および <code>vmx-10</code> です。このプロパティは、仮想マシンの作成フローおよびアップデートフローに適用され、基本ワークフローのブループリントでのみ使用できます。</p>

Linux キックスタート ブループリントのカスタム プロパティ

vRealize Automation には、Linux キックスタート ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

特定の vRealize Automation カスタム プロパティを、Linux キックスタート ブループリントで使用する必要があります。

表 1-11. Linux キックスタート ブループリントの必須カスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
<code>VMware.VirtualCenter.OperatingSystem</code>	<p>vCenter Server がマシンの作成時に使用する vCenter Server ゲスト OS のバージョン (<code>VirtualMachineGuestOsIdentifier</code>) を指定します。このオペレーティング システムのバージョンは、プロビジョニングされたマシンにインストールされるオペレーティング システムのバージョンと一致する必要があります。管理者は、いずれかのプロパティ セット (正しい <code>VMware.VirtualCenter.OperatingSystem</code> 値が含まれるように事前定義された <code>VMware[OS_Version]Properties</code> など) を使用してプロパティ グループを作成できます。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。</p> <p>関連情報については、vSphere API/SDK ドキュメントにある列挙タイプ <code>VirtualMachineGuestOsIdentifier</code> を参照してください。現在使用できる値のリストについては、vCenter Server のドキュメントを参照してください。</p>
<code>Image.ISO.Location</code>	<p>このプロパティの値は大文字と小文字が区別されます。起動元となる ISO イメージの場所を指定します。この値の形式は、プラットフォームによって異なります。詳細については、プラットフォームに付属しているドキュメントを参照してください。このプロパティは、WIM ベース プロビジョニング、Linux キックスタートおよび AutoYaST プロビジョニング、SCCM ベース プロビジョニングに必須です。</p>
<code>Image.ISO.Name</code>	<p>このプロパティの値は大文字と小文字が区別されます。起動元の ISO イメージの名前を指定します (例: <code>/ISO/Microsoft/WinPE.iso</code>)。この値の形式は、プラットフォームによって異なります。詳細については、プラットフォームに付属しているドキュメントを参照してください。このプロパティは、WIM ベース プロビジョニング、Linux キックスタートおよび AutoYaST プロビジョニング、SCCM ベース プロビジョニングに必須です。</p>
<code>Image.ISO.UserName</code>	<p>CIFS 共有にアクセスするユーザー名を、<code>username@domain</code> という形式で指定します。アクセスするのに認証が必要な CIFS 共有上にイメージが置かれている Dell iDRAC 統合用です。</p>
<code>Image.ISO.Password</code>	<p><code>Image.ISO.UserName</code> プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。アクセスするのに認証が必要な CIFS 共有上にイメージが置かれている Dell iDRAC 統合用です。</p>

オプションのカスタム プロパティも用意されています。

表 1-12. Linux キックスタート ブループリント用のオプションのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.Admin.ThinProvision	ESX コンピュータ リソースでシン プロビジョニングを使用するかどうかを決定します。ディスク プロビジョニングは、基盤となるストレージから抽出します。シン プロビジョニングを使用する場合は、True に設定します。標準のプロビジョニングを使用する場合は、False に設定します。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。
Machine.SSH	<p>このブループリントからプロビジョニングされた Linux マシンの vRealize Automation の [アイテム] ページにある [SSH を使用して接続] オプションを有効にするには、True に設定します。True に設定して、[RDP または SSH を使用した接続] によるマシン操作をブループリントで有効にした場合、ブループリントからプロビジョニングされるすべての Linux マシンが、[SSH を使用して接続] オプションを資格のあるユーザーに表示します。</p> <p>[SSH を使用して接続] オプションを使用するには、SSH をサポートするプラグインがブラウザにインストールされている必要があります（たとえば、Mozilla Firefox および Google Chrome 用の FireSSH SSH ターミナル クライアント）。プラグインが存在する場合、[SSH を使用して接続] を選択すると、SSH コンソールが開き、管理者の認証情報の入力が求められます。</p>

SCCM ブループリントのカスタム プロパティ

vRealize Automation には、SCCM ブループリントの制御に使用できるカスタム プロパティが含まれます。

SCCM ブループリントでは、特定のカスタム プロパティを使用する必要があります。

表 1-13. SCCM ブループリントの必須カスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
Image.ISO.Location	このプロパティの値は大文字と小文字が区別されます。起動元となる ISO イメージの場所を指定します。この値の形式は、プラットフォームによって異なります。詳細については、プラットフォームに付属しているドキュメントを参照してください。このプロパティは、WIM ベース プロビジョニング、Linux キックスタートおよび AutoYaST プロビジョニング、SCCM ベース プロビジョニングに必須です。
Image.ISO.Name	このプロパティの値は大文字と小文字が区別されます。起動元の ISO イメージの名前を指定します（例：/ISO/Microsoft/WinPE.iso）。この値の形式は、プラットフォームによって異なります。詳細については、プラットフォームに付属しているドキュメントを参照してください。このプロパティは、WIM ベース プロビジョニング、Linux キックスタートおよび AutoYaST プロビジョニング、SCCM ベース プロビジョニングに必須です。
Image.ISO.UserName	CIFS 共有にアクセスするユーザー名を、 <i>username@domain</i> という形式で指定します。アクセスするのに認証が必要な CIFS 共有上にイメージが置かれている Dell iDRAC 統合用です。
Image.ISO.Password	Image.ISO.UserName プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。アクセスするのに認証が必要な CIFS 共有上にイメージが置かれている Dell iDRAC 統合用です。

表 1-13. SCCM ブループリントの必須カスタム プロパティ（続き）

カスタム プロパティ	説明
SCCM.Collection.Name	オペレーティング システムの展開タスク シーケンスが含まれる SCCM コレクションの名前を指定します。
SCCM.Server.Name	このコレクションが存在する SCCM サーバの完全修飾ドメイン名を指定します（例：lab-sccm.lab.local）。
SCCM.Server.SiteCode	SCCM サーバのサイト コードを指定します。
SCCM.Server.UserName	SCCM サーバに管理者レベルでアクセスできるユーザーの名前を指定します。
SCCM.Server.Password	SCCM.Server.UserName プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。

SCCM ブループリントでは、特定のカスタム プロパティを頻繁に使用します。

表 1-14. SCCM ブループリントによく使用されるカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
SCCM.CustomVariable.Name	カスタム変数の値を指定します。 <i>Name</i> は、プロビジョニングされたマシンが SCCM コレクションに登録された後で SCCM タスク シーケンスが使用できるカスタム変数の名前です。値は、選択するカスタム変数によって決まります。統合で必要になる場合は、SCCM.RemoveCustomVariablePrefix を使用して、カスタム変数から SCCM.CustomVariable. プリフィックスを削除できます。
SCCM.RemoveCustomVariablePrefix	カスタム プロパティ SCCM.CustomVariable.Name を使用して作成した SCCM カスタム変数から SCCM.CustomVariable. プリフィックスを削除するには、 <i>true</i> に設定します。

WIM ブループリントのカスタム プロパティ

vRealize Automation には、WIM ブループリント用の追加の制御を提供するカスタム プロパティが含まれます。

WIM ブループリントには、特定の vRealize Automation カスタム プロパティが必要です。

表 1-15. WIM ブループリントに必要なカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
Image.ISO.Location	このプロパティの値は大文字と小文字が区別されます。起動元となる ISO イメージの場所を指定します。この値の形式は、プラットフォームによって異なります。詳細については、プラットフォームに付属しているドキュメントを参照してください。このプロパティは、WIM ベース プロビジョニング、Linux キックスタートおよび AutoYaST プロビジョニング、SCCM ベース プロビジョニングに必須です。
Image.ISO.Name	このプロパティの値は大文字と小文字が区別されます。起動元の ISO イメージの名前を指定します（例：/ISO/Microsoft/WinPE.iso）。この値の形式は、プラットフォームによって異なります。詳細については、プラットフォームに付属しているドキュメントを参照してください。このプロパティは、WIM ベース プロビジョニング、Linux キックスタートおよび AutoYaST プロビジョニング、SCCM ベース プロビジョニングに必須です。

表 1-15. WIM ブループリントに必要なカスタム プロパティ （続き）

カスタム プロパティ	説明
Image.ISO.UserName	CIFS 共有にアクセスするユーザー名を、 <code>username@domain</code> という形式で指定します。アクセスするのに認証が必要な CIFS 共有上にイメージが置かれている Dell iDRAC 統合用です。
Image.ISO.Password	Image.ISO.UserName プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。アクセスするのに認証が必要な CIFS 共有上にイメージが置かれている Dell iDRAC 統合用です。
Image.Network.Letter	プロビジョニングされたマシンで WIM イメージ バスがマッピングされているドライブを示す文字を指定します。デフォルト値は K です。
Image.WIM.Path	WIM ベースのプロビジョニングでイメージの展開元となる WIM ファイルの UNC バスを指定します。バスの形式は <code>\\server\share\$</code> となります（例： <code>\\lab-ad\dfs\$</code> ）。
Image.WIM.Name	Image.WIM.Path プロパティで示される WIM ファイルの名前を指定します。
Image.WIM.Index	WIM ファイルから正しいイメージを展開するために使用されるインデックスを指定します。
Image.Network.User	プロビジョニングされたマシン上のネットワーク ドライブに WIM イメージ バス (Image.WIM.Path) をマッピングするために使用されるユーザー名を指定します。これは、通常、ネットワーク共有へのアクセス権限があるドメイン アカウントです。
Image.Network.Password	Image.Network.User プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。
VirtualMachine.Admin.Owner	マシン所有者のユーザー名を指定します。
VMware.VirtualCenter.OperatingSystem	<p>vCenter Server がマシンの作成時に使用する vCenter Server ゲスト OS のバージョン (VirtualMachineGuestOsIdentifier) を指定します。このオペレーティング システムのバージョンは、プロビジョニングされたマシンにインストールされるオペレーティング システムのバージョンと一致する必要があります。管理者は、いずれかのプロパティ セット（正しい VMware.VirtualCenter.OperatingSystem 値が含まれるように事前定義された VMware[OS_Version]Properties など）を使用してプロパティ グループを作成できます。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。</p> <p>関連情報については、vSphere API/SDK ドキュメントにある列挙タイプ VirtualMachineGuestOsIdentifier を参照してください。現在使用できる値のリストについては、vCenter Server のドキュメントを参照してください。</p>

WIM ブループリントでは、オプションのカスタム プロパティも使用できます。

表 1-16. WIM ブループリントに共通するカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
SysPrep.Section.Key ■ SysPrep.GuiUnattended.AdminPassword ■ SysPrep.GuiUnattended.EncryptedAdminPassword ■ SysPrep.GuiUnattended.TimeZone	<p>プロビジョニングの WinPE ステージで、マシン上の SysPrep 応答ファイルに追加する情報を指定します。SysPrep 応答ファイルにすでに存在する情報は、これらのカスタム プロパティで上書きされます。</p> <p><i>Section</i> は、SysPrep 応答ファイルのセクションの名前を表します。たとえば、GuiUnattended や UserData のように指定します。<i>Key</i> は、セクション内のキー名を表します。たとえば、プロビジョニングされたマシンのタイムゾーンを西太平洋標準時に設定するには、カスタム プロパティ GuiUnattended.UserData.TimeZone を定義し、値を 275 に設定します。</p> <p>セクション、キー、および指定できる値の詳細な一覧については、System Preparation Utility for Windows のドキュメントを参照してください。</p> <p>次に示す <i>Section.Key</i> ペアは、WIM ベース プロビジョニングに対して指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ GuiUnattended <ul style="list-style-type: none"> ■ AdminPassword ■ EncryptedAdminPassword ■ TimeZone ■ UserData <ul style="list-style-type: none"> ■ ProductKey ■ FullName ■ ComputerName ■ OrgName ■ 識別名 <ul style="list-style-type: none"> ■ DomainAdmin ■ DomainAdminPassword ■ JoinDomain ■ JoinWorkgroup
Sysprep.Identification.DomainAdmin	Active Directory のターゲット ドメインに管理者レベルでアクセスできるユーザーの名前を指定します。vCloud Director または vCloud Air に送信する認証情報にはユーザー ドメインを含めないでください。
Sysprep.Identification.DomainAdminPassword	Sysprep.Identification.DomainAdmin プロパティに関連付けるパスワードを指定します。
Sysprep.Identification.JoinDomain	Active Directory に参加させるドメインの名前を指定します。
Sysprep.Identification.JoinWorkgroup	ドメインを使用しない場合は、参加させるワークグループの名前を指定します。
SysPrep.UserData.ComputerName	マシン名を指定します（例：lab-client005）。
SysPrep.UserData.FullName	ユーザーの氏名を指定します。
SysPrep.UserData.OrgName	ユーザーの組織名を指定します。

表 1-16. WIM ブループリントに共通するカスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
SysPrep.UserData.ProductKey	Windows のプロダクト キーを指定します。
VirtualMachine.Admin.ThinProvision	ESX コンピュータ リソースでシン プロビジョニングを使用するかどうかを決定します。ディスク プロビジョニングは、基盤となるストレージから抽出します。シン プロビジョニングを使用する場合は、True に設定します。標準のプロビジョニングを使用する場合は、False に設定します。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。

vCloud Air および vCloud Director のブループリントのカスタム プロパティ

特定のカスタム プロパティを、ブループリント内の vCloud Air または vCloud Director のマシン コンポーネント定義に追加できます。

vSphere マシン コンポーネントと NSX が関連付けられている場合、ユーザー インターフェイスでネットワーク、セキュリティ、およびロード バランシングの設定を使用します。[ネットワーク] または [セキュリティ] タブのないマシン コンポーネントの場合、デザイン キャンパスの [プロパティ] タブに、VirtualMachine.Network0.Name などのネットワークおよびセキュリティのカスタム プロパティを追加することができます。NSX ネットワーク、セキュリティ、ロード バランサのプロパティを適用できるのは vSphere マシンだけです。

表 1-17. デザイン キャンパス内の vCloud Air および vCloud Director のマシン コンポーネント用のカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
Sysprep.Identification.DomainAdmin	Active Directory のターゲット ドメインに管理者レベルでアクセスできるユーザーの名前を指定します。vCloud Director または vCloud Air に送信する認証情報にはユーザー ドメインを含めないでください。
Sysprep.Identification.DomainAdminPassword	Sysprep.Identification.DomainAdmin プロパティに関連付けるパスワードを指定します。
Sysprep.Identification.JoinDomain	Active Directory に参加させるドメインの名前を指定します。
VirtualMachine.DiskN.IsFixed	マシンの再構成時に特定のディスクを編集することを無効にします。特定のボリュームの編集容量オプションの表示を無効にする場合は、True に設定します。値 True の大文字と小文字は区別されます。N 値は、ディスクの 0 ベース インデックスです。 あるいは、データベースの VirtualMachineProperties テーブルで VirtualMachine.DiskN.IsFixed カスタム プロパティを True に設定するか、リポジトリ API を使用して、../Repository/Data/ManagementModelEntities.svc/VirtualMachines(guid'60D93A8A-F541-4CE0-A6C6-78973AC0F1D2')/VirtualMachineProperties などの URI 値を指定することができます。

表 1-17. デザイン キャンバス内の vCloud Air および vCloud Director のマシン コンポーネント用のカスタム プロパティ （続き）

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.DiskN.StorageReservationPolicy</code>	ディスク <i>N</i> のストレージを検出するために使用するストレージ予約ポリシーを指定します。また、名前付きストレージ予約ポリシーをボリュームに割り当てます。このプロパティを使用するには、プロパティ名の <i>N</i> をボリューム番号に置き換えて、ストレージ予約ポリシー名をその値として指定します。このプロパティは、ブループリントで指定されているストレージ予約ポリシー名と同等です。ディスク番号は連番にする必要があります。このプロパティは、すべての仮想および vCloud 予約で有効です。このプロパティは、物理、Amazon、または OpenStack 予約では無効です。
<code>VirtualMachine.EULA.AcceptAll</code>	vCloud Air または vCloud Director エンドポイントの仮想マシン テンプレートの EULA すべてがプロビジョニング中に承諾されるように指定するには、true に設定します。
<code>VirtualMachine.NetworkN.Name</code>	<p>接続先のネットワークの名前、たとえばマシンの接続先のネットワーク デバイス <i>N</i> を指定します。これは、ネットワーク インターフェイス カード (NIC) と同等です。</p> <p>デフォルトの場合、マシンがプロビジョニングされる予約で利用できるネットワーク バスからネットワークが割り当てられます。 [<code>VirtualMachine.NetworkN.AddressType</code>] も参照してください。</p> <p>ネットワーク デバイスが確実に特定のネットワークに接続されるようにするには、このプロパティの値を使用可能な予約のネットワーク名に設定します。たとえば、プロパティを <i>N</i> = 0 および <i>N</i> = 1 と指定すると、関連付けられている予約でネットワークが選択されている場合には、2 つの NIC とその割り当て値が得られます。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN</code> カスタム プロパティは、ブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p> <p>このカスタム プロパティを使用して、定義済みの使用可能なネットワークのリストから利用者の選択に基づいて <code>VirtualMachine.Network0.Name</code> を動的に設定する方法の例については、ブログ記事の Adding a Network Selection Drop-Down in vRA 7 を参照してください。</p> <p>詳細については、ネットワークおよびセキュリティのカスタム プロパティ を参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.AddressType</code>	<p>ネットワーク プロバイダに対して IP アドレスを割り当てる方法を指定します。ここでの <code>NetworkN</code> は 0 から始まるネットワーク番号です。使用できる値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DHCP ■ Static ■ MANUAL (vCloud Air と vCloud Director でのみ使用可能) <p>このプロパティは、ブループリントにおいて、vCloud Air、vCloud Director、および vSphere マシン コンポーネントを構成する場合に使用できます。[<code>VirtualMachine.NetworkN.Name</code>] も参照してください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>

表 1-17. デザイン キャンバス内の vCloud Air および vCloud Director のマシン コンポーネント用のカスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.Reconfigure.DisableHotCpu	<p>マシンの再構成アクションで指定されたマシンが再起動されるように指定するには、true に設定します。デフォルトでは、マシンの再構成アクション時にマシンは再起動されません。</p> <p>CPU、メモリ、またはストレージのホット アドを実行すると、vSphere でマシンまたはテンプレートの Hot Add 設定が有効になっていなければ、マシンの再構成アクションに失敗し、マシンが再起動されません。VirtualMachine.Reconfigure.DisableHotCpu=true を vRealize Automation ブループリントのマシン コンポーネントに追加して Hot Add 設定を無効にし、vSphere の Hot Add 設定に関係なくマシンを強制的に再起動することができます。このカスタム プロパティは、ハードウェアの再構成をサポートするマシン タイプ、すなわち vSphere、vCloud Air、および vCloud Director でのみ使用できます。</p>
VCloud.Lease.Sync.TimeBufferMins	<p>vCloud Director または vCloud Air でプロビジョニングされたマシンで、vCloud Director または vCloud Air でその期間内に有効期限が切れるように設定されている場合にのみ vCloud Director と vRealize Automation 間のリースの同期が行われるように、コンピュータ リソースの整数のしきい値を指定します。競合が見つかったと、リース値は vRealize Automation で定義されているリースの長さに合わせて同期されます。VCloud.Lease.Sync.TimeBufferMins のデフォルト値は 720 分 (12 時間) です。</p> <p>VCloud.Lease.Sync.TimeBufferMins が存在しない場合、デフォルト値が使用されます。たとえば、デフォルト値が使用される場合、vRealize Automation によってリースの同期チェック ワークフローが 45 分 (ワークフローのデフォルト) ごとに実行され、12 時間以内に有効期限が切れるように設定されたマシンのリースのみが、vRealize Automation で定義されているリースの長さに合わせて変更されます。</p>
VCloud.Owner.UseEndpointAccount	<p>プロビジョニングおよびインポート操作で vCloud Air または vCloud Director のマシン所有者としてエンドポイント アカウントを割り当てる場合は、true に設定します。所有権の変更操作の場合、その所有者はエンドポイントでは変更されません。指定しなかったり、false に設定されていたりする場合、vRealize Automation の所有者はマシン所有者です。</p>
VCloud.Template.MakeIdenticalCopy	<p>マシン プロビジョニングで vCloud Air または vCloud Director テンプレートの同一コピーをクローン作成する場合は、true に設定します。マシンは、テンプレートの同一コピーとしてプロビジョニングされます。ストレージ パスを含め、テンプレートで指定される設定は、ブループリントで指定される設定より優先されます。テンプレートからの唯一の変更点は、ブループリントで指定されたマシン プリフィックスから生成される、クローン作成されたマシンの名前です。</p> <p>同一コピーとしてプロビジョニングされる vCloud Air または vCloud Director マシンでは、vRealize Automation 予約では使用することができないネットワークとストレージ プロファイルを使用できます。不明な予約の割り当てが発生するのを防止するため、テンプレートで指定されているストレージ プロファイルまたはネットワークが予約に含まれていることを確認してください。</p>

表 1-17. デザイン キャンバス内の vCloud Air および vCloud Director のマシン コンポーネント用のカスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
VMware.SCSI.Sharing	<p>マシンの VMware SCSI バスの共有モードを指定します。使用可能な値は、VirtualSCSISharing ENUM 値に基づいており、noSharing、physicalSharing、および virtualSharing などが含まれます。</p> <p>VMware.SCSI.Sharing プロパティは、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローでは使用できません。ブループリント デザイン キャンバスでマシン コンポーネントを設定するときに、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローを指定する場合は、VMware.SCSI.Sharing プロパティを使用できません。</p>
VMware.SCSI.Type	<p>ブループリントの vCloud Air、vCloud Director、または vSphere マシン コンポーネントの場合は、以下の値のいずれかを使用して、SCSI マシン タイプを指定します (大文字と小文字は区別されます)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ buslogic <p>仮想ディスクに BusLogic エミュレーションを使用します。</p> ■ lsilogic <p>仮想ディスクに LSILogic エミュレーションを使用します (デフォルト)。</p> ■ lsilogicsas <p>仮想ディスクに LSILogic SAS 1068 エミュレーションを使用します。</p> ■ pvscsi <p>仮想ディスクに準仮想化エミュレーションを使用します。</p> ■ none <p>このマシンの SCSI コントローラが存在しない場合に使用します。</p> <p>VMware.SCSI.Type プロパティは、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローでは使用できません。ブループリント デザイン キャンバスでマシン コンポーネントを設定するときに、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローを指定する場合は、VMware.SCSI.Type プロパティを使用できません。</p>

ネットワークおよびセキュリティのカスタム プロパティ

ネットワークの vRealize Automation カスタム プロパティでは、マシン上の特定のネットワーク デバイスの構成を指定します。

vSphere マシン コンポーネントと NSX が関連付けられている場合、ユーザー インターフェイスでネットワーク、セキュリティ、およびロード バランシングの設定を使用します。[ネットワーク] または [セキュリティ] タブのないマシン コンポーネントの場合、デザイン キャンバスの [プロパティ] タブに、VirtualMachine.Network0.Name などのネットワークおよびセキュリティのカスタム プロパティを追加することができます。NSX ネットワーク、セキュリティ、ロード バランサのプロパティを適用できるのは vSphere マシンだけです。

マシンの割り当て中に、ネットワーク割り当てが実行されます。vRealize Automation は、ブループリントからネットワーク情報を取得します。複数のネットワークを割り当てる場合は、マシン ブループリントの `VirtualMachine.NetworkN.Name` カスタム プロパティを使用します。カスタム プロパティを指定しない場合、ラウンド ロビン方式と選択された予約を併用して選ばれた、1つのネットワークのみが割り当てられます。

注： 次のプロパティは例外ですが、テーブル内のプロパティは Amazon Web Services には適用されません。

- `agent.download.url`
- `software.agent.service.url`
- `software.ebs.url`

注： オンデマンド ネットワークを示す、ネットワークに固有のカスタム プロパティはサポートされていません。たとえば、オンデマンド NAT およびオンデマンド ルーティング ネットワーク コンポーネントに対して `VirtualMachine.Network0.NetworkProfileName` のようなネットワーク カスタム プロパティを使用することはできません。

マシンには、デフォルトで、`VirtualMachine.Network0.Name` プロパティを使用して構成された1つのネットワーク デバイスがあります。追加のネットワーク デバイスは、`VirtualMachine.NetworkN.Name` カスタム プロパティを使用して設定します (N はネットワーク番号です)。

ネットワーク プロパティの番号は、0 から始まる連番である必要があります。たとえば、`VirtualMachine.Network0` と `VirtualMachine.Network2` にだけカスタム プロパティを指定すると、`VirtualMachine.Network2` のプロパティは無視されます。これは、1つ前のネットワーク `VirtualMachine.Network1` が指定されなかったためです。

vCloud Networking and Security のジェネラル サポートは終了しましたが、VCNS カスタム プロパティは NSX の用途に対して引き続き有効です。詳細については、[ナレッジベースの記事 KB2144733](#) を参照してください。

表 1-18. ネットワーク設定のカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
agent.download.url	<p>ポート転送を使用する場合は、Amazon AWS トンネル マシンのプライベート IP アドレスおよびソフトウェア エージェント ファイルのポートを指定します (たとえば https://Private_IP:1443/software-service/resources/nobel-agent.jar)。</p> <p>展開環境で VPN エージェントの URL を指定します。URL フォーマットは https:// Private_IP:1443/software-service//resources/nobel-agent.jar です。</p> <p>このプロパティは、software.agent.service.url および software.ebs.url と組み合わせて、予約またはコンピューティング リソース エンドポイントに追加することができます。また、PAT または NAT 変換、およびポート転送を使用するときに、このプロパティを使用してプライベート アドレスおよびポートを指定することができます。</p>
NSX.Edge.ApplianceSize	<p>プロビジョニングされたマシンまたは展開に可能な NSX Edge アプライアンスのサイズ タイプを指定します。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ compact <p>小規模な展開、事前検証 (POC)、および 1 つのサービスで使します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU = 1 ■ RAM = 512 MB ■ ディスク = 512 MB ■ large <p>小規模から中規模、またはマルチ テナントの展開の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU = 2 ■ RAM = 1 GB ■ ディスク = 512 MB ■ quadlarge <p>高スループット ECMP (equal-cost multi-path routing) または高パフォーマンス ファイアウォールの場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU = 4 ■ RAM = 1 GB ■ ディスク = 512 MB ■ xlarge <p>L7 ロード バランシングと専用コアの展開の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU = 6 ■ RAM = 8 GB ■ ディスク = 4.5 GB (4 GB スワップ) <p>関連情報については、System Requirements for NSX を参照してください。</p>

表 1-18. ネットワーク設定のカスタム プロパティ （続き）

カスタム プロパティ	説明
NSX.Edge.HighAvailability	<p>true (NSX.Edge.HighAvailability =true) に設定すると、ブループリントから展開された NSX Edge マシンで高可用性 (HA) モードが有効になります。</p> <p>NSX.Edge.HighAvailability.PortGroup =<i>port_group_name</i> とともに使用すると、このプロパティによりブループリントのオーサリング中に NSX Edge を設定できます。</p> <p>このプロパティは、vRealize Automation ブループリントの NSX ロード バランサ コンポーネントまたは vRealize Automation ブループリント自体に追加できます。</p> <p>NSX.Edge.HighAvailability.PortGroup = <i>port_group_name</i> と組み合わせて使用する必要があります。</p>
NSX.Edge.HighAvailability.PortGroup	<p>指定されたポート グループ名に接続された内部インターフェイスまたは内部 vNIC を作成します。たとえば、</p> <p>NSX.Edge.HighAvailability.PortGroup=VM Network です。</p> <p>ここで、VM Network は HA（高可用性）分散（vLAN がサポート）または NSX 論理スイッチ ポート グループです。NSX HA モードでは、少なくとも 1 つの内部ネットワーク インターフェイス、または vNIC が必要です。</p> <p>NSX.Edge.HighAvailability =true とともに使用すると、このプロパティによりブループリントのオーサリング中に NSX Edge に高可用性 (HA) を設定できます。</p> <p>HA に対応したワン アーム ロード バランサを使用している場合、HA に別のポート グループを指定する必要があります。</p> <p>注： ポート グループのプロパティの使用がポート グループの通常の展開の使用と競合し、次のエラーが表示されるため、指定したポート グループのネットワークは、ポート グループのメンバーにはなりません。</p> <div data-bbox="826 1184 1233 1239" style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin: 10px 0;"> Portgroup must be unique within an Edge... </div> <p>NSX.Edge.HighAvailability =true と組み合わせて使用する必要があります。</p>

表 1-18. ネットワーク設定のカスタム プロパティ （続き）

カスタム プロパティ	説明
NSX.Validation.Disable.Single.Edge.Uplink	<p>true に設定すると、次の条件を確認する NSX 検証が無効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ブループリントのすべてのオンデマンド NAT ネットワークのソースが同じ外部ネットワークであること。 ■ ロード バランサの VIP を使用するブループリントのすべてのオンデマンド ルーティング ネットワークのソースが同じ外部ネットワークであること。 ■ ブループリントのすべてのオンデマンド ロード バランサ コンポーネントが、同じ外部ネットワークまたは同一の外部ネットワークによってサポートされているオンデマンド ネットワークの仮想 IP アドレスを持っていること。 <p>この検証チェックを無効にすると展開が成功する場合がありますが、一部のネットワーク コンポーネントにアクセスできなくなる可能性があります。</p> <p>存在しない場合または false に設定されている場合、検証チェックは有効になります（デフォルト）。</p> <p>単一の NSX Edge は、アップリンク ネットワークとして 1 つの外部ネットワークのみをサポートできます。同じ外部ネットワークからの複数の IP アドレスがサポートされます。ブループリントには、任意の数の外部またはオンデマンドのネットワーク コンポーネントを含めることができますが、NSX は 1 つの外部ネットワークのみをアップリンク ネットワークとしてサポートします。</p> <p>このプロパティは、ブループリント レベルでのみ指定できます。ブループリント キャンパスのコンポーネントで指定することはできません。</p>
NSX.Validation.Disable.Blueprint.NSXT	<p>true に設定されている場合、ブループリントの [完了] アクションに対するすべての NSX-T 検証が無効になります。</p> <p>存在しない場合または false に設定されている場合、NSX-T 検証チェックは有効になります（デフォルト）。</p> <p>たとえば、ブループリントにサブネットの重複がある場合にブループリントで [完了] をクリックすると、エラー メッセージが表示され、重複が原因でブループリントを保存できても終了することができません。このような場合には、[ブループリントのプロパティ] ページを使用して NSX.Validation.Disable.Blueprint.NSXT を追加し、ブループリントを終了させることができます。</p> <p>このプロパティは、ブループリントの [完了] アクションに対する NSX-T 検証のみを無効にします。</p>
software.agent.service.url	<p>ポート転送を使用する場合は、Amazon AWS トンネル マシンのプライベート IP アドレスおよび vRealize Automation ソフトウェア サービス API のポートを指定します（たとえば https://Private_IP:1443/software-service/api）。</p> <p>このプロパティは、software.ebs.url および agent.download.url と組み合わせて、予約またはコンピューティング リソース エンドポイントに追加することができます。また、PAT または NAT、およびポート転送を使用するときに、このプロパティを使用してプライベート アドレスおよびポートを指定することができます。</p>

表 1-18. ネットワーク設定のカスタム プロパティ（続き）

カスタム プロパティ	説明
<code>software.ebs.url</code>	<p>ポート転送を使用する場合は、Amazon AWS トンネル マシンのプライベート IP アドレスおよび vRealize Automation イベント ブローカ サービスを指定します（たとえば <code>https://Private_IP:1443/event-broker-service/api</code>）。</p> <p>このプロパティは、<code>software.agent.service.url</code> および <code>agent.download.url</code> と組み合わせて、予約またはコンピューティング リソース エンドポイントに追加することができます。また、PAT または NAT、およびポート転送を使用するときに、このプロパティを使用してプライベート アドレスおよびポートを指定することができます。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.Address</code>	<p>固定 IP アドレスを使用してプロビジョニングされるマシンのネットワーク デバイス <i>N</i> の IP アドレスを指定します。</p> <p>Amazon については、「<code>Amazon.elasticIpAddress.ipAddress</code>」を参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddressType</code>	<p>これにより、ネットワーク デバイス <i>N</i> の MAC アドレスが生成されるのか、またはユーザー定義（固定）なのかを指定します。このプロパティは、クローン作成で使用できます。</p> <p>デフォルト値は <code>generated</code> です。値が <code>static</code> の場合は、<code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddress</code> を使用して MAC アドレスも指定する必要があります。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN</code> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddress</code>	<p>ネットワーク デバイス <i>N</i> の MAC アドレスを指定します。このプロパティは、クローン作成で使用できます。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddressType</code> の値が <code>generated</code> の場合、このプロパティには生成されたアドレスが含まれません。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddressType</code> の値が <code>static</code> の場合は、このプロパティで MAC アドレスを指定します。ESX Server ホストでプロビジョニングされた仮想マシンの場合、アドレスは、VMware で指定された範囲内に収まっている必要があります。詳細については、vSphere のドキュメントを参照してください。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN</code> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>

表 1-18. ネットワーク設定のカスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.NetworkN.Name	<p>接続先のネットワークの名前、たとえばマシンの接続先のネットワーク デバイス <i>N</i> を指定します。これは、ネットワーク インターフェイス カード (NIC) と同等です。</p> <p>デフォルトの場合、マシンがプロビジョニングされる予約で利用できるネットワーク バスからネットワークが割り当てられます。</p> <p>[VirtualMachine.NetworkN.AddressType]も参照してください。</p> <p>ネットワーク デバイスが確実に特定のネットワークに接続されるようにするには、このプロパティの値を使用可能な予約のネットワーク名に設定します。たとえば、プロパティを <i>N</i> = 0 および <i>N</i> = 1 と指定すると、関連付けられている予約でネットワークが選択されている場合には、2 つの NIC とその割り当て値が得られます。</p> <p>VirtualMachine.NetworkN カスタム プロパティは、ブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p> <p>このカスタム プロパティを使用して、定義済みの使用可能なネットワークのリストから利用者の選択に基づいて VirtualMachine.Network0.Name を動的に設定する方法の例については、ブログ記事の Adding a Network Selection Drop-Down in vRA 7 を参照してください。</p>
VirtualMachine.NetworkN.PortID	<p>vSphere Distributed Switch で dvPort グループを使用する場合、ネットワーク デバイス <i>N</i> で使用するポート ID を指定します。</p> <p>VirtualMachine.NetworkN カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>

表 1-18. ネットワーク設定のカスタム プロパティ（続き）

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.NetworkN.NetworkProfileName	<p>ネットワーク プロファイルの名前を指定します。このネットワーク プロファイルに基づいて、固定 IP アドレスをネットワーク デバイス <i>N</i> に割り当てたり、クローン作成されたマシンのネットワーク デバイス <i>N</i> に割り当て可能な固定 IP アドレスの範囲を取得したりします。ここで、最初のデバイスでは <i>N</i>=0、2 番目のデバイスは 1、以降同様に指定していきます。</p> <p>プロパティが示すネットワーク プロファイルは、IP アドレスを割り当てるために使用されます。このプロパティにより、マシンの接続先ネットワークが予約に基づいて決定されます。</p> <p>ネットワークが割り当てられた後でこのプロパティ値を変更しても、指定のマシンに割り当てられる IP アドレス値には影響しません。</p> <p>仮想マシンの WIM ベース プロビジョニングでは、このプロパティを使用して、ネットワーク プロファイルおよびネットワーク インターフェイスを指定できます。または、[仮想予約] ページの [ネットワーク] セクションを使用することもできます。</p> <p>ネットワーク プロファイルの次の属性を使用して、クローン作成ブループリントで固定 IP アドレスを割り当てることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VirtualMachine.NetworkN.SubnetMask ■ VirtualMachine.NetworkN.Gateway ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSuffix ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSearchSuffixes <p>VirtualMachine.Network<i>N</i> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。</p> <p>このカスタム プロパティは、オンデマンド NAT やオンデマンド ルーティング ネットワークのプロファイル名を定義するためには使用できません。オンデマンド ネットワーク プロファイル名は割り当て時（プロビジョニング中）に生成されるため、ブループリントの作成または編集中にはそれらの名前はまだ不明です。NSX オンデマンド ネットワーク情報を指定するには、vSphere マシン コンポーネント用のブループリント デザイン キャンバスで該当するネットワーク コンポーネントを使用します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ VirtualMachine.NetworkN.SubnetMask ■ VirtualMachine.NetworkN.Gateway ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSuffix ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSearchSuffixes 	<p>VirtualMachine.NetworkN.NetworkProfileName で指定されたネットワーク プロファイルの属性を構成します。</p> <p>VirtualMachine.Network<i>N</i> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。</p>

表 1-18. ネットワーク設定のカスタム プロパティ （続き）

カスタム プロパティ	説明
VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names. <i>name</i>	<p>プロビジョニング中に仮想マシンが割り当てられる NSX ロード バランシング プールを指定します。仮想マシンは、指定したすべてのプールの全サービス ポートに割り当てられます。値は <i>edge/pool</i> 名またはコンマで区切られた <i>edge/pool</i> 名のリストになります。名前の大文字と小文字は区別されます。</p> <p>注： VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names のカスタム プロパティを使用して、マシン IP アドレスを既存のロード バランサに追加できます。vRealize Automation および NSX は、指定の Edge ロード バランサ プールの最初のメンバーを使用し、新しいメンバー ポートを特定してポート設定を監視します。ただし、NSX 6.2 ではメンバーのポート設定を指定する必要がありません。NSX 6.2 で VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names を使用して、マシンを既存のプールに追加する場合にプロビジョニングが失敗しないように、NSX でロード バランサ プールの最初のメンバーにポート値を指定する必要があります。</p> <p>名前を追加すると、複数のバージョンのカスタム プロパティを作成できます。たとえば、次のプロパティでは、一般用途向けに設定されるロード バランシング プールや、高、中、低のパフォーマンス要件があるマシンに設定されるロード バランシング プールを一覧表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names ■ VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names.moderate ■ VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names.high ■ VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names.low
VCNS.SecurityGroup.Names. <i>name</i>	<p>プロビジョニング中に仮想マシンが割り当てられる 1 つ以上の NSX セキュリティ グループを指定します。値はセキュリティ グループ名またはコンマで区切られた名前のリストになります。名前の大文字と小文字は区別されます。</p> <p>名前を追加すると、複数のバージョンのプロパティを作成できます。これは、個別に使用することも、組み合わせて使用することもできます。たとえば、次のプロパティでは、一般用途、販売部、およびサポートのためのセキュリティ グループを一覧表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VCNS.SecurityGroup.Names ■ VCNS.SecurityGroup.Names.sales ■ VCNS.SecurityGroup.Names.support

表 1-18. ネットワーク設定のカスタム プロパティ（続き）

カスタム プロパティ	説明
VCNS.SecurityTag.Names.name	<p>プロビジョニング中に仮想マシンが関連付けられる 1 つ以上の NSX セキュリティ タグを指定します。この値は、セキュリティ タグの 1 つの名前、またはコンマ区切りの名前のリストです。名前の大文字と小文字は区別されます。</p> <p>名前を追加すると、複数のバージョンのプロパティを作成できます。これは、個別に使用することも、組み合わせて使用することもできます。たとえば、次のプロパティでは、一般用途、販売部、およびサポートのためのセキュリティ タグを一覧表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VCNS.SecurityTag.Names ■ VCNS.SecurityTag.Names.sales ■ VCNS.SecurityTag.Names.support
VMware.Endpoint.NSX.HideDiscoveredSecurityObjects	<p>true に設定すると、セキュリティ オブジェクトが関連付けられている NSX エンドポイントのアクティブなテナントで新たに検出されたセキュリティ オブジェクトを非表示にできます。設定しない場合は、セキュリティ オブジェクトが予約のあるエンドポイントに対するものであるときに、データの収集後にすべての新しいセキュリティ オブジェクトが使用可能になります。セキュリティ オブジェクトを単一のテナントに割り当てたり、すべてのテナントに非表示にしたりする場合に、このオプションを使用して、ユーザーがこれらのオブジェクトにアクセスできないようにすることが可能です。false に設定すると、グローバルに切り替わり、セキュリティ オブジェクトが予約のあるエンドポイントに対するものであるときに、データの収集後にすべての新しいセキュリティ オブジェクトを全テナントに対して使用可能にできます。</p> <p>有効にするには、ファブリック管理者が、関連付けられている NSX エンドポイント（vSphere エンドポイントに関連付けられている）に VMware.Endpoint.NSX.HideDiscoveredSecurityObjects カスタム プロパティを追加します。設定は、次のインベントリ データ収集から適用されます。既存のセキュリティ オブジェクトは変更されません。</p> <p>現在の vRealize Automation リリースへのアップグレード後の既存のセキュリティ オブジェクトなど、データ収集済みのセキュリティ オブジェクトのテナント設定を変更する際は、vRealize Automation REST API または vRealize CloudClient を使用してプログラムでセキュリティ オブジェクトのテナント ID 設定を編集することができます。NSX エンドポイントに対して使用可能なテナント ID 設定は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ "<global>" - セキュリティ オブジェクトはすべてのテナントで使用できます。これは、本リリースにアップグレードした後の既存のセキュリティ オブジェクトと、新規で作成したすべてのセキュリティ オブジェクトの場合のデフォルト設定です。 ■ "<unscoped>" - セキュリティ オブジェクトはすべてのテナントで使用できません。システム管理者のみがセキュリティ オブジェクトにアクセスできます。これは、特定のテナントに最終的に割り当てるセキュリティ オブジェクトを定義する際に最適な設定です。 ■ "tenant_id_name" - セキュリティ オブジェクトは単一の、名前付きのテナントでのみ使用できます。

コンテナのカスタム プロパティとプロパティ グループ

定義済みのプロパティ グループを vRealize Automation ブループリント内のコンテナ コンポーネントに追加することができます。これらのプロパティを含むブループリントを使用してマシンをプロビジョニングすると、プロビジョニングしたマシンが、Docker コンテナのホスト マシンとして登録されます。

vRealize Automation のコンテナ では、次の 2 つのプロパティ グループのコンテナ固有のカスタム プロパティを提供しています。コンテナ コンポーネントをブループリントに追加すると、これらのプロパティ グループをコンテナに追加して、プロビジョニングしたマシンをコンテナ ホストとして登録できます。

- コンテナ ホストのプロパティと証明書認証
- コンテナ ホストのプロパティとユーザー/パスワード認証

これらのプロパティ グループは、[管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [プロパティ グループ] を選択すると vRealize Automation で表示されます。

プロパティ グループはすべてのテナントが共有するものであるため、マルチテナント環境で作業している場合は、プロパティのクローン作成とカスタマイズを検討してください。プロパティ グループとグループ内のプロパティに一意の名前を付けることで、それらを編集して特定のテナント用にカスタムの値を定義することができます。

最もよく使用されているプロパティは `Container.Auth.PublicKey` と `Container.Auth.PrivateKey` です。これらを使用して、コンテナ管理者はコンテナ ホストでの認証用のクライアント証明書を提供します。

表 1-19. コンテナ カスタム プロパティ

プロパティ	説明
<code>containers.ipam.driver</code>	コンテナ専用です。コンテナ ネットワーク コンポーネントをブループリントに追加するときに使用する IP アドレス管理ドライバを指定します。サポートされる値は、使用するコンテナ ホスト環境にインストールされているドライバによって異なります。たとえば、サポートされる値は、コンテナ ホストにインストールされている IP アドレス管理プラグインに応じて <code>infoblox</code> または <code>calico</code> になる場合があります。
<code>containers.network.driver</code>	コンテナ専用です。コンテナ ネットワーク コンポーネントをブループリントに追加するときに使用するネットワーク ドライバを指定します。サポートされる値は、使用するコンテナ ホスト環境にインストールされているドライバによって異なります。デフォルトでは、Docker によって提供されるネットワーク ドライバには <code>bridge</code> 、 <code>overlay</code> 、および <code>macvlan</code> が含まれ、Virtual Container Host (VCH) によって提供されるネットワーク ドライバには <code>bridge</code> ドライバが含まれています。コンテナ ホストにインストールされているネットワーク プラグインに応じて、 <code>weave</code> や <code>calico</code> などのサードパーティのネットワーク ドライバも使用できます。
<code>Container</code>	コンテナ専用です。デフォルト値は <code>App.Docker</code> であり、必須です。このプロパティは変更しないでください。
<code>Container.Auth.User</code>	コンテナ専用です。コンテナ ホストに接続するためのユーザー名を指定します。
<code>Container.Auth.Password</code>	コンテナ専用です。ユーザー名のパスワード、または使用するパブリック キーまたはプライベート キーのいずれかのパスワードを指定します。暗号化されたプロパティ値がサポートされています。
<code>Container.Auth.PublicKey</code>	コンテナ専用です。コンテナ ホストに接続するためのパブリック キーを指定します。

表 1-19. コンテナ カスタム プロパティ (続き)

プロパティ	説明
Container.Auth.PrivateKey	コンテナ専用です。コンテナ ホストに接続するためのプライベート キーを指定します。暗号化されたプロパティ値がサポートされています。
Container.Connection.Protocol	コンテナ専用です。通信プロトコルを指定します。デフォルト値は API であり、必須です。このプロパティは変更しないでください。
Container.Connection.Scheme	コンテナ専用です。通信方法を指定します。デフォルトは https です。
Container.Connection.Port	コンテナ専用です。コンテナ 接続ポートを指定します。デフォルトは 2376 です。
Extensibility.Lifecycle.Properties.VMPSMasterWorkflow32.MachineActivated	コンテナ専用です。すべての コンテナ プロパティを公開し、プロビジョニングされたホストを登録するために使用するイベント ブローカ プロパティを指定します。デフォルト値は Container* であり、必須です。このプロパティは変更しないでください。
Extensibility.Lifecycle.Properties.VMPSMasterWorkflow32.Disposing	コンテナ専用です。上記のすべての コンテナ プロパティを公開し、プロビジョニングされたホストを登録解除するために使用するイベント ブローカ プロパティを指定します。デフォルト値は Container* であり、必須です。このプロパティは変更しないでください。

PXE プロビジョニングのカスタム プロパティ

PXE は、Cisco UCS Manager でサポートされている唯一のプロビジョニング方法です。ネットワーク ブートストラップ プログラムと vRealize Automation カスタム プロパティを併用して、WIM、SCCM、または Linux キックスタート プロビジョニングを開始できます。またカスタム プロパティを使用して、独自の PowerShell スクリプトを呼び出すこともできます。Linux キックスタート プロビジョニングでは、カスタム プロパティは必要ありません。

PowerShell スクリプトを使用したプロビジョニングのカスタム プロパティ

これらのプロパティを使用して、PowerShell スクリプトを呼び出すことができます。

表 1-20. PowerShell スクリプトを呼び出すためのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
Pxe.Setup.ScriptName	PXE ネットワーク起動プログラムを使用して開始する前に、マシン上で実行するカスタム EPI PowerShell スクリプトを指定します。この値は、スクリプトが Model Manager にアップロードされるときにスクリプトに割り当てられる名前です (例: setup.ps1)。
Pxe.Clean.ScriptName	vRealize Automation Model Manager にインストールされた EPI PowerShell スクリプトの名前を指定し、マシンのプロビジョニング後にマシン上で実行します。この値は、スクリプトが Model Manager にアップロードされるときにスクリプトに割り当てられる名前です (例: clean.ps1)。

PXE および SCCM プロビジョニングのカスタム プロパティ

これらのプロパティを使用して、PXE および SCCM プロビジョニングを実行できます。

表 1-21. PXE および SCCM プロビジョニングのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
SCCM.Collection.Name	オペレーティング システムの展開タスク シーケンスが含まれる SCCM コレクションの名前を指定します。
SCCM.Server.Name	このコレクションが存在する SCCM サーバの完全修飾ドメイン名を指定します (例: lab-sccm.lab.local)。
SCCM.Server.SiteCode	SCCM サーバのサイト コードを指定します。
SCCM.Server.UserName	SCCM サーバに管理者レベルでアクセスできるユーザーの名前を指定します。
SCCM.Server.Password	SCCM.Server.UserName プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。
SCCM.CustomVariable.	カスタム変数の値を指定します。 <i>Name</i> は、プロビジョニングされたマシンが SCCM コレクションに登録された後で SCCM タスク シーケンスが使用できるカスタム変数の名前です。値は、選択するカスタム変数によって決まります。統合で必要になる場合は、SCCM.RemoveCustomVariablePrefix を使用して、カスタム変数から SCCM.CustomVariable. プリフィックスを削除できます。

PXE および WIM プロビジョニングのカスタム プロパティ

これらのプロパティを使用して、PXE および WIM プロビジョニングを実行できます。

表 1-22. PXE および WIM プロビジョニングのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
Image.Network.Letter	プロビジョニングされたマシンで WIM イメージ バスがマッピングされているドライブを示す文字を指定します。デフォルト値は K です。
Image.WIM.Path	WIM ベースのプロビジョニングでイメージの展開元となる WIM ファイルの UNC バスを指定します。 バスの形式は \\server\share\$ となります (例: \\lab-ad\dfs\$)。
Image.WIM.Name	Image.WIM.Path プロパティで示される WIM ファイルの名前を指定します。
Image.WIM.Index	WIM ファイルから正しいイメージを展開するために使用されるインデックスを指定します。
Image.Network.User	プロビジョニングされたマシン上のネットワーク ドライブに WIM イメージ バス (Image.WIM.Path) をマッピングするために使用されるユーザー名を指定します。これは、通常、ネットワーク共有へのアクセス権限があるドメイン アカウントです。
Image.Network.Password	Image.Network.User プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。

表 1-22. PXE および WIM プロビジョニングのカスタム プロパティ （続き）

カスタム プロパティ	説明
<p>SysPrep.<i>Section.Key</i></p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SysPrep.GuiUnattended.AdminPassword ■ SysPrep.GuiUnattended.EncryptedAdminPassword ■ SysPrep.GuiUnattended.TimeZone 	<p>プロビジョニングの WinPE ステージで、マシン上の SysPrep 応答ファイルに追加する情報を指定します。SysPrep 応答ファイルにすでに存在する情報は、これらのカスタム プロパティで上書きされます。</p> <p><i>Section</i> は、SysPrep 応答ファイルのセクションの名前を表します。たとえば、GuiUnattended や UserData のように指定します。<i>Key</i> は、セクション内のキー名を表します。たとえば、プロビジョニングされたマシンのタイムゾーンを西太平洋標準時に設定するには、カスタム プロパティ GuiUnattended.UserData.TimeZone を定義し、値を 275 に設定します。</p> <p>セクション、キー、および指定できる値の詳細な一覧については、System Preparation Utility for Windows のドキュメントを参照してください。</p> <p>次に示す <i>Section.Key</i> ペアは、WIM ベース プロビジョニングに対して指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ GuiUnattended <ul style="list-style-type: none"> ■ AdminPassword ■ EncryptedAdminPassword ■ TimeZone ■ UserData <ul style="list-style-type: none"> ■ ProductKey ■ FullName ■ ComputerName ■ OrgName ■ 識別名 <ul style="list-style-type: none"> ■ DomainAdmin ■ DomainAdminPassword ■ JoinDomain ■ JoinWorkgroup
Sysprep.Identification.DomainAdmin	Active Directory のターゲット ドメインに管理者レベルでアクセスできるユーザーの名前を指定します。vCloud Director または vCloud Air に送信する認証情報にはユーザー ドメインを含めないでください。
Sysprep.Identification.DomainAdminPassword	Sysprep.Identification.DomainAdmin プロパティに関連付けるパスワードを指定します。
Sysprep.Identification.JoinDomain	Active Directory に参加させるドメインの名前を指定します。
Sysprep.Identification.JoinWorkgroup	ドメインを使用しない場合は、参加させるワークグループの名前を指定します。
SysPrep.UserData.ComputerName	マシン名を指定します（例：lab-client005）。
SysPrep.UserData.FullName	ユーザーの氏名を指定します。
SysPrep.UserData.OrgName	ユーザーの組織名を指定します。
SysPrep.UserData.ProductKey	Windows のプロダクト キーを指定します。

OVF インポートのカスタム プロパティ

OVF をブループリントにインポートする際に、複数の設定をカスタム プロパティとしてインポートし、設定することができます。

表 1-23. OVF がインポートされるブループリントのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
VMware.Ovf.Thumbprint	<p>証明書がある HTTPS サーバに OVF が格納されている場合、このプロパティはその証明書のサムプリントの値を格納し、証明書を検証するために使用されます。OVF が HTTP サーバにホストされている場合には、必要ありません。このプロパティは、ブループリント コンポーネントのユーザー インターフェイスで ImportOvfWorkflow プロビジョニング ワークフローを使用して OVF をインポートする場合には自動的に作成されます。ブループリントを vRealize Automation REST API または vRealize CloudClient を使用してプログラムで作成する場合は、このプロパティは手動で作成する必要があります。</p> <p>注： 証明書チェーンのサポートのため、サムプリントはカンマ区切り形式で格納できます。</p> <p>VMware.Ovf.TrustAllCertificates が存在し、true に設定されている場合、VMware.Ovf.Thumbprint プロパティは無視されます。</p>
VMware.Ovf.TrustAllCertificates	<p>このプロパティが存在し、true に設定されている場合、VMware.Ovf.Thumbprint プロパティは無視されます。また、ImportOvfWorkflow プロビジョニング ワークフローを使用して OVF をインポートするときに証明書の検証は実行されません。</p>
VMware.Ovf.Configuration.X	<p>OVF は、ユーザー設定可能プロパティ（たとえば、OVF からプロビジョニングされた仮想マシンの root パスワードを設定するプロパティ）を持つことができます。ブループリントに OVF をインポートすると、OVF で定義されているすべてのユーザー設定可能なプロパティが解析され、VMware.Ovf.Configuration.X 形式のカスタム プロパティに変換されます。ここで、X は、OVF のユーザー設定可能なプロパティ名です。</p>

vRealize Automation ゲスト エージェントのカスタム プロパティ

vRealize Automation ゲスト エージェントをクローン作成用のテンプレートまたは WinPE にインストールした場合、マシンが完全に展開された後にカスタム プロパティを使用して、プロビジョニングされたマシンのゲスト OS 内でカスタム スクリプトを実行できます。

表 1-24. ゲスト エージェントを使用してプロビジョニングされたマシンをカスタマイズするためのカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Admin.AddOwnerToAdmins</code>	<code>VirtualMachine.Admin.Owner</code> プロパティで指定されたマシンの所有者をマシンのローカル管理者グループに追加する場合は、 <code>True</code> （デフォルト）に設定します。 クローン作成によるプロビジョニングでは、このプロパティは使用できません。
<code>VirtualMachine.Admin.AllowLogin</code>	<code>VirtualMachine.Admin.Owner</code> プロパティでの指定に従ってマシン所有者をローカルのリモート デスクトップ ユーザー グループに追加するには、 <code>True</code> （デフォルト）に設定します。
<code>VirtualMachine.Admin.UseGuestAgent</code>	クローン作成用テンプレートのサービスとしてゲスト エージェントがインストールされている場合、マシン ブループリントで <code>True</code> に設定すると、そのテンプレートからクローン作成されたマシンのゲスト エージェント サービスが有効になります。マシンを起動すると、ゲスト エージェント サービスが起動します。ゲスト エージェントを無効にする場合は、 <code>False</code> に設定します。 <code>False</code> に設定すると、拡張クローン ワークフローでゲスト OS タスクにゲスト エージェントが使用されなくなり、機能が <code>VMwareCloneWorkflow</code> に制限されます。指定しない場合、または <code>False</code> 以外に設定した場合、拡張クローン ワークフローからゲスト エージェントに作業アイテムが送信されます。
<code>VirtualMachine.DiskN.Active</code>	マシンのディスク <i>N</i> が有効であることを指定する場合は、 <code>True</code> （デフォルト）に設定します。マシンのディスク <i>N</i> が有効ではないことを指定する場合は、 <code>False</code> に設定します。
<code>VirtualMachine.DiskN.Label</code>	マシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。ディスク ラベルの最大文字数は 32 文字です。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントに対して使用する場合は、ゲスト OS 内でマシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。
<code>VirtualMachine.DiskN.Letter</code>	マシンのディスク <i>N</i> のドライブ文字またはマウント ポイントを指定します。デフォルトは <code>C</code> です。たとえば、ディスク 1 に文字 <code>D</code> を指定するには、カスタム プロパティを <code>VirtualMachine.Disk1.Letter</code> として定義し、値として <code>D</code> と入力します。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントと組み合わせて使用する場合、ゲスト エージェントは、この値によって指定されたドライブ文字またはマウント ポイントを使用して、追加ディスク <i>N</i> をゲスト OS にマウントします。
<code>VirtualMachine.DiskN.FS</code>	Windows ゲスト エージェント (gugent) で使用します。マシンのディスク <i>N</i> のファイル システムを指定します。オプションは、NTFS（デフォルト）、FAT および FAT32 です。使用例については、 <code>10_setupdisks.bat</code> Windows agent スクリプトを参照してください。
<code>VirtualMachine.DiskN.FileSystem</code>	Linux ゲスト エージェント (gugent) で使用します。マシンのディスク <i>N</i> のファイル システムを指定します。オプションは <code>ext3</code> 、 <code>ext4</code> 、および <code>XFS</code> です。使用例については、 <code>30_DiskSetup.sh</code> Linux エージェント スクリプトを参照してください。

表 1-24. ゲスト エージェントを使用してプロビジョニングされたマシンをカスタマイズするためのカスタム プロパティ（続き）

カスタム プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Admin.CustomizeGuestOSDelay</code>	カスタマイズが完了してからゲスト OS のカスタマイズが開始するまでの待機時間を指定します。値は HH:MM:SS 形式にする必要があります。値が設定されていない場合、デフォルト値は 1 分 (00:01:00) になります。このカスタム プロパティを含めない場合、ゲスト エージェントの作業アイテムが完了する前に仮想マシンが再起動すると、プロビジョニングに失敗する場合があります。
<code>VirtualMachine.Customize.WaitComplete</code>	すべてのカスタマイズが完了するまで、プロビジョニング ワークフローで作業アイテムがゲスト エージェントに送信されないようにする場合は、True に設定します。カスタマイズが完了する前に作業アイテムを作成できるようにするには、False に設定します。
<code>VirtualMachine.SoftwareN.Name</code>	プロビジョニング中にインストールまたは実行するソフトウェア アプリケーション <i>N</i> やスクリプトの分かりやすい名前を指定します。これは、任意の参照専用プロパティです。このプロパティは、拡張クローン ワークフローやゲスト エージェントでは実質的に機能しませんが、ユーザー インターフェイスでカスタム ソフトウェアを選択する場合や、ソフトウェアの使用状況をレポートする場合に役立ちます。
<code>VirtualMachine.SoftwareN.ScriptPath</code>	<p>アプリケーションのインストール スクリプトへの完全パスを指定します。このパスは、ゲスト OS で参照される有効な絶対パスにする必要があります。また、スクリプト ファイル名が含まれている必要があります。</p> <p>パスの文字列に {<i>CustomPropertyName</i>} を挿入することで、カスタム プロパティ値をパラメータとしてスクリプトに渡すことができます。たとえば、名前が <code>ActivationKey</code> で値が 1234 のカスタム プロパティがある場合、スクリプト パスは、<code>D:\InstallApp.bat -key {ActivationKey}</code> となります。ゲスト エージェントはコマンド <code>D:\InstallApp.bat -key 1234</code> を実行します。その後、この値を受け入れて使用するようスクリプト ファイルをプログラムできます。</p> <p>マシン所有者名をスクリプトに渡すには、{<i>Owner</i>} を挿入します。</p> <p>また、パスの文字列に {<i>YourCustomProperty</i>} を挿入すると、カスタム プロパティ値をパラメータとしてスクリプトに渡すことができます。たとえば、値 <code>\\vra-scripts.mycompany.com\scripts\changeIP.bat</code> を入力すると、共有された場所から <code>changeIP.bat</code> スクリプトが実行されますが、値 <code>\\vra-scripts.mycompany.com\scripts\changeIP.bat {VirtualMachine.Network0.Address}</code> を入力すると、<code>changeIP</code> スクリプトが実行され、さらに <code>VirtualMachine.Network0.Address</code> プロパティ値がパラメータとしてスクリプトに渡されます。</p>

表 1-24. ゲスト エージェントを使用してプロビジョニングされたマシンをカスタマイズするためのカスタム プロパティ (続き)

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt	<p>適切にフォーマットされた VirtualMachine.SoftwareN.ScriptPath カスタム プロパティ ステートメントとして gagent コマンド ラインに渡される暗号化文字列を vRealize Automation が取得できるようにします。</p> <p>パスワードなどの暗号化文字列をコマンドライン引数のカスタム プロパティとして指定することができます。これにより、ゲスト エージェントによる復号化が可能で、有効なコマンドライン引数として認識される、暗号化された情報を格納できます。たとえば、</p> <pre>VirtualMachine.Software0.ScriptPath = c:\dosomething.bat password</pre> <p>カスタム プロパティ文字列は、実際のパスワードを含むため、安全ではありません。</p> <p>パスワードを暗号化するには、vRealize Automation カスタム プロパティ (たとえば、MyPassword = password) を作成し、チェック ボックスを選択して暗号化を有効にします。ゲスト エージェントは、[MyPassword] エントリをカスタム プロパティ MyPassword の値に復号化し、このスクリプトを c:\dosomething.bat password として実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ カスタム プロパティ MyPassword = password を作成します。ここで、password は、実際のパスワードの値です。チェック ボックスを選択して暗号化を有効にします。 ■ カスタム プロパティ VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt を VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt = true として設定します。 ■ カスタム プロパティ VirtualMachine.Software0.ScriptPath を VirtualMachine.Software0.ScriptPath = c:\dosomething.bat [MyPassword] として設定します。 <p>VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt を false に設定した場合、または VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt カスタム プロパティを作成しない場合、角かっこ ([および]) 内の文字列は復号化されません。</p>
VirtualMachine.SoftwareN.ISOName	<p>データストアのルートに対する ISO ファイルの相対パスおよびファイル名を指定します。形式は <i>/folder_name/subfolder_name/file_name.iso</i> です。値が設定されていない場合、ISO はマウントされません。</p>
VirtualMachine.SoftwareN.ISOLocation	<p>アプリケーションまたはスクリプトで使用する ISO イメージ ファイルが含まれるストレージ パスを指定します。ホスト予約で表示されるパスの形式に設定します (例: netapp-1:it_nfs_1)。値が設定されていない場合、ISO はマウントされません。</p>

BMC BladeLogic Configuration Manager との連携用のカスタム プロパティ

vRealize Automation には、BMC BladeLogic Configuration Manager と連携するために必要なカスタム プロパティがあります。

表 1-25. BMC BladeLogic Configuration Manager 統合に必要なカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
VirtualMachine.EPI.Type	外部プロビジョニング インフラストラクチャのタイプを指定します。
VirtualMachine.Admin.Owner	マシン所有者のユーザー名を指定します。
BMC.Software.Install	BMC BladeLogic Configuration Manager 統合を有効にするには、True に設定します。
EPI.Server.Name	<p>外部プロビジョニング インフラストラクチャ サーバの名前 (BMC BladeLogic をホストしているサーバの名前など) を指定します。BMC BladeLogic Configuration Manager ホストが指定されることなく 1 つ以上の汎用 BMC EPI エージェントがインストールされた場合、この値は必要なサーバに申請を送ります。</p> <p>特定の BMC BladeLogic Configuration Manager ホスト専用である BMC EPI エージェントだけがインストールされた場合、この値はそれらのエージェントの 1 つに構成されたサーバ名と完全に一致する必要があります。</p>
BMC.Service.Profile	BMC BladeLogic サーバでデフォルト認証プロファイル名を指定します。
BMC.Software.BatchLocation	ソフトウェア ジョブが展開される場所を BMC BladeLogic 構成で指定します。この値は、Vrm.Software.IdNNNN の適切な値と一致する必要があります。たとえば、有効な値には /Application Deployment があります。
VMware.VirtualCenter.OperatingSystem	<p>vCenter Server がマシンの作成時に使用する vCenter Server ゲスト OS のバージョン (VirtualMachineGuestOsIdentifier) を指定します。このオペレーティング システムのバージョンは、プロビジョニングされたマシンにインストールされるオペレーティング システムのバージョンと一致する必要があります。管理者は、いずれかのプロパティ セット (正しい VMware.VirtualCenter.OperatingSystem 値が含まれるように事前定義された VMware[OS_Version]Properties など) を使用してプロパティ グループを作成できます。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。</p> <p>関連情報については、vSphere API/SDK ドキュメントにある列挙タイプ VirtualMachineGuestOsIdentifier を参照してください。現在使用できる値のリストについては、vCenter Server のドキュメントを参照してください。</p>

BMC BladeLogic Configuration Manager のソフトウェア ジョブを有効にするカスタム プロパティ

vRealize Automation と連携するために、BMC BladeLogic Configuration Manager のジョブを構成します。マシン申請者がすべてのソフトウェア ジョブの中から選択できるようにするか、ブループリントに基づいてプロビジョニングされたすべてのマシンに適用するソフトウェア ジョブを指定します。

表 1-26. ソフトウェア ジョブを有効にするカスタム プロパティ

カスタム プロパティ	説明
LoadSoftware	ソフトウェア インストール オプションを有効にするには、True に設定します。
Vrm.Software.IdNNNN	<p>ブループリントからプロビジョニングされたすべてのマシンに適用されるソフトウェア ジョブまたはポリシーを指定します。値を job_type=job_path に設定します。ここで、job_type は BMC BladeLogic ジョブ タイプを表す数字で、job_path は BMC BladeLogic のジョブの場所です。たとえば、4=/Utility/putty のようになります。NNNN は、1000 ~ 1999 の数値です。最初のプロパティは 1000 から始まり、番号順に各追加プロパティの値が 1 つずつ増えていきます。</p> <div> 1 – AuditJob 2 – BatchJob 3 – ComplianceJob 4 – DeployJob 5 – FileDeployJob 6 – NSHScriptJob 7 – PatchAnalysisJob 8 – SnapshotJob </div>

BMC BladeLogic Configuration Manager との連携用のオプションのカスタム プロパティ

BMC BladeLogic Configuration Manager のブループリントでよく使用されるオプションのカスタム プロパティを使用することもできます。

表 1-27. BMC BladeLogic Configuration Manager との連携用のオプションのカスタム プロパティ

プロパティ	定義
BMC.AddServer.Delay	BMC BladeLogic Configuration Manager にマシンを追加までの待機時間（秒単位）を指定します。デフォルトは 30 です。
BMC.AddServer.Retry	BMC BladeLogic Configuration Manager へのマシンの最初の追加で失敗した場合、再試行するまでの待機時間（秒単位）を指定します。デフォルトは 100 です。

HP Server Automation との連携用のカスタム プロパティ

vRealize Automation には、HP Server Automation と連携するために必要なカスタム プロパティがあります。HP Server Automation との連携には、いくつかのカスタム プロパティが必要です。その他のカスタム プロパティは、必要に応じて使用します。

HP Server Automation との連携用の必須のカスタム プロパティ

ブループリントで HP Server Automation を使用するには、特定のカスタム プロパティが必要です。

表 1-28. HP Server Automation との連携に必須のカスタム プロパティ

プロパティ	定義
VMware.VirtualCenter.OperatingSystem	vCenter Server がマシンの作成時に使用する vCenter Server ゲスト OS のバージョン (VirtualMachineGuestOsIdentifier) を指定します。このオペレーティング システムのバージョンは、プロビジョニングされたマシンにインストールされるオペレーティング システムのバージョンと一致する必要があります。管理者は、いずれかのプロパティ セット (正しい VMware.VirtualCenter.OperatingSystem 値が含まれるように事前定義された VMware[OS_Version]Properties など) を使用してプロパティ グループを作成できます。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。
VirtualMachine.EPI.Type	外部プロビジョニング インフラストラクチャのタイプを指定します。
EPI.Server.Name	外部プロビジョニング インフラストラクチャ サーバの名前 (BMC BladeLogic をホストしているサーバの名前など) を指定します。BMC BladeLogic Configuration Manager ホストが指定されることなく 1 つ以上の汎用 BMC EPI エージェントがインストールされた場合、この値は必要なサーバに申請を送ります。
Opware.Software.Install	HP Server Automation がソフトウェアをインストールできるようにするためには、True に設定します。
Opware.Server.Name	HP Server Automation サーバの完全修飾名を指定します。
Opware.Server.Username	エージェント ディレクトリ内のパスワード ファイルが作成されたときに提供されるユーザー名を指定します (例: opswareadmin)。このユーザー名は、HP Server Automation インスタンスにアクセスするための管理者権限のあるものでなければなりません。
Opware.BootImage.Name	HP Server Automation で定義されている 32 ビット WinPE イメージの起動イメージ値を指定します (例: winpe32)。クローン作成によるプロビジョニングの場合、このプロパティは不要です。
Opware.Customer.Name	HP Server Automation で定義されているユーザー名の値を指定します (例: MyCompanyName)。
Opware.Facility.Name	HP Server Automation で定義されている設備名の値を指定します (例: Cambridge)。
Opware.Machine.Password	HP Server Automation で定義されている Opware.OSSequence.Name などのオペレーティング システム シーケンス WIM イメージのデフォルトのローカル管理者パスワードを指定します (例: P@ssword1)。
Opware.OSSequence.Name	HP Server Automation で定義されているオペレーティング システム シーケンス名の値を指定します (例: Windows 2008 WIM)。
Opware.Realm.Name	HP Server Automation で定義されているレルム名の値を指定します (例: Production)。
Opware.Register.Timeout	プロビジョニング ジョブの作成が完了するまでの待機時間を秒単位で指定します。
VirtualMachine.CDRom.Attach	CD-ROM デバイスを使用せずにマシンをプロビジョニングする場合は、False に設定します。デフォルトは True です。

表 1-28. HP Server Automation との連携に必須のカスタム プロパティ (続き)

プロパティ	定義
Linux.ExternalScript.Name	オペレーティング システムがインストールされた後に、Linux ゲスト エージェントが実行するオプションのカスタマイズ スクリプトの名前を指定します (例: config.sh)。このプロパティは、Linux エージェントがインストールされたテンプレートからクローン作成される Linux マシンで使用可能です。
Linux.ExternalScript.LocationType	Linux.ExternalScript.Name プロパティで指定されたカスタマイズ スクリプトの場所タイプを指定します。ローカルまたは NFS のいずれかを指定できます。
Linux.ExternalScript.Path	Linux カスタマイズ スクリプトへのローカル パスまたは NFS サーバ上の Linux カスタマイズへのエクスポート パスを指定します。値はスラッシュから始まり、ファイル名は含みません (例: /scripts/linux/config.sh)。

HP Server Automation との連携用のオプションのカスタム プロパティ

ブループリントで HP Server Automation を使用するには、必要に応じて特定のカスタム プロパティを使用します。

表 1-29. HP Server Automation との連携用のオプションのカスタム プロパティ

プロパティ	定義
Opware.ProvFail.Notify	(オプション) プロビジョニングで障害が発生した場合に HP Server Automation が使用する通知用の電子メール アドレスを指定します (例: provisionfail@lab.local)。
Opware.ProvFail.Notify	(オプション) プロビジョニングで障害が発生した場合に、所有権が割り当てられる HP Server Automation ユーザーを指定します。
Opware.ProvSuccess.Notify	(オプション) プロビジョニングが成功した場合に HP Server Automation が使用する通知用の電子メール アドレスを指定します。
Opware.ProvSuccess.Owner	(オプション) プロビジョニングが成功した場合に、所有権が割り当てられる HP Server Automation ユーザーを指定します。

HP Server Automation のソフトウェア ジョブを有効にするカスタム プロパティ

ファブリック管理者が、vRealize Automation 統合のために HP Server Automation ジョブを構成する方法に応じて、マシン申請者がすべてのソフトウェア ジョブの中から選択できるようにするか、ブループリントに基づいてプロビジョニングされたすべてのマシンに適用されるジョブを指定するかを選択できます。

表 1-30. ソフトウェア ジョブを有効にするカスタム プロパティ

プロパティ	定義
LoadSoftware	ソフトウェア インストール オプションを有効にするには、True に設定します。
Vrm.Software.Id	(オプション) ブループリントからプロビジョニングされたすべてのマシンに適用される HP Server Automation ポリシーを指定します。NNNN は、1000 ~ 1999 の数値です。最初のプロパティは 1000 から始まり、番号順に各追加プロパティの値が 1 つずつ増えていきます。

名前別にグループ化されたカスタム プロパティ

カスタム プロパティを使用して、vRealize Automation の追加の制御を提供できます。

ここで示すカスタム プロパティは、名前別にグループ化されています。機能別にグループ化されたカスタム プロパティについては、[機能別にグループ化されたカスタム プロパティ](#)を参照してください。

カスタム プロパティ アンダー スコア (_)

アンダー スコア (_) で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-31. カスタム プロパティ アンダースコア (_) テーブル

プロパティ	説明
<code>_debug_deployment</code>	<p>展開の部分的な完了が許可される拡張処理を除いて、デフォルトの動作では、個々のリソースのいずれかでプロビジョニングに失敗すると、展開全体が破棄されます。<code>_debug_deployment</code> カスタム プロパティ値を <code>true</code> に設定すると、デフォルトの動作をオーバーライドできます。プロビジョニングが失敗した場合は、プロビジョニングできなかったコンポーネントを特定できるように、デバッグ用のカスタム プロパティによってリソースのロールバックが停止されます。</p> <p>つまり、<code>_debug_deployment</code> を <code>true</code> に設定すると、プロビジョニングに失敗した場合にマシンが破棄されなくなるため、デバッグのカスタマイズやエージェントなどの初回起動に関する問題を簡単にデバッグできるようになります。これ以外の方法で設定した場合は、プロビジョニング プロセスの内容が直接変更されることはなく、ゲスト エージェントまたはカスタマイズが影響を受けることはありません（たとえば、vCenter Server カスタマイズの仕様を基準として結果を設定する場合）。</p> <p>注：失敗したカタログ アイテムは、障害発生時に直ちにロールバックされるため、通常はアクセスできません。しかし、<code>_debug_deployment</code> が <code>true</code> に設定されている場合、vRealize Automation がそれ以外の場合の失敗した展開を部分的に正常と見なすため、アクセスが可能になります。</p> <p>ブループリントにカスタム プロパティを適用するには、ブループリントの作成または編集時に [プロパティ] タブを使用して、<code>_debug_deployment</code> を [ブループリント プロパティ] ページに追加します。<code>_debug_deployment</code> プロパティは、ゲスト エージェントやマシン プロビジョニングのレベルではなく、ソフトウェア プロビジョニングのレベルで使用されます。</p> <p>VRMAgent.exe.config ファイルの設定を使用して、導入の失敗後に vRealize Automation によって仮想マシンが削除されないように設定することもできます。</p>
<code>_deploymentName</code>	<p>このプロパティをブループリントに追加すると、<code>_deploymentName</code> の値をカスタム文字列に設定して、展開のカスタム名を指定できます。この展開の複数のインスタンスを単一の申請でプロビジョニングする場合は、カスタム名がプリフィックスになります。ユーザーが展開名を指定できるようにするには、このカスタム プロパティを設定してオーバーライドを許可します。このプロパティの使用には、次の 2 点の注意事項があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ このプロパティは、コンポーネント レベルではなく、ブループリント レベルで追加する必要があります。たとえば、ブループリントを作成または編集する際に、[プロパティ] タブをクリックして、[カスタム プロパティ] - [新規] の順に選択し、<code>_deploymentName</code> プロパティをブループリントに追加します。このプロパティは、マシンやブループリントに含まれる他のコンポーネントに追加しないでください。 ■ このプロパティは、プロパティ グループのメンバーとしてではなく、別個のプロパティとして追加する必要があります。

カスタム プロパティ A

文字 A で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-32. カスタム プロパティ A テーブル

プロパティ	説明
AD.Lookup.Department	承認者に送信される通知メールに含まれるコスト センター値を指定します。このプロパティ値は、ブループリント内で指定する必要があります。
agent.download.url	<p>ポート転送を使用する場合は、Amazon AWS トンネル マシンのプライベート IP アドレスおよびソフトウェア エージェント ファイルのポートを指定します (たとえば https://Private_IP:1443/software-service/resources/noble-agent.jar)。</p> <p>展開環境で VPN エージェントの URL を指定します。URL フォーマットは https:// Private_IP:1443/software-service//resources/noble-agent.jar です。</p> <p>このプロパティは、software.agent.service.url および software.ebs.url と組み合わせて、予約またはコンピューティング リソース エンドポイントに追加することができます。また、PAT または NAT 変換、およびポート転送を使用するときに、このプロパティを使用してプライベート アドレスおよびポートを指定することができます。</p>
amazon.AmazonEC2Config.ServiceURL	Amazon GovCloud 用の Amazon 構成サービス URL を指定します (例: amazon.AmazonEC2Config.ServiceURL=https://ec2.us-gov-west-1.amazonaws.com)。
amazon.ElasticLoadBalancingConfig.ServiceURL	Amazon GovCloud 用の Amazon ロード バランサ構成サービス URL を指定します (例: amazon.ElasticLoadBalancingConfig.ServiceURL=https://elasticloadbalancing.us-gov-west-1.amazonaws.com)。
Amazon.ElasticLoadBalancer.Names	ブループリントによりプロビジョニングされるマシンを、指定の値と一致する Elastic ロード バランサに割り当てます。このプロパティは、vSphere、Amazon、および Hyper-V 構成での使用に有効です。
Amazon.Extensions.UserData	<p>Amazon ユーザー データ スクリプトの名前を指定して、インスタンスを起動するときの最初の起動サイクル中に実行されるようにできます。プロパティは、動的な要求を許可するため、その他のカスタム プロパティからの文字列の置き換えをサポートします。プロパティは、vRealize Automation ブループリント全体、またはブループリントの AWS マシン コンポーネントのいずれかに追加できます。Amazon ユーザー データ スクリプトの詳細については、Amazon Elastic Compute Cloud 製品ドキュメントのトピック Running Commands on Your Linux Instance at Launch を参照してください。</p> <p>Amazon.CustomProperty.Shell で始まる名前のファイルに一連のカスタム プロパティを含めることで、Amazon.Extensions.UserData プロパティにそれらを渡すことができます。</p>
amazon.IAMInstanceProfile.ARN	<p>AWS インスタンスを要求するときに AWS Identity and Access Management (IAM) インスタンス プロファイルの Amazon リソース ネーム (ARN) を指定します。このプロパティ (たとえば、amazon.IAMInstanceProfile.ARN = IAM Instance Profile ARN(s) value) をブループリントに追加し、カタログからプロビジョニングを要求した場合、プロビジョニングされた Amazon 仮想マシンまたはインスタンスに指定された IAM ロールが含まれます。DEM はプロパティ仕様 (たとえば amazon.IAMInstanceProfile.ARN = IAM Instance Profile ARN(s) value) を読み取り、それを Amazon RunInstanceRequest ワークフローに含めます。</p>

表 1-32. カスタム プロパティ A テーブル（続き）

プロパティ	説明
<code>Amazon.Instance.Id</code>	Amazon EC2 エンドポイントにプロビジョニングされたマシンの Amazon インスタンス ID を指定します。このプロパティは、vSphere および Amazon 構成での使用に有効です。
<code>Amazon.Instance.GroupName</code>	<p>既存の AWS プレイスメント グループの名前を、関連付けられた Amazon エンドポイントに指定します。エンドポイントの vRealize Automation データ収集よりも前に、プレイスメント グループをターゲット アベイラビリティ ゾーンに配置する必要があります。</p> <p><code>Amazon.Instance.GroupName</code> カスタム プロパティをブループリントに追加して、マシン プロビジョニング時に使用する AWS プレイスメント グループを指定します。</p>
<code>Amazon.elasticIpAddress.ipAddress</code>	<code>ipAddress</code> がインスタンスに割り当てる特定の IP アドレスの場合、Amazon IP アドレスを指定します。
<code>Amazon.Placement.Tenancy</code>	AWS 接続が専用テナント固有のものであることを指定するには、 <code>= dedicated</code> を設定します。このプロパティは、VPC サブネットでの使用に有効です。
<code>Amazon.Storage.Encrypt</code>	<p><code>True</code> に設定した場合は、EC2 マシンに接続されている Amazon EBS ストレージ ディスクを暗号化する必要があるかどうかを指定します。デフォルトは <code>False</code> です。</p> <p>このプロパティは、新しい EBS ボリュームの暗号化にのみ適用されます。</p> <p>Amazon マシン イメージ (AMI) 定義に含まれるボリュームでは、このプロパティとは無関係に AMI 設定が維持されます。</p>
<code>Amazon.Storage.iops</code>	<p>関連付けられているストレージ デバイスに IOPS（秒あたりの入出力操作）を指定します。</p> <p>現在、このプロパティは <code>Amazon.Storage.Type</code> プロパティの値が <code>io1</code> の場合のみサポートされます。</p> <p>詳細については、Amazon EBS volume types ドキュメントを参照してください。</p> <p>IOPS を指定するには、ブループリントに <code>Amazon.Storage.iops</code> カスタム プロパティを追加します。IOPS を設定できる AWS ストレージ タイプは、<code>io1</code> ストレージ タイプのみです。</p>
<code>Amazon.Storage.Type</code>	<p>関連付けられた Amazon のエンドポイントに関してディスク ストレージに使用される Amazon EBS ボリューム タイプを指定します。すべてのディスクは、指定されたタイプでプロビジョニングされます。ディスクごとに個別のボリューム タイプを指定することはできません。</p> <p>プロパティの値を <code>io1</code> または <code>gp2</code> など、Amazon EBS volume types ドキュメントで提供されている API 名のいずれかの値に設定します。</p> <p><code>Amazon.Storage.Type</code> カスタム プロパティをブループリントに追加して、マシン プロビジョニング時に使用する EBS ボリューム タイプを指定します。</p>
<code>Azure.Windows.ScriptPath</code>	Windows ベース システムにトンネリングを構成するダウンロードしたスクリプトへのパスを指定します。展開環境に合わせてパスを更新します。
<code>Azure.Linux.ScriptPath</code>	Linux ベース システムにトンネリングを構成するダウンロードしたスクリプトへのパスを指定します。展開環境に合わせてパスを更新します。

カスタム プロパティ B

B で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-33. カスタム プロパティ B テーブル

プロパティ	定義
BMC.AddServer.Delay	BMC BladeLogic Configuration Manager にマシンを追加までの待機時間（秒単位）を指定します。デフォルトは 30 です。
BMC.AddServer.Retry	BMC BladeLogic Configuration Manager へのマシンの最初の追加で失敗した場合、再試行するまでの待機時間（秒単位）を指定します。デフォルトは 100 です。
BMC.Service.Profile	BMC BladeLogic サーバでデフォルト認証プロファイル名を指定します。
BMC.Software.BatchLocation	ソフトウェア ジョブが展開される場所を BMC BladeLogic 構成で指定します。この値は、Vrm.Software.IdNNNN の適切な値と一致する必要があります。たとえば、有効な値には /Application Deployment があります。
BMC.Software.Install	BMC BladeLogic Configuration Manager 統合を有効にするには、True に設定します。

カスタム プロパティ C

文字 C で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-34. カスタム プロパティ C テーブル

プロパティ	定義
Cisco.Organization.Dn	org-root/org-Engineering など、ビジネス グループによりプロビジョニングされた Cisco UCS マシンが配置される Cisco UCS Manager 組織の識別名を指定します。指定組織が、マシンを管理する Cisco UCS Manager インスタンス内に存在しない場合、プロビジョニングは失敗します。このプロパティはビジネス グループでのみ使用できます。
CloneFrom	vCenter Server のテンプレートなど、クローン作成元の既存のマシンまたは仮想プラットフォーム オブジェクトの名前を指定します（例：Win2k8tmpl）。
CloneSpec	vCenter Server の事前定義された SysPrep オブジェクトなど、クローン作成されたマシンのカスタム仕様の名前を指定します（例：Win2k カスタム仕様）。デフォルト値はブループリントで指定されています。
Command.DiskPart.Options	ESX Server ホスト上で WIM ベースの仮想プロビジョニングを使用し、マシンのディスクをフォーマットしてパーティションを作成する場合、Align=64 を設定して推奨アライメント パラメータを使用します。このプロパティは物理プロビジョニングでは使用できません。
Command.FormatDisk.Options	ESX Server ホスト上で WIM ベースの仮想プロビジョニングを使用し、マシンのディスクをフォーマットしてパーティションを作成する場合、/A:32K を設定して推奨アライメント パラメータを使用します。このプロパティは物理プロビジョニングでは使用できません。
containers.ipam.driver	<p>コンテナ専用です。コンテナ ネットワーク コンポーネントをブループリントに追加するときに使用する IP アドレス管理ドライバを指定します。サポートされる値は、使用するコンテナ ホスト環境にインストールされているドライバによって異なります。たとえば、サポートされる値は、コンテナ ホストにインストールされている IP アドレス管理プラグインに応じて infoblox または calico になる場合があります。</p> <p>このプロパティ名と値では大文字と小文字が区別されます。プロパティ値は、追加するときに検証されません。指定したドライバがプロビジョニング時にコンテナ ホストにない場合、エラー メッセージが返され、プロビジョニングが失敗します。</p>

表 1-34. カスタム プロパティ C テーブル（続き）

プロパティ	定義
<code>containers.network.driver</code>	<p>コンテナ専用です。コンテナ ネットワーク コンポーネントをブループリントに追加するときに使用するネットワーク ドライバを指定します。サポートされる値は、使用するコンテナ ホスト環境にインストールされているドライバによって異なります。デフォルトでは、Docker によって提供されるネットワーク ドライバには bridge、overlay、および macvlan が含まれ、Virtual Container Host (VCH) によって提供されるネットワーク ドライバには bridge ドライバが含まれています。コンテナ ホストにインストールされているネットワーク プラグインに応じて、weave や calico などのサードパーティのネットワーク ドライバも使用できます。</p> <p>このプロパティ名と値では大文字と小文字が区別されます。プロパティ値は、追加するときに検証されません。指定したドライバがプロビジョニング時にコンテナ ホストにない場合、エラー メッセージが返され、プロビジョニングが失敗します。</p>
<code>Container</code>	<p>コンテナ専用です。デフォルト値は <code>App.Docker</code> であり、必須です。このプロパティは変更しないでください。</p>
<code>Container.Auth.User</code>	<p>コンテナ専用です。コンテナ ホストに接続するためのユーザー名を指定します。</p>
<code>Container.Auth.Password</code>	<p>コンテナ専用です。ユーザー名のパスワード、または使用するパブリック キーまたはプライベート キーのいずれかのパスワードを指定します。暗号化されたプロパティ値がサポートされています。</p>
<code>Container.Auth.PublicKey</code>	<p>コンテナ専用です。コンテナ ホストに接続するためのパブリック キーを指定します。</p>
<code>Container.Auth.PrivateKey</code>	<p>コンテナ専用です。コンテナ ホストに接続するためのプライベート キーを指定します。暗号化されたプロパティ値がサポートされています。</p>
<code>Container.Connection.Protocol</code>	<p>コンテナ専用です。通信プロトコルを指定します。デフォルト値は <code>API</code> であり、必須です。このプロパティは変更しないでください。</p>
<code>Container.Connection.Scheme</code>	<p>コンテナ専用です。通信方法を指定します。デフォルトは <code>https</code> です。</p>
<code>Container.Connection.Port</code>	<p>コンテナ専用です。コンテナ 接続ポートを指定します。デフォルトは <code>2376</code> です。</p>
<code>Extensibility.Lifecycle.Properties.VMPSMasterWorkflow32.MachineActivated</code>	<p>コンテナ専用です。すべての コンテナ プロパティを公開し、プロビジョニングされたホストを登録するために使用するイベント ブローカ プロパティを指定します。デフォルト値は <code>Container*</code> であり、必須です。このプロパティは変更しないでください。</p>
<code>Extensibility.Lifecycle.Properties.VMPSMasterWorkflow32.Disposing</code>	<p>コンテナ専用です。上記のすべての コンテナ プロパティを公開し、プロビジョニングされたホストを登録解除するために使用するイベント ブローカ プロパティを指定します。デフォルト値は <code>Container*</code> であり、必須です。このプロパティは変更しないでください。</p>

カスタム プロパティ E

文字 E で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-35. カスタム プロパティ E テーブル

プロパティ	定義
EPI.Server.Collection	マシンが登録される Citrix プロビジョニング コレクションの名前を指定します。
EPI.Server.Name	<p>外部プロビジョニング インフラストラクチャ サーバの名前 (BMC BladeLogic をホストしているサーバの名前など) を指定します。BMC BladeLogic Configuration Manager ホストが指定されることなく 1 つ以上の汎用 BMC EPI エージェントがインストールされた場合、この値は必要なサーバに申請を送ります。</p> <p>特定の BMC BladeLogic Configuration Manager ホスト専用である BMC EPI エージェントだけがインストールされた場合、この値はそれらのエージェントの 1 つに構成されたサーバ名と完全に一致する必要があります。</p> <p>HP Server Automation をホストしているサーバの名前を指定します。Server Automation サーバが指定されることなく 1 つ以上の汎用 Opsware EPI エージェントがインストールされた場合、この値は必要なサーバに申請を送ります。</p> <p>特定の HP Server Automation サーバ専用の EPI エージェントだけがインストールされた場合、この値はそれらのエージェントの 1 つに構成されたサーバ名と完全に一致する必要があります。</p> <p>サーバが指定されることなく適切なタイプ (VirtualMachine.EPI.Type) の汎用 EPI エージェントが 1 つ以上インストールされた場合、この値は申請されたサーバに申請を送ります。適切なタイプの特定のサーバ専用の EPI エージェントだけがインストールされた場合、この値はそれらのエージェントの 1 つに構成されたサーバ名と完全に一致する必要があります。</p>
EPI.Server.Port	プロビジョニング サーバとの通信に使用するポートを指定します。Citrix プロビジョニング サーバを使用している場合は、デフォルトのポート値 54321 の指定を省略します。
EPI.Server.Site	EPI.Server.Collection プロパティと EPI.Server.Store プロパティで特定されたコレクションとストアが含まれる Citrix プロビジョニング サイトの名前を指定します (例: site1)。
EPI.Server.Store	EPI.Server.VDiskName プロパティで特定された vDisk が含まれる Citrix プロビジョニング ストアの名前を指定します (例: store1)。
EPI.Server.VDiskName	プロビジョニングで使用される Citrix プロビジョニング vDisk の名前を指定します (例: disk1)。
ext.policy.activedirectory.customizationWorkflowTag	vRealize Orchestrator のカスタム ワークフローに追加されたタグです。Active Directory ポリシーでは、指定したタグの付いたカスタム ワークフローを検索し、これが見つくと、Active Directory レコードが作成される際にタグ付きワークフローを使用します。
ext.policy.activedirectory.customizationDeleteWorkflowTag	vRealize Orchestrator のカスタム ワークフローに追加されたタグです。Active Directory ポリシーでは、指定したタグの付いたカスタム ワークフローを検索し、これが見つくと、Active Directory レコードが削除される際にタグ付きワークフローを使用します。
ext.policy.activedirectory.domain	<p>現在の Active Directory ポリシーで指定されているドメインよりも優先して使用するドメイン。</p> <p>Active Directory ポリシーで指定される ext.policy.activedirectory.system.domain の値をオーバーライドします。</p>
ext.policy.activedirectory.endpoint.id	<p>ポリシーの指定やオーバーライドに使用されるポリシー ID です。指定する ID は、既存の Active Directory ポリシーのものである必要があります。</p> <p>Active Directory ポリシーで指定される ext.policy.activedirectory.system.endpoint.id の値をオーバーライドします。</p>
ext.policy.activedirectory.id	ユーザーが判別可能な、Active Directory ポリシーの ID です。Active Directory ポリシーで指定される ext.policy.activedirectory.system.id の値をオーバーライドします。

表 1-35. カスタム プロパティ E テーブル（続き）

プロパティ	定義
<code>ext.policy.activedirectory.ignore</code>	マシンがポリシーによって Active Directory に追加されていないことを示します。Active Directory ポリシーをスキップします。
<code>ext.policy.activedirectory.machineName</code>	現在の Active Directory ポリシーで指定されている名前よりも優先して使用する、Active Directory 内のマシンの名前。 Active Directory ポリシーで指定される <code>ext.policy.activedirectory.system.machineName</code> の値をオーバーライドします。
<code>ext.policy.activedirectory.orgunit</code>	使用する組織単位は、既存の Active Directory ポリシーに含まれる組織単位ではありません。Active Directory ポリシーで指定される <code>ext.policy.activedirectory.system.orgunit</code> の値をオーバーライドします。
<code>ext.policy.activedirectory.system.domain</code>	Active Directory に含まれるマシンのドメインに使用するシステム プロパティです。 このプロパティを変更する場合に、プロパティが定義済みのポリシーで使用されているときには、ポリシーを無効にできます。ポリシーの値をオーバーライドするには、 <code>ext.policy.activedirectory.domain</code> を使用します。
<code>ext.policy.activedirectory.system.endpoint.id</code>	Active Directory vRealize Orchestrator エンドポイントの名前に使用するシステム プロパティです。 このプロパティを変更する場合に、プロパティが定義済みのポリシーで使用されているときには、ポリシーを無効にできます。ポリシーの値をオーバーライドするには、 <code>ext.policy.activedirectory.endpoint.id</code> を使用します。
<code>ext.policy.activedirectory.system.id</code>	Active Directory ポリシーのユーザーが判別可能な ID に使用するシステム プロパティです。 このプロパティを変更する場合に、プロパティが定義済みのポリシーで使用されているときには、ポリシーを無効にできます。ポリシーの値をオーバーライドするには、 <code>ext.policy.activedirectory.id</code> を使用します。
<code>ext.policy.activedirectory.system.machineName</code>	Active Directory に含まれるマシンの名前に使用するシステム プロパティです。 このプロパティを変更する場合に、プロパティが定義済みのポリシーで使用されているときには、ポリシーを無効にできます。ポリシーの値をオーバーライドするには、 <code>ext.policy.activedirectory.machineName</code> を使用します。
<code>ext.policy.activedirectory.system.orgunit</code>	Active Directory 組織単位の識別名に使用するシステム プロパティです。 このプロパティを変更する場合に、プロパティが定義済みのポリシーで使用されているときには、ポリシーを無効にできます。ポリシーの値をオーバーライドするには、 <code>ext.policy.activedirectory.orgunit</code> を使用します。

カスタム プロパティ H

H で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-36. H で始まるカスタム プロパティの表

プロパティ	定義
Hostname	VirtualMachine.Admin.Name プロパティに含まれている生成されたマシン名をオーバーライドするホスト マシン名を指定します。 Hostname を使用しないと、マシン名として VirtualMachine.Admin.Name 値が使用されます。Hostname 値に使用できる文字数は最大で 15 文字です。
Hyperv.Network.Type	仮想マシンのネットワーク アダプタ タイプを指定します。このプロパティは、Hyper-V (SCVMM) との併用にのみ有効です。値を synthetic に設定した場合、ブループリントで Hyper-V (SCVMM) 2012 R2 リソースに Generation-2 マシンをプロビジョニングできることが指定されます。Generation-2 プロビジョニングでは、ブループリントに Scvmm.Generation2 = true プロパティ設定も含まれている必要があります。以前の値は、WinXP または Server 2003 x64 のゲスト OS と互換性がありません。デフォルト値は synthetic です。

カスタム プロパティ I

文字 I で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-37. カスタム プロパティ I テーブル

プロパティ	定義
Image.ISO.Location	<p>このプロパティの値は大文字と小文字が区別されます。起動元となる ISO イメージの場所を指定します。この値の形式は、プラットフォームによって異なります。詳細については、プラットフォームに付属しているドキュメントを参照してください。このプロパティは、WIM ベース プロビジョニング、Linux キックスタートおよび AutoYaST プロビジョニング、SCCM ベース プロビジョニングに必須です。</p> <p>vCenter Server による仮想プロビジョニングの場合、この値にはプロビジョニング コンピュータ リソースからアクセスできるインスタンス内のデータストアの名前を指定します。</p> <p>XenServer による仮想プロビジョニングの場合、ストレージ リポジトリの名前を指定します。</p> <p>物理プロビジョニングの場合、Web 上でアクセスできる、イメージの HTTP URL を指定します。</p>
Image.ISO.Name	<p>このプロパティの値は大文字と小文字が区別されます。起動元の ISO イメージの名前を指定します（例：/ISO/Microsoft/WinPE.iso）。この値の形式は、プラットフォームによって異なります。詳細については、プラットフォームに付属しているドキュメントを参照してください。このプロパティは、WIM ベース プロビジョニング、Linux キックスタートおよび AutoYaST プロビジョニング、SCCM ベース プロビジョニングに必須です。</p> <p>vCenter Server による仮想プロビジョニングの場合、この値は Image.ISO.Location で指定されるデータストア内のイメージへのパスを指定します。この値にはスラッシュを使用する必要があります。この値の先頭はスラッシュにする必要があります。XenServer による仮想プロビジョニングの場合、Image.ISO.Location で指定されるストレージ リポジトリ内のイメージの名前を指定します。Hyper-V による仮想プロビジョニングでは、イメージのフル ローカル パスを指定します。</p> <p>物理プロビジョニングの場合、イメージのファイル名を指定します。</p>
Image.ISO.UserName	CIFS 共有にアクセスするユーザー名を、username@domain という形式で指定します。アクセスするのに認証が必要な CIFS 共有上にイメージが置かれている Dell iDRAC 統合用です。
Image.ISO.Password	Image.ISO.UserName プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。アクセスするのに認証が必要な CIFS 共有上にイメージが置かれている Dell iDRAC 統合用です。
Image.WIM.Path	WIM ベースのプロビジョニングでイメージの展開元となる WIM ファイルの UNC パスを指定します。パスの形式は \\server\share\$ となります（例：\\lab-ad\dfs\$）。

表 1-37. カスタム プロパティ I テーブル (続き)

プロパティ	定義
Image.WIM.Name	Image.WIM.Path プロパティで示される WIM ファイルの名前を指定します。
Image.WIM.Index	WIM ファイルから正しいイメージを展開するために使用されるインデックスを指定します。
Image.Network.User	プロビジョニングされたマシン上のネットワーク ドライブに WIM イメージ パス (Image.WIM.Path) をマッピングするために使用されるユーザー名を指定します。これは、通常、ネットワーク共有へのアクセス権限があるドメイン アカウントです。
Image.Network.Password	Image.Network.User プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。
Image.Network.Letter	プロビジョニングされたマシンで WIM イメージ パスがマッピングされているドライブを示す文字を指定します。デフォルト値は K です。
Infrastructure.Admin.MachineObjectOU	マシンの組織単位 (OU) を指定します。ビジネス グループ OU 設定によって必要な OU にマシンが配置される場合には、このプロパティは不要です。
Infrastructure.Admin.ADUser	ドメイン管理者のユーザー ID を指定します。この ID は、匿名のバインドを使用できない場合に、Active Directory ユーザーとグループを問い合わせるために使用されます。
Infrastructure.Admin.ADPassWord	Infrastructure.Admin.ADUser ドメイン管理者ユーザー ID に関連付けられているパスワードを指定します。
Infrastructure.Admin.DefaultDomain	マシン上のデフォルト ドメインを指定します。
Infrastructure.ResourcePool.Name	マシンが属するリソース プールを指定します (存在する場合)。デフォルトは、マシンのプロビジョニング元である予約で指定された値です。

カスタム プロパティ L

文字 L で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-38. カスタム プロパティ L テーブル

プロパティ	説明
Linux.ExternalScript.LocationType	Linux.ExternalScript.Name プロパティで指定されたカスタマイズ スクリプトの場所タイプを指定します。ローカルまたは NFS のいずれかを指定できます。 また、Linux.ExternalScript.Path プロパティを使用してスクリプトの場所を指定する必要もあります。場所タイプが NFS の場合は、Linux.ExternalScript.Server プロパティも使用します。
Linux.ExternalScript.Name	オペレーティング システムがインストールされた後に、Linux ゲスト エージェントが実行するオプションのカスタマイズ スクリプトの名前を指定します (例: config.sh)。このプロパティは、Linux エージェントがインストールされたテンプレートからクローン作成される Linux マシンで使用可能です。 外部スクリプトを指定する場合は、Linux.ExternalScript.LocationType プロパティおよび Linux.ExternalScript.Path プロパティを使用して、その場所も定義する必要があります。
Linux.ExternalScript.Path	Linux カスタマイズ スクリプトへのローカル パスまたは NFS サーバ上の Linux カスタマイズへのエクスポート パスを指定します。値はスラッシュから始まり、ファイル名は含みません (例: /scripts/linux/config.sh)。

表 1-38. カスタム プロパティ L テーブル (続き)

プロパティ	説明
Linux.ExternalScript.Server	Linux.ExternalScript.Name で指定された Linux 外部カスタマイズ スクリプトが配置される NFS サーバの名前を指定します (例: lab-ad.lab.local)。
LoadSoftware	ソフトウェア インストール オプションを有効にするには、True に設定します。

カスタム プロパティ M

M で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-39. カスタム プロパティ M テーブル

プロパティ	説明
MaximumProvisionedMachines	1 つのマシン スナップショットに対するリンク クローンの最大数を指定します。デフォルトは無制限です。
Machine.SSH	<p>このブループリントからプロビジョニングされた Linux マシンの vRealize Automation の [アイテム] ページにある [SSH を使用して接続] オプションを有効にするには、True に設定します。True に設定して、[RDP または SSH を使用した接続] によるマシン操作をブループリントで有効にした場合、ブループリントからプロビジョニングされるすべての Linux マシンが、[SSH を使用して接続] オプションを資格のあるユーザーに表示します。</p> <p>[SSH を使用して接続] オプションを使用するには、SSH をサポートするプラグインがブラウザにインストールされている必要があります (たとえば、Mozilla Firefox および Google Chrome 用の FireSSH SSH ターミナル クライアント)。プラグインが存在する場合、[SSH を使用して接続] を選択すると、SSH コンソールが開き、管理者の認証情報の入力が必要になります。</p>

カスタム プロパティ N

文字 N で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-40. カスタム プロパティ N テーブル

プロパティ	説明
NSX.Edge.ApplianceSize	<p>プロビジョニングされたマシンまたは展開に可能な NSX Edge アプライアンスのサイズ タイプを指定します。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ compact <p>小規模な展開、事前検証 (POC)、および 1 つのサービスで使します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU = 1 ■ RAM = 512 MB ■ ディスク = 512 MB ■ large <p>小規模から中規模、またはマルチ テナントの展開の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU = 2 ■ RAM = 1 GB ■ ディスク = 512 MB ■ quadlarge <p>高スループット ECMP (equal-cost multi-path routing) または高パフォーマンス ファイアウォールの場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU = 4 ■ RAM = 1 GB ■ ディスク = 512 MB ■ xlarge <p>L7 ロード バランシングと専用コアの展開の場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPU = 6 ■ RAM = 8 GB ■ ディスク = 4.5 GB (4 GB スワップ) <p>関連情報については、System Requirements for NSX を参照してください。</p>
NSX.Edge.HighAvailability	<p>true (NSX.Edge.HighAvailability=true) に設定すると、ブループリントから展開された NSX Edge マシンで高可用性 (HA) モードが有効になります。</p> <p>NSX.Edge.HighAvailability.PortGroup=<i>port_group_name</i> とともに使用すると、このプロパティによりブループリントのオーサリング中に NSX Edge を設定できます。</p> <p>このプロパティは、vRealize Automation ブループリントの NSX ロード バランサ コンポーネントまたは vRealize Automation ブループリント自体に追加できます。</p> <p>NSX.Edge.HighAvailability.PortGroup=<i>port_group_name</i> と組み合わせて使用する必要があります。</p>

表 1-40. カスタム プロパティ N テーブル (続き)

プロパティ	説明
NSX.Edge.HighAvailability.PortGroup	<p>指定されたポート グループ名に接続された内部インターフェイスまたは内部 vNIC を作成します。たとえば、 NSX.Edge.HighAvailability.PortGroup=VM Network です。 ここで、VM Network は HA (高可用性) 分散 (vLAN がサポート) または NSX 論理スイッチ ポート グループです。NSX HA モードでは、少なくとも 1 つの内部ネットワーク インターフェイス、または vNIC が必要です。</p> <p>NSX.Edge.HighAvailability =true とともに使用すると、このプロパティによりブループリントのオーサリング中に NSX Edge に高可用性 (HA) を設定できます。</p> <p>HA に対応したワン アーム ロード バランサを使用している場合、HA に別のポート グループを指定する必要があります。</p> <p>注： ポート グループのプロパティの使用がポート グループの通常の展開の使用と競合し、次のエラーが表示されるため、指定したポート グループのネットワークは、ポート グループのメンバーにはなりません。</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin: 10px 0;"> Portgroup must be unique within an Edge... </div> <p>NSX.Edge.HighAvailability =true と組み合わせて使用する必要があります。</p>

表 1-40. カスタム プロパティ N テーブル (続き)

プロパティ	説明
NSX.Validation.Disable.Single.Edge.Uplink	<p>true に設定すると、次の条件を確認する NSX 検証が無効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ブループリントのすべてのオンデマンド NAT ネットワークのソースが同じ外部ネットワークであること。 ■ ロード バランサの VIP を使用するブループリントのすべてのオンデマンド ルーティング ネットワークのソースが同じ外部ネットワークであること。 ■ ブループリントのすべてのオンデマンド ロード バランサ コンポーネントが、同じ外部ネットワークまたは同一の外部ネットワークによってサポートされているオンデマンド ネットワークの仮想 IP アドレスを持っていること。 <p>この検証チェックを無効にすると展開が成功する場合がありますが、一部のネットワーク コンポーネントにアクセスできなくなる可能性があります。</p> <p>存在しない場合または false に設定されている場合、検証チェックは有効になります (デフォルト)。</p> <p>単一の NSX Edge は、アップリンク ネットワークとして 1 つの外部ネットワークのみをサポートできます。同じ外部ネットワークからの複数の IP アドレスがサポートされます。ブループリントには、任意の数の外部またはオンデマンドのネットワーク コンポーネントを含めることができますが、NSX は 1 つの外部ネットワークのみをアップリンク ネットワークとしてサポートします。</p> <p>このプロパティは、ブループリント レベルでのみ指定できます。ブループリント キャンバスのコンポーネントで指定することはできません。</p>
NSX.Validation.Disable.Blueprint.NSXT	<p>true に設定されている場合、ブループリントの [完了] アクションに対するすべての NSX-T 検証が無効になります。</p> <p>存在しない場合または false に設定されている場合、NSX-T 検証チェックは有効になります (デフォルト)。</p> <p>たとえば、ブループリントにサブネットの重複がある場合にブループリントで [完了] をクリックすると、エラー メッセージが表示され、重複が原因でブループリントを保存できても終了することができません。このような場合には、[ブループリントのプロパティ] ページを使用して NSX.Validation.Disable.Blueprint.NSXT を追加し、ブループリントを終了させることができます。</p> <p>このプロパティは、ブループリントの [完了] アクションに対する NSX-T 検証のみを無効にします。</p>

カスタム プロパティ O

文字 O で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-41. カスタム プロパティ O テーブル

プロパティ	説明
Opware.BootImage.Name	HP Server Automation で定義されている 32 ビット WinPE イメージの起動イメージ値を指定します (例: winpe32)。クローン作成によるプロビジョニングの場合、このプロパティは不要です。
Opware.Customer.Name	HP Server Automation で定義されているユーザー名の値を指定します (例: MyCompanyName)。

表 1-41. カスタム プロパティ O テーブル (続き)

プロパティ	説明
Opware.Facility.Name	HP Server Automation で定義されている設備名の値を指定します (例: Cambridge)。
Opware.Machine.Password	HP Server Automation で定義されている Opware.OSSequence.Name などのオペレーティング システム シーケンス WIM イメージのデフォルトのローカル管理者パスワードを指定します (例: P@ssword1)。
Opware.OSSequence.Name	HP Server Automation で定義されているオペレーティング システム シーケンス名の値を指定します (例: Windows 2008 WIM)。
Opware.ProvFail.Notify	(オプション) プロビジョニングで障害が発生した場合に HP Server Automation が使用する通知用の電子メール アドレスを指定します (例: provisionfail@lab.local)。
Opware.ProvFail.Owner	(オプション) プロビジョニングで障害が発生した場合に、所有権が割り当てられる HP Server Automation ユーザーを指定します。
Opware.ProvSuccess.Notify	(オプション) プロビジョニングが成功した場合に HP Server Automation が使用する通知用の電子メール アドレスを指定します。
Opware.ProvSuccess.Owner	(オプション) プロビジョニングが成功した場合に、所有権が割り当てられる HP Server Automation ユーザーを指定します。
Opware.Realm.Name	HP Server Automation で定義されているレルム名の値を指定します (例: Production)。
Opware.Register.Timeout	プロビジョニング ジョブの作成が完了するまでの待機時間を秒単位で指定します。
Opware.Server.Name	HP Server Automation サーバの完全修飾名を指定します。
Opware.Server.Username	エージェント ディレクトリ内のパスワード ファイルが作成されたときに提供されるユーザー名を指定します (例: opswareadmin)。このユーザー名は、HP Server Automation インスタンスにアクセスするための管理者権限のあるものでなければなりません。
Opware.Software.Install	HP Server Automation がソフトウェアをインストールできるようにするためには、True に設定します。

カスタム プロパティ P

文字 P で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-42. カスタム プロパティ P テーブル

プロパティ	説明
Plugin.AdMachineCleanup.Delete	破棄されたマシンのアカウントを無効にする代わりに削除するには、True に設定します。
Plugin.AdMachineCleanup.Execute	Active Directory クリーンアップ プラグインを有効にするには、True に設定します。デフォルトの場合、各マシンのアカウントは、破棄されると無効になります。
Plugin.AdMachineCleanup.MoveToOu	破棄するマシンのアカウントを新しい Active Directory の組織単位に移動します。値はアカウントの移動先の組織単位です。この値の形式は ou=OU, dc=dc です (例: ou=trash,cn=computers,dc=lab,dc=local)。

表 1-42. カスタム プロパティ P テーブル（続き）

プロパティ	説明
Plugin.AdMachineCleanup.UserName	Active Directory のアクション（Active Directory アカウントの削除、無効化、名前変更、移動など）の実行に必要な十分な権限を持つ Active Directory アカウント ユーザー名を指定します。値は <i>domain\username</i> の形式で指定します（例：lab\administrator）。vRealize Automation マネージャ サービスがドメイン内でこの権限を持たない場合、このプロパティが必要になります。これは、複数のドメインにマシンをプロビジョニングする場合に発生します。
Plugin.AdMachineCleanup.Password	Plugin.AdMachineCleanup.UserName プロパティに関連するパスワードを指定します。
Plugin.AdMachineCleanup.Domain	破棄するマシン アカウントが含まれる Active Directory ドメイン名を指定します。
Plugin.AdMachineCleanup.RenamePrefix	プリフィックスを追加して、破棄するマシンのアカウント名を変更します。プリフィックス文字列を値の先頭に追加します（例：destroyed_）。
Pxe.Clean.ScriptName	vRealize Automation Model Manager にインストールされた EPI PowerShell スクリプトの名前を指定し、マシンのプロビジョニング後にマシン上で実行します。この値は、スクリプトが Model Manager にアップロードされるときにスクリプトに割り当てられる名前です（例：clean.ps1）。
Pxe.Setup.ScriptName	PXE ネットワーク起動プログラムを使用して開始する前に、マシン上で実行するカスタム EPI PowerShell スクリプトを指定します。この値は、スクリプトが Model Manager にアップロードされるときにスクリプトに割り当てられる名前です（例：setup.ps1）。

カスタム プロパティ R

文字 R で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-43. カスタム プロパティ R テーブル

プロパティ	説明
ReservationPolicyID	予約ポリシー名ではなく予約ポリシー ID を指定します。たとえば、vRealize Orchestrator のプロパティ <code>getApplicableReservationPolicies</code> によって返される名前は、予約ポリシー ID ではなく予約ポリシー名です。

カスタム プロパティ S

文字 S で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-44. カスタム プロパティ S テーブル

プロパティ	説明
<p>SysPrep.Section.Key</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SysPrep.GuiUnattended.AdminPassword ■ SysPrep.GuiUnattended.EncryptedAdminPassword ■ SysPrep.GuiUnattended.TimeZone 	<p>プロビジョニングの WinPE ステージで、マシン上の SysPrep 応答ファイルに追加する情報を指定します。SysPrep 応答ファイルにすでに存在する情報は、これらのカスタム プロパティで上書きされます。<i>Section</i> は、SysPrep 応答ファイルのセクションの名前を表します。たとえば、GuiUnattended や UserData のように指定します。<i>Key</i> は、セクション内のキー名を表します。たとえば、プロビジョニングされたマシンのタイム ゾーンを西太平洋標準時に設定するには、カスタム プロパティ <code>GuiUnattended.UserData.TimeZone</code> を定義し、値を 275 に設定します。</p> <p>セクション、キー、および指定できる値の詳細な一覧については、System Preparation Utility for Windows のドキュメントを参照してください。</p> <p>次に示す <i>Section.Key</i> ペアは、WIM ベース プロビジョニングに対して指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ GuiUnattended <ul style="list-style-type: none"> ■ AdminPassword ■ EncryptedAdminPassword ■ TimeZone ■ UserData <ul style="list-style-type: none"> ■ ProductKey ■ FullName ■ ComputerName ■ OrgName ■ 識別名 <ul style="list-style-type: none"> ■ DomainAdmin ■ DomainAdminPassword ■ JoinDomain ■ JoinWorkgroup
Sysprep.Identification.DomainAdmin	Active Directory のターゲット ドメインに管理者レベルでアクセスできるユーザーの名前を指定します。vCloud Director または vCloud Air に送信する認証情報にはユーザー ドメインを含めないでください。
Sysprep.Identification.DomainAdminPassword	Sysprep.Identification.DomainAdmin プロパティに関連付けるパスワードを指定します。
Sysprep.Identification.JoinDomain	Active Directory に参加させるドメインの名前を指定します。
Sysprep.Identification.JoinWorkgroup	ドメインを使用しない場合は、参加させるワークグループの名前を指定します。
SysPrep.UserData.ComputerName	マシン名を指定します (例 : lab-client005)。
SysPrep.UserData.FullName	ユーザーの氏名を指定します。
SysPrep.UserData.OrgName	ユーザーの組織名を指定します。
SysPrep.UserData.ProductKey	Windows のプロダクト キーを指定します。

表 1-44. カスタム プロパティ S テーブル (続き)

プロパティ	説明
SCCM.Collection.Name	オペレーティング システムの展開タスク シーケンスが含まれる SCCM コレクションの名前を指定します。
SCCM.CustomVariable.Name	カスタム変数の値を指定します。Name は、プロビジョニングされたマシンが SCCM コレクションに登録された後で SCCM タスク シーケンスが使用できるカスタム変数の名前です。値は、選択するカスタム変数によって決まります。統合で必要になる場合は、SCCM.RemoveCustomVariablePrefix を使用して、カスタム変数から SCCM.CustomVariable. プリフィックスを削除できます。
SCCM.Server.Name	このコレクションが存在する SCCM サーバの完全修飾ドメイン名を指定します (例: lab-sccm.lab.local)。
SCCM.Server.SiteCode	SCCM サーバのサイト コードを指定します。
SCCM.Server.UserName	SCCM サーバに管理者レベルでアクセスできるユーザーの名前を指定します。
SCCM.Server.Password	SCCM.Server.UserName プロパティに関連付けられているパスワードを指定します。
SCCM.RemoveCustomVariablePrefix	カスタム プロパティ SCCM.CustomVariable.Name を使用して作成した SCCM カスタム変数から SCCM.CustomVariable. プリフィックスを削除するには、true に設定します。
Scvmm.Generation2	true に設定した場合、ブループリントで Hyper-V (SCVMM) 2012 R2 リソースに Generation-2 マシンをプロビジョニングできることを指定します。Generation-2 プロビジョニングでは、ブループリントに Hyperv.Network.Type = synthetic プロパティ設定も含まれている必要があります。
Snapshot.Policy.AgeLimit	<p>マシンに適用できるスナップショットの存続期限を日数で設定します。このプロパティは、vSphere プロビジョニングに適用されます。</p> <p>スナップショットがこの存続期限を超えると、[適用] オプションは使用できなくなります。</p> <p>スナップショットの存続期限に達すると、スナップショットは維持されますが、そのスナップショットに戻すことはできなくなります。vSphere クライアントを使用して、スナップショットを削除できます。</p>
Snapshot.Policy.Limit	<p>マシンあたりに許可されるスナップショットの数を設定します。デフォルトの設定は、マシンあたり 1 つのスナップショットです。このプロパティは、vSphere プロビジョニングに適用されます。0 に設定すると、スナップショットを作成するブループリント オプションは、サポート ロールとマネージャ ロールを除き、すべてのユーザーに表示されなくなります。</p> <p>スナップショットは階層構造で表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 深さ - 最大は 31。 ■ 幅 - 制限なし。

表 1-44. カスタム プロパティ S テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>software.agent.service.url</code>	<p>ポート転送を使用する場合は、Amazon AWS トンネル マシンのプライベート IP アドレスおよび vRealize Automation ソフトウェア サービス API のポートを指定します (たとえば <code>https://Private_IP:1443/software-service/api</code>)。</p> <p>このプロパティは、<code>software.ebs.url</code> および <code>agent.download.url</code> と組み合わせて、予約またはコンピューティング リソース エンドポイントに追加することができます。また、PAT または NAT、およびポート転送を使用するときに、このプロパティを使用してプライベート アドレスおよびポートを指定することができます。</p>
<code>software.agent.task.timeout.seconds</code>	<p>エージェントで実行されるソフトウェア スクリプトに対するタイムアウト期間を秒単位で指定します。デフォルトでは、エージェントで実行されるソフトウェア スクリプトに対するタイムアウト期間は、6 時間です。</p>
<code>software.ebs.url</code>	<p>ポート転送を使用する場合は、Amazon AWS トンネル マシンのプライベート IP アドレスおよび vRealize Automation イベント ブローカ サービスを指定します (たとえば <code>https://Private_IP:1443/event-broker-service/api</code>)。</p> <p>このプロパティは、<code>software.agent.service.url</code> および <code>agent.download.url</code> と組み合わせて、予約またはコンピューティング リソース エンドポイントに追加することができます。また、PAT または NAT、およびポート転送を使用するときに、このプロパティを使用してプライベート アドレスおよびポートを指定することができます。</p>
<code>software.http.proxyHost</code>	<p>プロキシ サーバのホスト名またはアドレスを指定します。</p> <p>ソフトウェア コンテンツ プロパティでプロキシ サーバを使用するには、<code>software.http.proxyHost</code> と <code>software.http.proxyPort</code> の両方を使用する必要があります。</p> <p>注： ソフトウェア プロキシ設定を使用して、ソフトウェア コンポーネントのコンテンツ プロパティ タイプの値を定義できます。コンテンツ プロパティとは、エージェントがダウンロードを行う URL です。エージェントはローカルにダウンロードされたファイルへのファイル パスとして変数を使用します。ただし、ソフトウェア プロキシ設定を使用して、URL からではなく、プロキシ ホストを介してダウンロードすることができます。</p>

表 1-44. カスタム プロパティ S テーブル (続き)

プロパティ	説明
software.http.proxyPassword	<p>プロキシ サーバへの認証に使用されるユーザー名のパスワードを指定します。software.http.proxyUser と組み合わせて使用します。</p> <p>software.http.proxyUser 設定を使用する場合は、software.http.proxyPassword 設定が必要になります。</p> <p>注： ソフトウェア プロキシ設定を使用して、ソフトウェア コンポーネントのコンテンツ プロパティ タイプの値を定義できます。コンテンツ プロパティとは、エージェントがダウンロードを行う URL です。エージェントはローカルにダウンロードされたファイルへのファイル パスとして変数を使用します。ただし、ソフトウェア プロキシ設定を使用して、URL からではなく、プロキシ ホストを介してダウンロードすることができます。</p>
software.http.proxyPort	<p>プロキシ サーバのポート番号を指定します。</p> <p>ソフトウェア コンテンツ プロパティでプロキシ サーバを使用するには、software.http.proxyHost と software.http.proxyPort の両方を使用する必要があります。デフォルトの software.http.proxyPort 値はありません。</p> <p>注： ソフトウェア プロキシ設定を使用して、ソフトウェア コンポーネントのコンテンツ プロパティ タイプの値を定義できます。コンテンツ プロパティとは、エージェントがダウンロードを行う URL です。エージェントはローカルにダウンロードされたファイルへのファイル パスとして変数を使用します。ただし、ソフトウェア プロキシ設定を使用して、URL からではなく、プロキシ ホストを介してダウンロードすることができます。</p>

表 1-44. カスタム プロパティ S テーブル (続き)

プロパティ	説明
software.http.proxyUser	<p>プロキシ サーバへの認証に使用されるユーザー名を指定します。software.http.proxyPassword と組み合わせて使用します。</p> <p>software.http.proxyUser 設定はオプションです。software.http.proxyUser 設定を使用する場合は、software.http.proxyPassword 設定が必要になります。</p> <p>注： ソフトウェア プロキシ設定を使用して、ソフトウェア コンポーネントのコンテンツ プロパティ タイプの値を定義できます。コンテンツ プロパティとは、エージェントがダウンロードを行う URL です。エージェントはローカルにダウンロードされたファイルへのファイル パスとして変数を使用します。ただし、ソフトウェア プロキシ設定を使用して、URL からではなく、プロキシ ホストを介してダウンロードすることができます。</p>
software.http.noProxyList	<p>プロキシ ホストを使用できないホストとポート (オプション) のリストを指定します。元のコンテンツ プロパティでは、リストのパターンと一致する URL から直接ダウンロードされます。プロキシ サーバが構成されている場合にのみ、software.http.noProxyList 設定は適用されます。たとえば、次のコンマ区切りリストでは次のようになります。</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <pre>"buildweb.eng.vmware.com,confluence.eng.vmware.com:443,*.eng.vmware.com:80"</pre> </div> <p>次の内容が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホストが「buildweb.eng.vmware.com」であるすべての URL では、プロキシ サーバを使用できません。 ■ ホストが「confluence.eng.vmware.com」であり、ポートが 443 であるすべての URL では、プロキシ サーバを使用できません。 ■ ホストが「eng.vmware.com」名前空間に含まれ、ポートが 80 であるすべての URL では、プロキシ サーバを使用できません。 <p>注： ソフトウェア プロキシ設定を使用して、ソフトウェア コンポーネントのコンテンツ プロパティ タイプの値を定義できます。コンテンツ プロパティとは、エージェントがダウンロードを行う URL です。エージェントはローカルにダウンロードされたファイルへのファイル パスとして変数を使用します。ただし、ソフトウェア プロキシ設定を使用して、URL からではなく、プロキシ ホストを介してダウンロードすることができます。</p>

カスタム プロパティ V

V で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

vCloud Networking and Security のジェネラル サポートは終了しましたが、VCNS カスタム プロパティは NSX の用途に対して引き続き有効です。詳細については、[ナレッジベースの記事 KB2144733](#) を参照してください。

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル

プロパティ	説明
VbScript.PreProvisioning.Name	マシンのプロビジョニングの前に実行される Visual Basic スクリプトのフルパスを指定します。たとえば、%System-Drive%\Program Files(x86)\VMware\VCAC Agents\EPI_Agent\Scripts\SendEmail.vbs を指定します。スクリプト ファイルは、Visual Basic スクリプトの EPI エージェントがインストールされているシステムに存在する必要があります。
VbScript.PostProvisioning.Name	マシンのプロビジョニングの後に実行される Visual Basic スクリプトのフルパスを指定します。たとえば、%System-Drive%\Program Files(x86)\VMware\VCAC Agents\EPI_Agent\Scripts\SendEmail.vbs を指定します。スクリプト ファイルは、Visual Basic スクリプトの EPI エージェントがインストールされているシステムに存在する必要があります。
VbScript.UnProvisioning.Name	マシンの破棄時に実行される Visual Basic スクリプトのフルパスを指定します。たとえば、%System-Drive%\Program Files (x86)\VMware\VCAC Agents\EPI_Agent\Scripts\SendEmail.vb を指定します。スクリプト ファイルは、Visual Basic スクリプトの EPI エージェントがインストールされているシステムに存在する必要があります。
VCloud.Lease.Sync.TimeBufferMins	vCloud Director または vCloud Air でプロビジョニングされたマシンで、vCloud Director または vCloud Air でその期間内に有効期限が切れるように設定されている場合にのみ vCloud Director と vRealize Automation 間のリースの同期が行われるように、コンピュート リソースの整数のしきい値を指定します。競合が見つかったと、リース値は vRealize Automation で定義されているリースの長さに合わせて同期されます。 VCloud.Lease.Sync.TimeBufferMins のデフォルト値は 720 分 (12 時間) です。VCloud.Lease.Sync.TimeBufferMins が存在しない場合、デフォルト値が使用されます。たとえば、デフォルト値が使用される場合、vRealize Automation によってリースの同期チェック ワークフローが 45 分 (ワークフローのデフォルト) ごとに実行され、12 時間以内に有効期限が切れるように設定されたマシンのリースのみが、vRealize Automation で定義されているリースの長さに合わせて変更されます。
VCloud.Owner.UseEndpointAccount	プロビジョニングおよびインポート操作で vCloud Air または vCloud Director のマシン所有者としてエンドポイント アカウントを割り当てる場合は、true に設定します。所有権の変更操作の場合、その所有者はエンドポイントでは変更されません。指定しなかったり、false に設定されていたりする場合は、vRealize Automation の所有者はマシン所有者です。
VCloud.Template.MakeIdenticalCopy	マシン プロビジョニングで vCloud Air または vCloud Director テンプレートの同一コピーをクローン作成する場合は、true に設定します。マシンは、テンプレートの同一コピーとしてプロビジョニングされます。ストレージ パスを含め、テンプレートで指定される設定は、ブループリントで指定される設定より優先されます。テンプレートからの唯一の変更点は、ブループリントで指定されたマシン プリフィックスから生成される、クローン作成されたマシンの名前です。 同一コピーとしてプロビジョニングされる vCloud Air または vCloud Director マシンでは、vRealize Automation 予約では使用することができないネットワークとストレージ プロファイルを使用できます。不明な予約の割り当てが発生するのを防止するため、テンプレートで指定されているストレージ プロファイルまたはネットワークが予約に含まれていることを確認してください。

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names. <i>name</i>	<p>プロビジョニング中に仮想マシンが割り当てられる NSX ロード バランシング プールを指定します。仮想マシンは、指定したすべてのプールの全サービス ポートに割り当てられます。値は <i>edge/pool</i> 名またはコンマで区切られた <i>edge/pool</i> 名のリストになります。名前の大文字と小文字は区別されます。</p> <p>注: VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names のカスタム プロパティを使用して、マシン IP アドレスを既存のロード バランサに追加できます。vRealize Automation および NSX は、指定の Edge ロード バランサ プールの最初のメンバーを使用し、新しいメンバー ポート特定してポート設定を監視します。ただし、NSX 6.2 ではメンバーのポート設定を指定する必要がありません。NSX 6.2 で VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names を使用して、マシンを既存のプールに追加する場合にプロビジョニングが失敗しないように、NSX でロード バランサ プールの最初のメンバーにポート値を指定する必要があります。</p> <p>名前を追加すると、複数のバージョンのカスタム プロパティを作成できます。たとえば、次のプロパティでは、一般用途向けに設定されるロード バランシング プールや、高、中、低のパフォーマンス要件があるマシンに設定されるロード バランシング プールを一覧表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names ■ VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names.moderate ■ VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names.high ■ VCNS.LoadBalancerEdgePool.Names.low
VCNS.SecurityGroup.Names. <i>name</i>	<p>プロビジョニング中に仮想マシンが割り当てられる 1 つ以上の NSX セキュリティ グループを指定します。値はセキュリティ グループ名またはコンマで区切られた名前のリストになります。名前の大文字と小文字は区別されます。</p> <p>名前を追加すると、複数のバージョンのプロパティを作成できます。これは、個別に使用することも、組み合わせて使用することもできます。たとえば、次のプロパティでは、一般用途、販売部、およびサポートのためのセキュリティ グループを一覧表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VCNS.SecurityGroup.Names ■ VCNS.SecurityGroup.Names.sales ■ VCNS.SecurityGroup.Names.support
VCNS.SecurityGroup.Names. <i>blueprint_name</i>	<p>NSX を使用する場合は、ブループリントに関連付ける Edge プールを指定します。</p>
VCNS.SecurityTag.Names. <i>name</i>	<p>プロビジョニング中に仮想マシンが関連付けられる 1 つ以上の NSX セキュリティ タグを指定します。この値は、セキュリティ タグの 1 つの名前、またはコンマ区切りの名前のリストです。名前の大文字と小文字は区別されます。</p> <p>名前を追加すると、複数のバージョンのプロパティを作成できます。これは、個別に使用することも、組み合わせて使用することもできます。たとえば、次のプロパティでは、一般用途、販売部、およびサポートのためのセキュリティ タグを一覧表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VCNS.SecurityTag.Names ■ VCNS.SecurityTag.Names.sales ■ VCNS.SecurityTag.Names.support

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Admin.UseGuestAgent</code>	<p>クローン作成用テンプレートのサービスとしてゲスト エージェントがインストールされている場合、マシン ブループリントで <code>True</code> に設定すると、そのテンプレートからクローン作成されたマシンのゲスト エージェント サービスが有効になります。マシンを起動すると、ゲスト エージェント サービスが起動します。ゲスト エージェントを無効にする場合は、<code>False</code> に設定します。<code>False</code> に設定すると、拡張クローン ワークフローでゲスト OS タスクにゲスト エージェントが使用されなくなり、機能が <code>VMwareCloneWorkflow</code> に制限されます。指定しない場合、または <code>False</code> 以外に設定した場合、拡張クローン ワークフローからゲスト エージェントに作業アイテムが送信されます。</p> <p>このプロパティは、Amazon Web Services のプロビジョニングには適用されません。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.NameCompletion</code>	<p>ユーザー インターフェイス オプションの [RDP を使用して接続] または [SSH を使用して接続] の場合に、RDP または SSH ファイルで生成されるマシンの完全修飾ドメイン名に含めるドメイン名を指定します。たとえば、値を <code>myCompany.com</code> に設定すると、RDP または SSH ファイルに <code>my-machine-name.myCompany.com</code> という完全修飾ドメイン名が生成されます。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.ConnectAddress</code>	<p>[RDP を使用して接続] オプションが使用されている場合や、自動電子メールに接続されている場合に、RDP ファイルのダウンロード先となるマシンの RDP 接続アドレスを指定します。ユーザーにプロンプトを表示する必要があったり、デフォルト値を指定していなかったりする場合を除いて、ブループリントまたはプロパティ グループでは使用しないでください。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.ConnectAddress.Regex</code>	<p>vRealize Automation 管理者が RDP 接続のようなターミナル接続の IP アドレスと一致する正規表現を定義するために使用します。一致した場合、IP アドレスは <code>VirtualMachine.Admin.ConnectAddress</code> カスタム プロパティに保存されます。それ以外の場合、最初に使用可能な IP アドレスが指定されます。</p> <p>たとえば、プロパティ値を <code>10.10.0.</code> に設定すると、仮想マシンに割り当てられている <code>10.10.0.*</code> サブネットから IP アドレスを選択できます。サブネットが割り当てられていない場合、このプロパティは無視されます。</p> <p>このプロパティは、OpenStack に対して使用できます。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.ThinProvision</code>	<p>ESX コンピュート リソースでシン プロビジョニングを使用するかどうかを決定します。ディスク プロビジョニングは、基盤となるストレージから抽出します。シン プロビジョニングを使用する場合は、<code>True</code> に設定します。標準のプロビジョニングを使用する場合は、<code>False</code> に設定します。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.CustomizeGuestOSDelay</code>	<p>カスタマイズが完了してからゲスト OS のカスタマイズが開始するまでの待機時間を指定します。値は <code>HH:MM:SS</code> 形式にする必要があります。値が設定されていない場合、デフォルト値は 1 分 (<code>00:01:00</code>) になります。このカスタム プロパティを含めない場合、ゲスト エージェントの作業アイテムが完了する前に仮想マシンが再起動すると、プロビジョニングに失敗する場合があります。</p> <p>このプロパティは、Amazon Web Services のプロビジョニングには適用されません。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル（続き）

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Admin.Datastore.Cluster.ResourceLeaseDurationSec</code>	<p>複数の仮想マシンをプロビジョニングして SDRS を使用する際に、<code>RecommendDataStore</code> API の呼び出し中にストレージ リソースを予約する時間の値を 30 ~ 3,600 の範囲の秒数で指定します。このプロパティは、プロビジョニングを要求する際に、ビジネス グループまたはブループリントに追加することができます。リース ロックは、ストレージ クラスタ内のすべてのデータストアではなく、展開によって使用されているデータストアにのみ適用されます。リース ロックは、プロビジョニングが完了するか、失敗したときに解放されます。</p> <p>指定しない場合、プロビジョニング時にストレージ リソースへのロックは適用されません。</p> <p>メモリ サイズの考慮事項が原因で、10 台を超える仮想マシンを同時に要求すると、プロビジョニングが失敗する可能性があります。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.NetworkInterfaceType</code>	<p>ゲスト オペレーティング システムでサポートおよびエミュレートされるネットワーク アダプタ タイプを示します。テンプレートのクローン作成操作のために新しい仮想マシンを作成し、特定のアダプタ タイプを割り当てるために使用します。新しくプロビジョニングされた仮想マシンのネットワーク設定を変更する場合に使用します。次のオプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ E1000（デフォルト） ■ VirtIO ■ RTL8139 ■ RTL8139 VirtIO
<code>VirtualMachine.Admin.Name</code>	<p>vSphere 用に生成されるマシン名（CodyVM01 など）を指定します。仮想マシン名をカスタマイズするためにカスタム ワークフローまたはプラグインを作成する場合は、その仮想マシンの名前と一致するようにこのプロパティを設定します。これは、仮想マシンに命名するためにエージェントが使用する内部入力プロパティです。</p> <p>注： このプロパティは、vSphere 専用です。</p> <p>ブループリントで指定された値は、このプロパティに影響しません。このプロパティは、ユーザーにプロンプトを表示するために使用することを想定していません。ユーザーにプロンプトを表示するには、<code>HostName</code> プロパティを使用します。このプロパティをランタイムに設定すると、ハイパーバイザーで作成されるコンテナ名がアイテム レコード名と一致しなくなる可能性があります。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.UUID</code>	<p>マシンの UUID を指定します。ゲスト エージェントは、マシンが作成されると値を記録します。この値は読み取り専用になります。ブループリントまたはプロパティ グループの値は、このプロパティに影響しません。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.AgentID</code>	<p>ゲスト エージェントの UUID を指定します。ゲスト エージェントは、マシンが作成されると値を記録します。この値は読み取り専用になります。ブループリントまたはプロパティ グループの値は、このプロパティに影響しません。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.Owner</code>	<p>マシン所有者のユーザー名を指定します。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.Approver</code>	<p>マシン申請を承認したグループ マネージャのユーザー名を指定します。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.Description</code>	<p>マシンの所有者や管理者が入力または変更するマシンの説明を指定します。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.EncryptPasswords</code>	<p>True に設定する場合は、管理者パスワードが暗号化されるように指定します。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Admin.AdministratorEmail</code>	マネージャのメール アドレス、またはプロビジョニング ブループリントのビジネス グループの Active Directory アカウントを指定します。複数のメールアドレスは、AlbertAdmin@VMware.com,WeiLeeMgr@VMware.com のようにコンマで区切ります。
<code>VirtualMachine.Admin.TotalDiskUsage</code>	<code>VirtualMachine.DiskN.Size</code> プロパティで指定されたすべてのディスクや、 <code>VMware.Memory.Reservation</code> プロパティで指定されたスワップ ファイルを含む、マシンで使用する総ディスク容量 (GB 単位) を指定します。値は GB 単位で指定しますが、ディスク容量は vRealize Automation によって MB 単位で保存されます。
<code>VirtualMachine.Admin.Hostname</code>	<p>エンドポイントのマシンのプロビジョニングに使用されるホストを管理者に通知します。指定した値はマシンで実装され、データ収集中に取り込まれます。たとえば、マシンのコンピュート リソースが変更されると、プロキシ エージェントによってマシンの <code>VirtualMachine.Admin.Hostname</code> プロパティの値がアップデートされます。</p> <p>注： これは、エージェントからの内部出力プロパティで、データ収集プロセスで取り込まれ、これによりマシンが存在するホストが識別されます。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.ClusterName</code>	<p>使用するマシンのコンピュート リソースが含まれているクラスタを管理者に通知します。</p> <p>注： これは、エージェントからの内部出力プロパティで、データ収集プロセスで取り込まれ、これによりマシンが存在するクラスタが識別されます。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.ApplicationID</code>	マシンに割り当てることができるアプリケーション ID をリストします。
<code>VirtualMachine.Admin.AddOwnerToAdmins</code>	<p><code>VirtualMachine.Admin.Owner</code> プロパティで指定されたマシンの所有者をマシンのローカル管理者グループに追加する場合は、True (デフォルト) に設定します。</p> <p>クローン作成によるプロビジョニングでは、このプロパティは使用できません。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.AllowLogin</code>	<code>VirtualMachine.Admin.Owner</code> プロパティでの指定に従ってマシン所有者をローカルのリモート デスクトップ ユーザー グループに追加するには、True (デフォルト) に設定します。
<code>VirtualMachine.Admin.DiskInterfaceType</code>	<p>ディスク ドライバのタイプを指定します。次のディスク ドライバがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ IDE (デフォルト) ■ VirtIO <p>これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.EagerZero</code>	<p>True は、マシン ディスクが Eager Zero の VMware プロビジョニング フォーマットを使用してプロビジョニングされることを指定します。</p> <p>Eager Zero シック プロビジョニングは、フォールト トレランスなどのクラスタリング機能をサポートする、シック仮想ディスクのタイプです。仮想ディスクに必要な容量は、作成時に割り当てられます。フラット フォーマットの場合とは異なり、物理デバイスに残っているデータは、仮想ディスクの作成時に消去されます。他のタイプのディスクに比べて、ディスクの作成に非常に長い時間がかかることがあります。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル（続き）

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Admin.ForceHost</code>	<p>ESX ホストの名前を指定します。このプロパティは、<code>VirtualMachine.Admin.HostSelectionPolicy</code> が <code>EXACT_MATCH</code> に設定されている場合にのみ有効と見なされます。</p> <p>注： このプロパティは、vSphere 専用です。</p> <p>vSphere クラスタに対してプロビジョニングする場合は、<code>VirtualMachine.Admin.ForceHost</code> プロパティを使用してプロビジョニングの対象マシンが存在するホストを指定することができます。このプロパティは、クラスタで DRS が [自動] に設定されていない場合にのみ使用されます。クラスタで DRS が有効になっており、[自動] に設定されている場合は、vSphere により、プロビジョニング対象マシンが再起動されるときに、そのマシンが再配置されます。</p>
<code>VirtualMachine.Admin.HostSelectionPolicy</code>	<p><code>VirtualMachine.Admin.ForceHost</code> プロパティで指定されているホストにマシンを配置する必要がある場合は、任意で <code>EXACT_MATCH</code> に設定できます。ホストが使用不能な場合、申請は失敗します。ホストが指定されていない場合、次に最適な使用可能なホストが選択されます。<code>EXACT_MATCH</code> に設定する場合は、指定したホストに十分なメモリがなかったり、メンテナンス モードになっていたりと、エラーが発生します。</p> <p>注： このプロパティは、vSphere にのみ適用されます。</p>
<code>VirtualMachine.Agent.CopyToDisk</code>	<p>ゲスト エージェントの実行可能ファイルをマシンのディスクの <code>%SystemDrive%\VRM\Build\Bin</code> にコピーする場合は、<code>True</code>（デフォルト）に設定します。</p>
<code>VirtualMachine.Agent.GuiRunOnce</code>	<p>ゲスト エージェント実行を <code>SysPrep.inf</code> の <code>run once</code> セクションに含める場合は、<code>True</code> に設定します。Linux エージェントでプロビジョニング ワークフローを停止する場合は、<code>False</code> に設定します。</p>
<code>VirtualMachine.Agent.Reboot</code>	<p>ゲスト OS のインストール後にゲスト エージェントによってマシンが再起動されるように指定する場合は、<code>True</code>（デフォルト）に設定します。</p>
<code>VirtualMachine.CDRom.Attach</code>	<p>CD-ROM デバイスを使用せずにマシンをプロビジョニングする場合は、<code>False</code> に設定します。デフォルトは <code>True</code> です。</p>
<code>VirtualMachine.CPU.Count</code>	<p>マシンに割り当てる CPU 数（たとえば、2）を指定します。デフォルトは、ブループリントの CPU 設定で指定した値です。</p> <p>注： このカスタム プロパティ値は、マシンが最初にプロビジョニングされるときにブループリントの CPU 値によってオーバーライドされます。</p>
<code>VirtualMachine.Customize.WaitComplete</code>	<p>すべてのカスタマイズが完了するまで、プロビジョニング ワークフローで作業アイテムがゲスト エージェントに送信されないようにする場合は、<code>True</code> に設定します。カスタマイズが完了する前に作業アイテムを作成できるようにするには、<code>False</code> に設定します。</p> <p>このプロパティは、Amazon Web Services のプロビジョニングには適用されません。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Core.Count</code>	<p>0 を超える値は、仮想マシンをプロビジョニングする際のソケットあたりのコア数を指定します。</p> <p>このプロパティをブループリントに対して使用して、仮想ソケットあたりのコア数またはソケットの総数を指定します。たとえば、ライセンス条件によってライセンスされるソフトウェアがソケット単位に制限される場合や、使用可能なオペレーティング システムで多くのソケットが認識されるために追加の CPU を追加のコアとしてプロビジョニングする必要がある場合などです。</p>
<code>VirtualMachine.DiskN.Letter</code>	<p>マシンのディスク <i>N</i> のドライブ文字またはマウント ポイントを指定します。デフォルトは C です。たとえば、ディスク 1 に文字 D を指定するには、カスタム プロパティを <code>VirtualMachine.Disk1.Letter</code> として定義し、値として D と入力します。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントと組み合わせて使用する場合、ゲスト エージェントは、この値によって指定されたドライブ文字またはマウント ポイントを使用して、追加ディスク <i>N</i> をゲスト OS にマウントします。</p>
<code>VirtualMachine.DiskN.IsFixed</code>	<p>マシンの再構成時に特定のディスクを編集することを無効にします。特定のボリュームの編集容量オプションの表示を無効にする場合は、True に設定します。値 True の大文字と小文字は区別されます。<i>N</i> 値は、ディスクの 0 ベースインデックスです。</p> <p>あるいは、データベースの <code>VirtualMachineProperties</code> テーブルで <code>VirtualMachine.DiskN.IsFixed</code> カスタム プロパティを True に設定するか、リポジトリ API を使用して、<code>../Repository/Data/ManagementModelEntities.svc/VirtualMachines(guid'60D93A8A-F541-4CE0-A6C6-78973AC0F1D2')/VirtualMachineProperties</code> などの URI 値を指定することができます。</p>
<code>VirtualMachine.DiskN.Label</code>	<p>マシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。ディスク ラベルの最大文字数は 32 文字です。ディスク番号は連番にする必要があります。ゲスト エージェントに対して使用する場合は、ゲスト OS 内でマシンのディスク <i>N</i> のラベルを指定します。</p>
<code>VirtualMachine.DiskN.Active</code>	<p>マシンのディスク <i>N</i> が有効であることを指定する場合は、True (デフォルト) に設定します。マシンのディスク <i>N</i> が有効ではないことを指定する場合は、False に設定します。</p>
<code>VirtualMachine.DiskN.FS</code>	<p>Windows ゲスト エージェント (gugent) で使用します。マシンのディスク <i>N</i> のファイル システムを指定します。オプションは、NTFS (デフォルト)、FAT および FAT32 です。使用例については、<code>10_setupdisks.bat</code> Windows agent スクリプトを参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.DiskN.FileSystem</code>	<p>Linux ゲスト エージェント (gugent) で使用します。マシンのディスク <i>N</i> のファイル システムを指定します。オプションは ext3、ext4、および XFS です。使用例については、<code>30_DiskSetup.sh</code> Linux エージェント スクリプトを参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.DiskN.Percent</code>	<p>マシンで使用できるようにゲスト エージェントによってフォーマットされるディスク <i>N</i> の割合を指定します。そのマシンは、ディスクの残りの部分を使用できません。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.DiskN.StorageReservationPolicy</code>	<p>ディスク <i>N</i> のストレージを検出するために使用するストレージ予約ポリシーを指定します。また、名前付きストレージ予約ポリシーをボリュームに割り当てます。このプロパティを使用するには、プロパティ名の <i>N</i> をボリューム番号に置き換えて、ストレージ予約ポリシー名をその値として指定します。このプロパティは、ブループリントで指定されているストレージ予約ポリシー名と同等です。ディスク番号は連番にする必要があります。このプロパティは、すべての仮想および vCloud 予約で有効です。このプロパティは、物理、Amazon、または OpenStack 予約では無効です。</p> <p><code>VirtualMachine.Disk N.StorageReservationPolicyMode</code> を使用して、ストレージ予約ポリシーのデータストアに十分な容量がない場合にプロビジョニングが失敗しないようにできます。このカスタム プロパティを使用すると、ポリシーのデータストアに十分な容量が残っていない場合に、vRealize Automation が、指定したストレージ予約ポリシーの外にあるデータストアを選択できるようになります。</p>
<code>VirtualMachine.DiskN.StorageReservationPolicyMode</code>	ディスク <i>N</i> を最適なストレージ予約ポリシーに割り当てます。
<code>VirtualMachine.DiskN.Storage</code>	マシン ディスク <i>N</i> を配置するデータストア (たとえば、DATASTORE01) を指定します。このプロパティは、1 つのデータストアをリンク クローン ブループリントに追加するために使用されることもあります。 <i>N</i> は、割り当てるボリュームのインデックス (0 から開始) です。ボリュームに割り当てるデータストアの名前を入力します。これは、[コンピュート リソースの編集] ページの [ストレージ パス] に表示されるデータストア名です。ディスク番号は連番にする必要があります。
<code>VirtualMachine.EPI.Type</code>	<p>外部プロビジョニング インフラストラクチャのタイプを指定します。</p> <p>BMC BladeLogic の統合の場合は、BMC に設定します。</p> <p>Citrix プロビジョニング サーバの統合の場合は、CitrixProvisioning に設定します。</p>
<code>VirtualMachine.EULA.AcceptAll</code>	vCloud Air または vCloud Director エンドポイントの仮想マシン テンプレートの EULA すべてがプロビジョニング中に承諾されるように指定するには、true に設定します。
<code>VirtualMachine.Host.TpmEnabled</code>	<p>Trust Protection Module (TPM) デバイスがインストールされていて、ESX および vSphere で認識されるホストにしか仮想マシンを配置できないようにします。デフォルト値は False です。</p> <p>クラスタ内のすべてのホストに Trust Protection Module デバイスがインストールされている必要があります。条件を満たすホストまたはクラスタが見つからない場合、このプロパティを削除するまでマシンをプロビジョニングすることはできません。</p>
<code>VirtualMachine.Memory.Size</code>	<p>マシンのメモリのサイズ (MB) を指定します (1024 など)。デフォルトは、ブループリントのメモリ設定で指定された値です。</p> <p>注: このカスタム プロパティ設定は、マシンが最初にプロビジョニングされるときのブループリントのメモリ設定によってオーバーライドされます。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.NetworkN.Address</code>	<p>固定 IP アドレスを使用してプロビジョニングされるマシンのネットワーク デバイス <i>N</i> の IP アドレスを指定します。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN</code> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.AdditionAddressM</code>	<p>ネットワーク <i>N</i> の OpenStack インスタンス用に割り当てられる追加の <i>M</i> IP アドレスを定義します。<code>VirtualMachine.NetworkN</code> で指定した IP アドレス セットは除きます。<code>Address</code>。プロパティによって指定された IP アドレス セットは除外します。[ネットワーク] タブの [追加アドレス] 列に、他のアドレスが表示されます。</p> <p>このプロパティは、OpenStack のマシン状態のデータ収集で使用されます。OpenStack エンドポイントによってのみデータ収集が実行されますが、このプロパティは OpenStack に固有ではなく、他のエンドポイント タイプのライフサイクルの拡張性のために使用することができます。</p> <p>このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.AddressType</code>	<p>ネットワーク プロバイダに対して IP アドレスを割り当てる方法を指定します。ここでの <code>NetworkN</code> は 0 から始まるネットワーク番号です。使用できる値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DHCP ■ Static ■ MANUAL (vCloud Air と vCloud Director でのみ使用可能) <p>MANUAL 値では、IP アドレスも指定する必要があります。</p> <p>このプロパティは、ブループリントにおいて、vCloud Air、vCloud Director、および vSphere マシン コンポーネントを構成する場合に使用できます。[<code>VirtualMachine.NetworkN.Name</code>] も参照してください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddressType</code>	<p>これにより、ネットワーク デバイス <i>N</i> の MAC アドレスが生成されるのか、またはユーザー定義 (固定) なのかを指定します。このプロパティは、クローン作成で使用できます。</p> <p>デフォルト値は <code>generated</code> です。値が <code>static</code> の場合は、<code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddress</code> を使用して MAC アドレスも指定する必要があります。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN</code> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddress</code>	<p>ネットワーク デバイス <i>N</i> の MAC アドレスを指定します。このプロパティは、クローン作成で使用できます。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddressType</code> の値が <code>generated</code> の場合、このプロパティには生成されたアドレスが含まれます。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN.MacAddressType</code> の値が <code>static</code> の場合は、このプロパティで MAC アドレスを指定します。ESX Server ホストでプロビジョニングされた仮想マシンの場合、アドレスは、VMware で指定された範囲内に収まっている必要があります。詳細については、vSphere のドキュメントを参照してください。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN</code> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.Name</code>	<p>接続先のネットワークの名前、たとえばマシンの接続先のネットワーク デバイス <i>N</i> を指定します。これは、ネットワーク インターフェイス カード (NIC) と同等です。</p> <p>デフォルトの場合、マシンがプロビジョニングされる予約で利用できるネットワーク バスからネットワークが割り当てられます。</p> <p>[<code>VirtualMachine.NetworkN.AddressType</code>] も参照してください。</p> <p>ネットワーク デバイスが確実に特定のネットワークに接続されるようにするには、このプロパティの値を使用可能な予約のネットワーク名に設定します。たとえば、プロパティを <code>N = 0</code> および <code>N = 1</code> と指定すると、関連付けられている予約でネットワークが選択されている場合には、2 つの NIC とその割り当て値が得られます。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN</code> カスタム プロパティは、ブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p> <p>このカスタム プロパティを使用して、定義済みの使用可能なネットワークのリストから利用者の選択に基づいて <code>VirtualMachine.Network0.Name</code> を動的に設定する方法の例については、ブログ記事の Adding a Network Selection Drop-Down in vRA 7 を参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.NetworkN.PortID</code>	<p>vSphere Distributed Switch で dvPort グループを使用する場合、ネットワーク デバイス <i>N</i> で使用するポート ID を指定します。</p> <p><code>VirtualMachine.NetworkN</code> カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使用しないでください。このプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VirtualMachine.NetworkN.NetworkProfileName	<p>ネットワーク プロファイルの名前を指定します。このネットワーク プロファイルに基づいて、固定 IP アドレスをネットワーク デバイス <i>N</i> に割り当てたり、クローン作成されたマシンのネットワーク デバイス <i>N</i> に割り当て可能な固定 IP アドレスの範囲を取得したりします。ここで、最初のデバイスでは <i>N</i>=0、2 番目のデバイスは 1、以降同様に指定していきます。</p> <p>プロパティが示すネットワーク プロファイルは、IP アドレスを割り当てるために使用されます。このプロパティにより、マシンの接続先ネットワークが予約に基づいて決定されます。</p> <p>ネットワークが割り当てられた後でこのプロパティ値を変更しても、指定のマシンに割り当てられる IP アドレス値には影響しません。</p> <p>仮想マシンの WIM ベース プロビジョニングでは、このプロパティを使用して、ネットワーク プロファイルおよびネットワーク インターフェイスを指定できます。または、[仮想予約] ページの [ネットワーク] セクションを使用することもできます。</p> <p>ネットワーク プロファイルの次の属性を使用して、クローン作成ブループリントで固定 IP アドレスを割り当てることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VirtualMachine.NetworkN.SubnetMask ■ VirtualMachine.NetworkN.Gateway ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSuffix ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSearchSuffixes <p>VirtualMachine.NetworkN カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使わないでください。</p> <p>このカスタム プロパティは、オンデマンド NAT やオンデマンド ルーティング ネットワークのプロファイル名を定義するためには使用できません。オンデマンド ネットワーク プロファイル名は割り当て時（プロビジョニング中）に生成されるため、ブループリントの作成または編集中にはそれらの名前はまだ不明です。NSX オンデマンド ネットワーク情報を指定するには、vSphere マシン コンポーネント用のブループリント デザイン キャンバスで該当するネットワーク コンポーネントを使用します。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ VirtualMachine.NetworkN.SubnetMask ■ VirtualMachine.NetworkN.Gateway ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryDns ■ VirtualMachine.NetworkN.PrimaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.SecondaryWins ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSuffix ■ VirtualMachine.NetworkN.DnsSearchSuffixes 	<p>VirtualMachine.NetworkN.NetworkProfileName で指定されたネットワーク プロファイルの属性を構成します。</p> <p>VirtualMachine.NetworkN カスタム プロパティは、個々のブループリントおよびマシンに固有です。マシンが申請されると、マシンが予約に割り当てられる前に、ネットワークおよび IP アドレスの割り当てが実行されます。ブループリントは特定の予約に割り当てられない可能性もあるため、このプロパティを予約で使わないでください。</p> <p>VirtualMachine.NetworkN.DnsSearchSuffixes を使用して複数の DNS 検索サフィックスの値を指定する場合、Windows 展開用に値をコンマで区切ることができます。これらのプロパティはオンデマンド NAT ネットワークまたはオンデマンド ルーティング ネットワークではサポートされません。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.Rdp.File</code>	<p>マシンへの RDP リンクを開くときに使用される RDP 設定を含むファイルを指定します。<code>VirtualMachine.Rdp.SettingN</code> と一緒に、またはその代わりとして使用できます。ファイルは、<code>vRA_installation_dir\Server\Website\Rdp</code> フォルダにあります。Rdp ディレクトリを作成する必要があります。</p> <p>詳細については、『<code>VirtualMachine.Rdp.SettingN</code>』を参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.Rdp.SettingN</code>	<p>マシンへの RDP リンクを開くときに使用される RDP 設定を指定します。<code>N</code> は、各 RDP 設定を区別するために使用される一意の番号です。たとえば、認証要件が指定されないように RDP 認証レベルを指定するには、カスタム プロパティ <code>VirtualMachine.Rdp.Setting1</code> を定義し、値を <code>authentication level:i:3</code> に設定します。使用可能な RDP 設定とその正しい構文については、Windows Server でのリモート デスクトップ サービス向けの RDP 設定などの Microsoft Windows RDP ドキュメントを参照してください。</p> <p>詳細については、『<code>VirtualMachine.Rdp.File</code>』を参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.Reconfigure.DisableHotCpu</code>	<p>マシンの再構成アクションで指定されたマシンが再起動されるように指定するには、<code>true</code> に設定します。デフォルトでは、マシンの再構成アクション時にマシンは再起動されません。</p> <p>CPU、メモリ、またはストレージのホット アドを実行すると、vSphere でマシンまたはテンプレートの <code>Hot Add</code> 設定が有効になっていなければ、マシンの再構成アクションに失敗し、マシンが再起動されません。</p> <p><code>VirtualMachine.Reconfigure.DisableHotCpu=true</code> を <code>vRealize Automation</code> ブループリントのマシン コンポーネントに追加して <code>Hot Add</code> 設定を無効にし、vSphere の <code>Hot Add</code> 設定に関係なくマシンを強制的に再起動することができます。このカスタム プロパティは、ハードウェアの再構成をサポートするマシン タイプ、すなわち vSphere、vCloud Air、および vCloud Director でのみ使用できます。</p>
<code>VirtualMachine.Request.Layout</code>	<p>仮想マシンの申請ページで使用されるプロパティ レイアウトを指定します。この値は、使用されるレイアウトの名前と一致している必要があります。</p>
<code>VirtualMachine.Software.Execute</code>	<p><code>True</code> に設定すると、Amazon Web Services プロビジョニングのゲスト エージェントがサポートされます。</p> <p>このプロパティを <code>VirtualMachine.SoftwareN.Name</code> および <code>VirtualMachine.SoftwareN.ScriptPath</code> のカスタム プロパティと一緒に使用して、Amazon Web Services のプロビジョニングでゲスト エージェントを構成および使用します。</p>
<code>VirtualMachine.SoftwareN.Name</code>	<p>プロビジョニング中にインストールまたは実行するソフトウェア アプリケーション <code>N</code> やスクリプトの分かりやすい名前を指定します。これは、任意の参照専用プロパティです。このプロパティは、拡張クローン ワークフローやゲスト エージェントでは実質的に機能しませんが、ユーザー インターフェイスでカスタム ソフトウェアを選択する場合や、ソフトウェアの使用状況をレポートする場合に役立ちます。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VirtualMachine.SoftwareN.ScriptPath	<p>アプリケーションのインストール スクリプトへの完全パスを指定します。このパスは、ゲスト OS で参照される有効な絶対パスにする必要があります。また、スクリプト ファイル名が含まれている必要があります。</p> <p>パスの文字列に {CustomPropertyName} を挿入することで、カスタム プロパティ値をパラメータとしてスクリプトに渡すことができます。たとえば、名前が ActivationKey で値が 1234 のカスタム プロパティがある場合、スクリプト パスは、D:\InstallApp.bat -key {ActivationKey} となります。ゲスト エージェントはコマンド D:\InstallApp.bat -key 1234 を実行します。その後、この値を受け入れて使用するようスクリプト ファイルをプログラムできます。</p> <p>また、パスの文字列に {YourCustomProperty} を挿入すると、カスタム プロパティ値をパラメータとしてスクリプトに渡すことができます。たとえば、値 \\vra-scripts.mycompany.com\scripts\changeIP.bat を入力すると、共有された場所から changeIP.bat スクリプトが実行されますが、値 \\vra-scripts.mycompany.com\scripts\changeIP.bat {VirtualMachine.Network0.Address} を入力すると、changeIP スクリプトが実行され、さらに VirtualMachine.Network0.Address プロパティ値がパラメータとしてスクリプトに渡されます。</p> <p>マシン所有者名をスクリプトに渡すには、{Owner} を挿入します。</p>
VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt	<p>適切にフォーマットされた VirtualMachine.SoftwareN.ScriptPath カスタム プロパティ ステートメントとして gagent コマンドラインに渡される暗号化文字列を vRealize Automation が取得できるようにします。</p> <p>パスワードなどの暗号化文字列をコマンドライン引数のカスタム プロパティとして指定することができます。これにより、ゲスト エージェントによる復号化が可能で、有効なコマンドライン引数として認識される、暗号化された情報を格納できます。たとえば、VirtualMachine.Software0.ScriptPath = c:\dosomething.bat password カスタム プロパティ文字列は、実際のパスワードを含むため、安全ではありません。</p> <p>パスワードを暗号化するには、vRealize Automation カスタム プロパティ (たとえば、MyPassword = password) を作成し、チェック ボックスを選択して暗号化を有効にします。ゲスト エージェントは、[MyPassword] エントリをカスタム プロパティ MyPassword の値に復号化し、このスクリプトを c:\dosomething.bat password として実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ カスタム プロパティ MyPassword = password を作成します。ここで、password は、実際のパスワードの値です。チェック ボックスを選択して暗号化を有効にします。 ■ カスタム プロパティ VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt を VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt = true として設定します。 ■ カスタム プロパティ VirtualMachine.Software0.ScriptPath を VirtualMachine.Software0.ScriptPath = c:\dosomething.bat [MyPassword] として設定します。 <p>VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt を false に設定した場合、または VirtualMachine.ScriptPath.Decrypt カスタム プロパティを作成しない場合、角かっこ ([および]) 内の文字列は復号化されません。</p>
VirtualMachine.SoftwareN.ISOName	<p>データストアのルートに対する ISO ファイルの相対パスおよびファイル名を指定します。形式は /folder_name/subfolder_name/file_name.iso です。値が設定されていない場合、ISO はマウントされません。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
<code>VirtualMachine.SoftwareN.ISOLocation</code>	アプリケーションまたはスクリプトで使用する ISO イメージ ファイルが含まれるストレージ バスを指定します。ホスト予約で表示されるバスの形式に設定します (例: <code>netapp-1:it_nfs_1</code>)。値が設定されていない場合、ISO はマウントされません。
<code>VirtualMachine.Storage.Name</code>	マシンが存在するストレージ バスを識別します。デフォルトは、マシンのプロビジョニングで使用された予約で指定されている値です。
<code>VirtualMachine.Storage.AllocationType</code>	<p>収集したグループを単一データストアに保存します。分散環境では、ラウンドロビン方式でディスクが保存されます。次のいずれかの値を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Collected <p>すべてのディスクをまとめて維持します。</p> ■ Distributed <p>予約で使用可能なデータストアまたはデータストア クラスタにディスクを配置できるようにします。</p> <p>この <code>VirtualMachine.Storage.AllocationType</code> プロパティを使用してデータストア クラスタを作成する方法の例については、ブログ記事の Keeping Multiple Disks Together を参照してください。</p>
<code>VirtualMachine.Storage.Cluster.Automation.Enabled</code>	<p>True に設定すると、マシンでストレージ クラスタの自動化が有効になります。False に設定すると、マシンでストレージ クラスタの自動化が無効になります。ストレージ クラスタの自動化タイプは、<code>VirtualMachine.Storage.Cluster.Automation.Behavior</code> カスタム プロパティによって決まります。</p>
<code>VirtualMachine.Storage.Cluster.Automation.Behavior</code>	<p><code>VirtualMachine.Storage.Cluster.Automation.Enabled</code> が True に設定されている場合の SDRS の動作タイプを指定します。</p> <p>指定可能な動作タイプ値は、<code>automated</code> または <code>manual</code> です。</p> <p><code>VirtualMachine.Storage.Cluster.Automation.Enabled</code> および <code>VirtualMachine.Storage.Cluster.Automation.Behavior</code> プロパティは、マシンがプロビジョニングされた後、およびインベントリ データ収集が終了した後に設定されます。自動化を無効にすると、<code>VirtualMachine.Storage.Cluster.Automation.Behavior</code> はマシンに表示されません。</p>
<code>VirtualMachine.Storage.ReserveMemory</code>	<p>vSwap ストレージ割り当てを管理して可用性を確保し、予約で割り当てを設定する場合は、True に設定します。vSwap 割り当ては、仮想マシンを作成または再構成するときに考慮されます。vSwap 割り当てチェックは、vSphere エンドポイントでのみ使用できます。</p> <p>注： vRealize Automation からマシンを作成またはプロビジョニングするときに <code>VirtualMachine.Storage.ReserveMemory</code> カスタム プロパティを指定しないと、スワップ容量の可用性は確保されません。すでにプロビジョニング済みのマシンにこのプロパティを追加するときに、割り当て済みの予約がいっぱいになっていると、予約での割り当てストレージが実際の割り当てストレージの容量を超過する可能性があります。</p>
<code>VirtualMachine.VDI.Type</code>	<p>仮想デスクトップ インフラストラクチャのタイプを指定します。</p> <p>XenDesktop プロビジョニングの場合は、XenDesktop に設定します。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VMware.AttributeN.Name	vRealize Orchestrator の属性の名前を指定します。たとえば、 <code>VMware.AttributeN.Name</code> プロパティで使用する属性の値が指定されます。文字 <i>N</i> を番号に置き換えます。この番号は 0 から始まり、各属性が設定されるたびに増分されます。
VMware.AttributeN.Value	<code>VMware.AttributeN.Name</code> プロパティで使用する属性の値を指定します。文字 <i>N</i> を番号に置き換えます。この番号は 0 から始まり、各属性が設定されるたびに増分されます。
VMware.Endpoint.Openstack.IdentityProvider.Domain.Name	vRealize Automation が必須の Keystone V3 ドメイン名の認証をサポートできるようにします。Keystone V3 を有効になっている場合は、プロパティを使用して OpenStack エンドポイントに特定のドメインを指定して、Keystone V3 OpenStack ID プロバイダで認証できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 新しいエンドポイントの場合は、カスタム プロパティを追加して特定のドメインを指定します。 ■ アップグレードしたまたは移行したエンドポイントの場合、アップグレード後または移行後にデータ収集が失敗した場合にだけカスタム プロパティを追加します。
VMware.Endpoint.Openstack.IdentityProvider.Version	OpenStack エンドポイントを認証するときに使用する OpenStack ID プロバイダ (Keystone) のバージョンを指定します。Keystone V3 OpenStack ID プロバイダで認証するには、値 3 を構成します。他の値を使用する場合、またはこのカスタム プロパティを使用しない場合、デフォルトの Keystone V2 を使用して認証が行われます。
VMware.Endpoint.Openstack.Release	廃止されました。OpenStack エンドポイントの作成時に、OpenStack リリース (Havana や Icehouse など) を指定します。6.2.1、6.2.2、および 6.2.3 OpenStack プロビジョニングに必要です。

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VMware.Endpoint.NSX.HideDiscoveredSecurityObjects	<p>true に設定すると、セキュリティ オブジェクトが関連付けられている NSX エンドポイントのアクティブなテナントで新たに検出されたセキュリティ オブジェクトを非表示にできます。設定しない場合は、セキュリティ オブジェクトが予約のあるエンドポイントに対するものであるときに、データの収集後にすべての新しいセキュリティ オブジェクトが使用可能になります。セキュリティ オブジェクトを単一のテナントに割り当てたり、すべてのテナントに非表示にしたりする場合に、このオプションを使用して、ユーザーがこれらのオブジェクトにアクセスできないようにすることが可能です。false に設定すると、グローバルに切り替わり、セキュリティ オブジェクトが予約のあるエンドポイントに対するものであるときに、データの収集後にすべての新しいセキュリティ オブジェクトを全テナントに対して使用可能にできます。</p> <p>有効にするには、ファブリック管理者が、関連付けられている NSX エンドポイント (vSphere エンドポイントに関連付けられている) に VMware.Endpoint.NSX.HideDiscoveredSecurityObjects カスタム プロパティを追加します。設定は、次のインベントリ データ収集から適用されます。既存のセキュリティ オブジェクトは変更されません。</p> <p>現在の vRealize Automation リリースへのアップグレード後の既存のセキュリティ オブジェクトなど、データ収集済みのセキュリティ オブジェクトのテナント設定を変更する際は、vRealize Automation REST API または vRealize CloudClient を使用してプログラムでセキュリティ オブジェクトのテナント ID 設定を編集することができます。NSX エンドポイントに対して使用可能なテナント ID 設定は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ "<global>" - セキュリティ オブジェクトはすべてのテナントで使用できます。これは、本リリースにアップグレードした後の既存のセキュリティ オブジェクトと、新規で作成したすべてのセキュリティ オブジェクトの場合のデフォルト設定です。 ■ "<unscoped>" - セキュリティ オブジェクトはすべてのテナントで使用できません。システム管理者のみがセキュリティ オブジェクトにアクセスできます。これは、特定のテナントに最終的に割り当てるセキュリティ オブジェクトを定義する際に最適な設定です。 ■ "tenant_id_name" - セキュリティ オブジェクトは単一の、名前付きのテナントでのみ使用できます。
VMware.Hardware.Version	<p>vSphere 設定で使用する仮想マシン ハードウェア バージョンを指定します。現在サポートされている値は、vmx-04、vmx-07、vmx-08、vmx-09 および vmx-10 です。このプロパティは、仮想マシンの作成フローおよびアップグレードフローに適用され、基本ワークフローのブループリントでのみ使用できます。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VMware.VirtualCenter.OperatingSystem	<p>vCenter Server がマシンの作成時に使用する vCenter Server ゲスト OS のバージョン (VirtualMachineGuestOsIdentifier) を指定します。このオペレーティング システムのバージョンは、プロビジョニングされたマシンにインストールされるオペレーティング システムのバージョンと一致する必要があります。管理者は、いずれかのプロパティ セット (正しい VMware.VirtualCenter.OperatingSystem 値が含まれるように事前定義された VMware[OS_Version]Properties など) を使用してプロパティ グループを作成できます。これは、仮想プロビジョニング用のプロパティです。</p> <p>このプロパティ値が Windows 以外の値の場合、[RDP を使用して接続] ユーザー インターフェイス オプションは無効になります。このプロパティは、仮想ブループリント、クラウド ブループリント、または物理ブループリントで使用できます。</p> <p>関連情報については、vSphere API/SDK ドキュメントにある列挙タイプ VirtualMachineGuestOsIdentifier を参照してください。現在使用できる値のリストについては、vCenter Server のドキュメントを参照してください。</p>
VMware.SCSI.Type	<p>ブループリントの vCloud Air、vCloud Director、または vSphere マシンコンポーネントの場合は、以下の値のいずれかを使用して、SCSI マシン タイプを指定します (大文字と小文字は区別されます)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ buslogic <p>仮想ディスクに BusLogic エミュレーションを使用します。</p> ■ lsilogic <p>仮想ディスクに LSILogic エミュレーションを使用します (デフォルト)。</p> ■ lsilogicsas <p>仮想ディスクに LSILogic SAS 1068 エミュレーションを使用します。</p> ■ pvscsi <p>仮想ディスクに準仮想化エミュレーションを使用します。</p> ■ none <p>このマシンの SCSI コントローラが存在しない場合に使用します。</p> <p>VMware.SCSI.Type プロパティは、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローでは使用できません。ブループリント デザイン キャンバスでマシンコンポーネントを設定するときに、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローを指定する場合は、VMware.SCSI.Type プロパティを使用できません。</p>
VMware.SCSI.Sharing	<p>マシンの VMware SCSI バスの共有モードを指定します。使用可能な値は、VirtualSCSISharing ENUM 値に基づいており、noSharing、physicalSharing、および virtualSharing などが含まれます。</p> <p>ブループリント デザイン キャンバスでマシン コンポーネントを構成するときに、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローを指定する場合は、VMware.SCSI.Sharing プロパティは使用できません。</p> <p>VMware.SCSI.Sharing プロパティは、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローでは使用できません。ブループリント デザイン キャンバスでマシン コンポーネントを設定するときに、CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローを指定する場合は、VMware.SCSI.Sharing プロパティを使用できません。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VMware.Memory.Reservation	仮想マシンの予約メモリの量を MB 単位で定義します (例: 1024)。この値を設定することで、ディスクにある仮想マシンのスワップ ファイルのサイズも、指定された容量分が削減されます。
VMware.Network.Type	<p>ネットワークを指定し、予約で指定したとおりに仮想マシンを接続します。このマシン上のネットワーク アダプタは、固有のネットワークに接続する必要があります。</p> <p>次のアダプタ タイプ値を使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Flexible (デフォルト) ■ VirtualPCNet32 (vSphere と非互換)。 ■ E1000 または VirtualE1000 ■ VMXNET または VirtualVMXNET ■ VMXNET2 ■ VMXNET3 <p>ESX Server ホストに Windows 32 ビット仮想マシンをプロビジョニングして、正しいネットワーク アダプタでマシンが作成されるようにする場合は、E1000 に設定します。このプロパティは、物理プロビジョニングでは使用されません。</p>
VMware.Ovf.Thumbprint	<p>証明書がある HTTPS サーバに OVF が格納されている場合、このプロパティはその証明書のサムプリントの値を格納し、証明書を検証するために使用されます。OVF が HTTP サーバにホストされている場合には、必要ありません。このプロパティは、ブループリント コンポーネントのユーザー インターフェイスで ImportOvfWorkflow プロビジョニング ワークフローを使用して OVF をインポートする場合には自動的に作成されます。ブループリントを vRealize Automation REST API または vRealize CloudClient を使用してプログラムで作成する場合は、このプロパティは手動で作成する必要があります。</p> <p>注： 証明書チェーンのサポートのため、サムプリントはカンマ区切り形式で格納できます。</p> <p>VMware.Ovf.TrustAllCertificates が存在し、true に設定されている場合、VMware.Ovf.Thumbprint プロパティは無視されます。</p>
VMware.Ovf.TrustAllCertificates	このプロパティが存在し、true に設定されている場合、Vmware.Ovf.Thumbprint プロパティは無視されます。また、ImportOvfWorkflow プロビジョニング ワークフローを使用して OVF をインポートするときに証明書の検証は実行されません。
VMware.Ovf.Configuration.X	<p>OVF は、ユーザー設定可能プロパティ (たとえば、OVF からプロビジョニングされた仮想マシンの root パスワードを設定するプロパティ) を持つことができます。ブループリントに OVF をインポートすると、OVF で定義されているすべてのユーザー設定可能なプロパティが解析され、Vmware.Ovf.Configuration.X 形式のカスタム プロパティに変換されます。ここで、X は、OVF のユーザー設定可能なプロパティ名です。</p>
VMware.VCenterOrchestrator.EndpointName	指定したエンドポイント設定をオーバーライドするか、特定のエンドポイントが vRealize Automation IaaS プロビジョニング プロセス時に使用されるように指定します。このプロパティの値は、環境内に存在する外部 VRO などの該当する vRealize Orchestrator エンドポイントに設定できます。

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VMware.VirtualCenter.Folder	<p>仮想マシンを配置するデータセンターのインベントリ フォルダの名前を指定します。デフォルトでは VRM です。VRM は、このプロパティが使用されない場合に、vRealize Automation によってプロビジョニング済みのマシンが配置される vSphere フォルダでもあります。この値は、production\email servers などのように、複数のフォルダが含まれるパスになる場合もあります。フォルダが存在しない場合は、プロキシ エージェントによって、vSphere に指定のフォルダが作成されます。フォルダ名の太文字と小文字は区別されません。このプロパティは、仮想プロビジョニングで使用できます。</p>
VDI.Server.Website	<p>マシンへの接続で使用する Citrix Web インターフェイス サイトのサーバ名を指定します。VDI.Server.Name の値が XenDesktop ファームである場合、このプロパティには適切な値を設定する必要があります。そのようにしないと、マシン所有者は XenDesktop を使用してマシンに接続できません。このプロパティを指定しない場合、VDI.Server.Name プロパティによって、接続先のデスクトップ配信コントローラが決まります。これは、デスクトップ配信コントローラをホストするサーバの名前である必要があります。</p> <p>注： Citrix Web インターフェイス (WI) が StoreFront (SF) に置き換えられている場合、VDI.Server.Name の代わりにこのプロパティを使用して XenDesktop サーバに接続できます。値は VDI.Server.Website=sqa-xddc-7.sqa.local/Citrix/StoreWeb のようになります。詳細については、VDI.Server.Name を参照してください。</p>
VDI.Server.Name	<p>登録するデスクトップ配信コントローラをホストするサーバ名、または登録するデスクトップ配信コントローラが含まれる XenDesktop ファームの名前を指定します。</p> <p>値が XenDesktop ファーム名の場合、VDI.Server.Website プロパティ値は、マシンへの接続で使用する適切な Citrix Web インターフェイス サイトの URL にする必要があります。</p> <p>値がサーバ名で、デスクトップ配信コントローラ サーバを指定せずに少なくとも 1 つの汎用 XenDesktop VDI エージェントがインストールされている場合、この値で目的のサーバが申請されます。値がサーバ名で、特定の DDC サーバの専用 XenDesktop VDI エージェントがインストールされている場合、この値は専用エージェント用に設定されたサーバ名と完全に一致している必要があります。</p> <p>注： StoreFront を IIS のデフォルト ページにする方法の詳細については、Citrix のドキュメントを参照してください。また、VDI.Server.Website も参照してください。</p> <p>注： Citrix Web インターフェイス プロトコルを変更すると、VDI.Server.Name のデフォルト値の認識方法に影響します。</p> <p>VDI.Server.Name プロパティの値は、ユーザーが仮想デスクトップに接続するときに Citrix Web インターフェイスを開くためのデフォルトの接続文字列として使用されます。これは、常に XD サーバの DNS/IP になります。その値で Citrix インターフェイスに接続されない場合、仮想マシンにアクセスできません。ただし、XenDesktop サーバ以外のサーバで Citrix Web インターフェイスがホストされている場合、VDI.Server.Website カスタム プロパティを使用できます。このプロパティが仮想マシンに存在している場合は、VDI.Server.Name の代わりに使用されます。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
VDI.Server.Group	<p>XenDesktop 5 の場合は、<i>group_name;catalog_name</i> の形式で、マシンの追加先となる XenDesktop グループの名前と、グループが属するカタログの名前を指定します。</p> <p>XenDesktop 4 の場合は、マシンの追加先となる XenDesktop グループの名前を指定します。XenDesktop 4 の事前に割り当てられているグループがサポートされています。</p>
VDI.ActiveDirectory.Interval	仮想デスクトップ インフラストラクチャ マシンの Active Directory 登録チェックの任意の間隔値 (期間形式) を指定します。デフォルト値は 00:00:15 (15 秒) です。
VDI.ActiveDirectory.Timeout	Active Directory の登録を再試行するまでの待ち時間のタイムアウト値を指定します (オプション)。デフォルト値は 00:00:15 (30 分) です。
VDI.ActiveDirectory.Delay	Active Directory に正常にマシンを追加してから XenDesktop の登録を開始するまでの任意の遅延時間値 (期間形式) を指定します。デフォルト値は 00:00:05 (5 秒) です。
Vrm.DataCenter.Location	<p>ブループリントを使用して、複数のコンピューティング リソースにマシンをプロビジョニングできるようにします。ブループリントに <i>Vrm.DataCenter.Location</i> プロパティを追加するか、またはブループリントで [申請時の場所を表示] オプションを有効にすると、ユーザーがマシンのプロビジョニングを申請するときにデータセンターの場所を指定するよう求めることができます。</p> <p>注: ブループリントで [申請時の場所を表示] オプションを有効にした場合は、さらにカスタムプロパティを追加する必要はありません。</p> <p>データセンターの場所は、コンピュート リソースに適用される場所の値を提供する <i>DataCenterLocations.xml</i> ファイルを使用して構成します。</p> <p>データセンターの場所の追加に関する関連情報については、vRealize Automation の構成を参照してください。</p> <p><i>Vrm.DataCenter.Location</i> プロパティは <i>DatacenterLocations.xml</i> ファイルの内容にアクセスできないため、<i>DataCenterLocations.xml</i> ファイルで提供される場所に一致するプロパティ値を提供する操作をユーザーに頼る必要があります。</p> <p>このプロパティは、別のカスタム プロパティの外部アクションへの入力としてデータセンターの場所の値を使用する場合に使用します。</p>
Vrm.DataCenter.Policy	<p>プロビジョニングで、特定の場所に関連付けられたコンピュート リソースを使用する必要があるのか、どの場所でも問題ないのかを指定します。この機能を有効にするには、データセンターを場所ファイルに追加する必要があります。各コンピュート リソースを場所に関連付けます。</p> <p>ブループリントで指定した場所に関連付けられたコンピュート リソースで申請されたマシンをプロビジョニングする場合は、Exact (デフォルト) に設定します。予約が申請された場所と一致しない場合、申請は失敗します。プロパティが存在しない場合、デフォルト値 Exact が使用されます。</p> <p>ブループリントで指定した場所に関連付けられた、十分な容量があるコンピュート リソースで申請されたマシンをプロビジョニングする場合は、NonExact に設定します。そのようなコンピュート リソースが使用できない場合は、場所に関係なく、十分な容量がある次に使用可能なコンピュート リソースが使用されます。</p>

表 1-45. カスタム プロパティ V テーブル (続き)

プロパティ	説明
Vrm.ProxyAgent.Uri	vRealize Automation Manager Service 構成ファイルの VMPS エンドポイント アドレスから取得されたデフォルト Vrm.ProxyAgent.Uri 値をオーバーライドできます。構成はローカル マシンに設定されることが多いですが、仮想 IP (VIP) アドレスに設定する場合もあります。 Vrm.ProxyAgent.Uri カスタム プロパティをブループリントで指定できます。次に、サンプル構文を示します。 Vrm.ProxyAgent.Uri =https://loadbalancer-vip/VMPS2Proxy
Vrm.Software.IdNNNN この行は BMC BladeLogic に固有です。	ブループリントからプロビジョニングされたすべてのマシンに適用されるソフトウェア ジョブまたはポリシーを指定します。値を job_type=job_path に設定します。ここで、job_type は BMC BladeLogic ジョブ タイプを表す数字で、job_path は BMC BladeLogic のジョブの場所です。たとえば、4=/Utility/putty のようになります。NNNN は、1000 ~ 1999 の数値です。最初のプロパティは 1000 から始まり、番号順に各追加プロパティの値が 1 つずつ増えていきます。 <div> 1 - AuditJob 2 - BatchJob 3 - ComplianceJob 4 - DeployJob 5 - FileDeployJob 6 - NSHScriptJob 7 - PatchAnalysisJob 8 - SnapshotJob </div>
Vrm.Software.IdNNNN この行は HP Server Automation に固有です。	(オプション) ブループリントからプロビジョニングされたすべてのマシンに適用される HP Server Automation ポリシーを指定します。NNNN は、1000 ~ 1999 の数値です。最初のプロパティは 1000 から始まり、番号順に各追加プロパティの値が 1 つずつ増えていきます。

カスタム プロパティ X

文字 X で始まる vRealize Automation カスタム プロパティのリスト。

表 1-46. カスタム プロパティ X テーブル

プロパティ	説明
Xen.Platform.Viridian	仮想プロビジョニングの場合、XenServer ホストまたはブールで Windows 仮想マシンをプロビジョニングするときには False に設定します。デフォルトは True です。このプロパティは、物理プロビジョニングで使用されません。

プロパティ ディクショナリの使用

プロパティ ディクショナリを使用して、新しいカスタム プロパティ定義とプロパティ グループを定義できます。

プロパティは、特定のデータ タイプと、そのデータ タイプ内での表示制御スタイルをサポートするために定義します。再利用可能なプロパティ グループを作成して、複数のプロパティの追加を簡素化することもできます。

プロパティ定義の使用

vRealize Automation には、多くのカスタム プロパティが用意されています。さらに、新しいプロパティを定義して一意のカスタム プロパティを作成し、マシンのプロビジョニングをより適切に制御することもできます。

プロパティをブループリントまたは予約に追加する場合、プロパティ値を指定するプロンプトを表示するかどうか、およびプロパティ値を暗号化するかどうかを設定できます。

また、プロパティの表示方法を指定できます。たとえば、カスタムの vRealize Orchestrator ワークフローから取得した値をチェックボックスとして表示するか、ドロップダウン メニューとして表示するかを指定できます。

またプロパティを使用して、カスタム ワークフローがどのように機能するかを制御することもできます。vRealize Automation Designer を使用してカスタム ワークフローの定義や操作を行う方法の詳細については、『ライフ サイクルの拡張性』を参照してください。

プロパティ定義の命名に関するベスト プラクティス

指定した vRealize Automation カスタム プロパティと命名が競合しないようにするため、作成したすべてのプロパティ名に、標準的で意味のあるプリフィックスを使用します。すべての新しいプロパティ名で、会社名または機能名などの後ろにドットを付けたプリフィックスを使用します。VMware で予約したプロパティ名にはすべて、ドット (.) が含まれていません。この推奨に従わないプロパティ名は、vRealize Automation カスタム プロパティと競合する場合があります。この場合、vRealize Automation のカスタム プロパティは、作成したプロパティ定義よりも優先されます。

一般的な手順

次の手順は、一般的な新しいプロパティ定義の作成および使用方法です。

- 1 新しいプロパティ定義を作成して、その定義を、真偽値や整数値のコンテンツなど、特定タイプのコンテンツで使用できるデータ タイプに関連付けます。my_grouping_prefix.my_property_name などの新しいプロパティ名には標準命名規則を使用します。
- 2 プロパティ定義を、チェック ボックスやドロップダウン メニューなどの表示タイプに関連付けます。使用可能な表示タイプは、選択したデータ タイプに基づいて生成されます。
- 3 プロパティをブループリントに個別に追加するか、プロパティ グループの一部として追加します。

プロパティをブループリントに追加して、プロパティ値が暗号化される必要があるかどうかを指定します。

プロパティをブループリントに追加して、プロパティ値を指定するプロンプトをユーザーに表示する必要があるかどうかを指定します。
- 4 マシン申請者として、プロンプトに対して必要な値を指定します。

vRealize Orchestrator のスクリプト アクションの使用

vRealize Orchestrator のスクリプト アクションを使用してプロパティ値をドロップダウン メニューに設定することができます。vRealize Orchestrator のスクリプト アクションを使用すると、別のプロパティに指定された値に基づいてドロップダウン メニューの値を設定することもできます。

`vra content list --type property-definition` vRealize CloudClient コマンドを使用すると、現在の vRealize Automation テナントのすべてのプロパティ定義を一覧表示できます。また、`vra content list --type property-group` vRealize CloudClient コマンドを使用すると、すべてのプロパティ グループを一覧表示できます。

ユーザーが使用できるオプションをフィルタするための動的プロパティ定義の作成に関するチュートリアルについては、ブログ記事の [How to use dynamic property definitions](#) を参照してください。

制限事項

Data type が String、Display as が Dropdown のプロパティ定義を作成し、ドロップダウン リストに設定されるプロパティを返す vRealize Orchestrator アクションを使用した場合、リストの値の順序はランダムになります。順序を指定することはできません。

カスタム プロパティ定義の作成とテスト

カスタム プロパティが vRealize Automation にどのように表示されるかを決定するカスタム プロパティ定義を作成します。カスタム プロパティによってチェック ボックス、ドロップダウン メニュー、またはその他のコントロール タイプが想定どおりに表示されることを確認できるように、カスタム プロパティをブループリントに追加することができます。

カスタム プロパティ定義を作成してテストするには、自分自身または、自分がアクセスできるテスト ユーザーのアカウントに対してすでに資格が付与されているブループリントが必要です。このテスト用ブループリントを使用すると、カスタム プロパティを作成してブループリントに追加したうえで、カスタム プロパティが想定どおりに表示されることを確認することができます。カスタム プロパティの検証後、必要に応じて本番環境のブループリントに追加できます。

前提条件

- アクションの追加先となるブループリントが存在することを確認します。『vRealize Automation の構成』を参照してください。
- ブループリント内のカスタム プロパティをテストできるように、ブループリントが自分に対して資格付与されていることを確認します。『vRealize Automation の構成』を参照してください。
- テナント管理者またはファブリック管理者として vRealize Automation にログインします。

手順

1 カスタム プロパティ定義の作成

カスタム プロパティが vRealize Automation にどのように表示されるかを決定するカスタム プロパティ定義を作成します。本番環境のブループリントに追加する前に、カスタム プロパティをテスト用のブループリントで検証できます。

2 ブループリントへのカスタム プロパティの追加

カスタム プロパティは、vRealize Automation の多くの部分、たとえば、承認ポリシー、ビジネス グループ、エンドポイント、予約ポリシーなどに追加できます。ただし、プロパティ定義として構成する表示オプションがサポートされるのは、マシン ブループリントのみです。カスタム プロパティをブループリントに追加すると、プロパティ定義で設計されたようにそのカスタム プロパティがユーザー インターフェイスに表示されることを簡単に確認できます。

3 カタログ申請フォームのカスタム プロパティの確認

vRealize Orchestrator アクションを実行するカスタム プロパティ定義の作成者として、カスタム プロパティをテストし、正しい値が申請フォームに表示されることを確認します。

カスタム プロパティ定義の作成

カスタム プロパティが vRealize Automation にどのように表示されるかを決定するカスタム プロパティ定義を作成します。本番環境のブループリントに追加する前に、カスタム プロパティをテスト用のブループリントで検証できます。

■ プロパティ定義の作成

プロパティ定義を作成して、vRealize Automation のカスタマイズ レベルを追加することができます。プロパティ定義の作成時には、プロパティのデータ タイプ（文字列、ブール値タイプなど）を指定します。

■ 正規表現の検証を行うカスタム プロパティの作成

サービス カタログのユーザーにカタログ申請フォームで検証済みデータの提供を求める場合は、正規表現を評価するカスタム プロパティ定義を作成します。

■ vRealize Orchestrator アクションのカスタム プロパティ定義の作成

vRealize Orchestrator アクションを含むカスタム プロパティ定義を作成すると、ブループリントにカスタム プロパティを追加できるようになります。このアクションは、サービス カタログ ユーザーが申請フォームでカスタム プロパティを構成しているときに実行されます。このアクションにより、フォームに表示されているデータが取得されます。

■ カスタム プロパティのバインドによる親子関係の作成

カスタム プロパティ間に親子関係を作成するには、親のプロパティを子のプロパティにバインドします。親と子の各カスタム プロパティをブループリントに追加する際、要求側ユーザーは親プロパティの値を選択します。選択された値によって子プロパティのとり得る値が決まります。

プロパティ定義の作成

プロパティ定義を作成して、vRealize Automation のカスタマイズ レベルを追加することができます。プロパティ定義の作成時には、プロパティのデータ タイプ（文字列、ブール値タイプなど）を指定します。

指定した vRealize Automation のカスタム プロパティが競合することを回避するために、*my_prefix.my_property_name1* という命名形式を使用します。たとえば、会社名など、標準的なプリフィックスを使用し、ドット (.) の後に短くてわかりやすい名前を付けます。

この推奨に従わないプロパティを作成すると、vRealize Automation 指定のカスタム プロパティと競合する場合があります。この場合、vRealize Automation のカスタム プロパティは、作成したプロパティよりも優先されます。

前提条件

テナント管理者またはファブリック管理者として vRealize Automation にログインします。

手順

- 1 [管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [プロパティ定義] の順に選択します。
- 2 [新規] (+) をクリックします。

- 3 [名前] テキスト ボックスに新規プロパティ定義名を入力します。

`my_grouping_prefix.my_property_name` などの新しいプロパティ名には標準命名規則を使用します。

[名前] の値はプロパティの識別子 (ID) として内部的に保存されます。

- 4 [ラベル] テキスト ボックスの生成された値を受け入れます。

[ラベル] の値には、[名前] テキスト ボックスに入力した値が自動的に設定されます。[ラベル] の値を最初に入力すると、[名前] テキスト ボックスに同一の値が入力されます。

[ラベル] の値は、ブループリントにプロパティを追加するときなど、プロパティを要求するときにプロパティの名前としてユーザー インターフェイスに表示されます。

[ラベル] の値には、[名前] の値よりも広範囲の文字を含めることができます。

- 5 [可視性] セクションでは、[すべてのテナント] または [このテナント] を選択してプロパティを使用できる場所を判断します。

テナント管理者の権限のみでログインする場合、[このテナント] のみを使用できます。ファブリック管理者の権限のみでログインする場合、[すべてのテナント] のみを使用できます。

アイテム作成後に、[すべてのテナント] または [このテナント] の設定を変更することはできません。

- 6 (オプション) [説明] テキスト ボックスにプロパティの説明を入力します。

プロパティ定義の目的や、プロパティに関して役立つ情報を説明します。

- 7 (オプション) [表示順序] テキスト ボックスに値を入力します。

入力する番号が、プロパティ名を申請フォームに表示する方法を制御します。次の順序付けルールが適用されます。

- 表示順序は、[プロンプト表示] または [申請フォームに表示] の設定で設定されているプロパティにのみ適用されます。
- 表示順序があるすべてのプロパティが先に表示され、表示順序がないプロパティがその後に表示されます。
- 表示順序があるプロパティは、表示順序の値に従ってソートされます (最小値から最大値の順)。負の数値は使用できません。
- すべてのプロパティがアルファベット順に並べられます。ただし、表示順序があるすべてのプロパティが先に表示され、表示順序がないプロパティはその後に表示されます。
- 2 つのプロパティの表示順序の値が同じ場合は、アルファベット順にソートされます。

- 8 [データ タイプ] ドロップダウン メニューからプロパティ定義のデータ タイプを選択します。

表 1-47. データ タイプ

データ タイプ	表示方法
[真偽値]	真偽値を許可します。 表示方法のオプションは、[チェックボックス] と [はい/いいえ] です。
[日時]	日時の表示形式で入力された値を許可します。 表示方法のオプションは、[日時ピッカー] です。

表 1-47. データ タイプ （続き）

データ タイプ	表示方法
[10 進数]	整数または 10 進数値を許可します。 表示方法のオプションは、[ドロップダウン]、[スライダ]、および [テキストボックス] です。
[整数]	整数値を許可します。 表示方法のオプションは、[ドロップダウン]、[スライダ]、および [テキストボックス] です。
[セキュリティで保護された文字列]	パスワードなどの、セキュリティで保護された内容または暗号化された内容を許可します。 表示方法のオプションは、確認が必要なパスワードか [テキストボックス] です。
[文字列]	文字列値を許可します。 表示方法のオプションは、[ドロップダウン]、[電子メール]、[ハイパーリンク]、[テキスト領域]、および [テキストボックス] です。

- 9 [必須] オプションが使用可能な場合、ドロップダウン メニューから [はい] または [いいえ] を選択し、このプロパティに値を入力する必要があるかどうかを指定します。
- 10 [表示方法] ドロップダウン メニューから、このプロパティの表示コントロール タイプを選択します。利用可能なオプションが、[データ タイプ] の選択に基づいて表示されます。

表 1-48. 表示方法

表示方法	説明
[チェックボックス]	1 つのチェック ボックス コントロールを提供します。
[日時ピッカー]	YYYY-MM-DD または MM/DD/YYYY 形式の日付と時間コントロール、および HH:MM 形式の時間コントロール（24 時制で表示するか AM または PM を付加）を提供します。
[ドロップダウン]	ドロップダウン メニュー コントロールを提供します。
[電子メール]	電子メール コントロールを提供します。
[ハイパーリンク]	リンク テキストとしてプロパティ表示名、URL としてプロパティ値が設定されたリンクを表示します。
[スライダ]	値の幅をスライダで制御します。
[テキスト領域]	情報を入力または表示するテキスト エリアを提供します。
[テキストボックス]	値を入力するテキスト ボックスを提供します。
[はい/いいえ]	[はい] または [いいえ] の値を指定します。

- 11 データ タイプに基づき、必要に応じてユーザー インターフェイスの指示に沿って追加の選択を行います。以下にサンプル ページを示します。

The screenshot shows the 'Create Property Definition' window. The left sidebar lists various management categories, with 'Property Dictionary' expanded. The main area contains the following fields:

- Name:** test-runx
- Label:** MyCon@test.runx
- Visibility:** ☒ This tenant
- Description:** (empty text area)
- Display order:** (empty dropdown)
- Data type:** integer
- Required:** No
- Minimum value:** (empty)
- Maximum value:** (empty)
- Increment:** 1

Buttons for 'OK' and 'CANCEL' are at the bottom.

- 12 [OK] をクリックします。

結果

プロパティが作成され、[プロパティ定義] ページで利用可能になります。

The screenshot shows the 'Property Definitions' page. It includes a table with the following data:

Name	Label	Description	Type	Display advice	Visibility
test-runx	MyCon@test.runx		integer	Textbox	This tenant

正規表現の検証を行うカスタム プロパティの作成

サービス カatalogのユーザーにカatalog申請フォームで検証済みデータの提供を求める場合は、正規表現を評価するカスタム プロパティ定義を作成します。

たとえば、特殊文字を含めない 5 ～ 10 文字のアプリケーション名または関数名を要求側ユーザーが入力する英数字テキスト ボックスを追加する場合を考えます。このシナリオでは `^[a-zA-Z0-9]{5,10}$` のような形に設定された、正規表現によるカスタム プロパティを使用します。

前提条件

- 指定された値が想定どおりであるかを検証する正規表現となるようにします。
- テナント管理者またはファブリック管理者として vRealize Automation にログインします。

手順

- 1 [管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [プロパティ定義] の順に選択します。
- 2 [新規] アイコン (+) をクリックします。

3 オプションを入力します。

オプション	説明
名前	新しいプロパティ名として、 my_grouping_prefix.my_property_name のような標準の命名規則を使用した値を入力します。
ラベル	ラベルは名前に基づいて設定されます。ラベルを変更して、わかりやすい名前にすることができます。
可視性	アクションのカスタム プロパティは、現在のテナントでのみ使用できます。別のテナントでできるようにするには、そのテナントにログインして設定する必要があります。
説明	プロパティ定義の目的や、プロパティに関して役立つ情報を説明します。
表示順序	<p>入力する番号が、プロパティ名を申請フォームに表示する方法を制御します。次の順序付けルールが適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 表示順序は、[プロンプト表示] または [申請フォームに表示] の設定で設定されているプロパティにのみ適用されます。 ■ 表示順序があるすべてのプロパティが先に表示され、順序インデックスのないプロパティがその後に表示されます。 ■ 表示順序があるプロパティは、順序インデックス値が最低のものから最高のものへと順にソートされます。負の値を使用することができます。 ■ すべてのプロパティがアルファベット順に並べられます。ただし、表示順序があるすべてのプロパティが表示順序のないプロパティよりも前に表示されます。 ■ 2 つのプロパティの表示順序の値が同じ場合は、アルファベット順にソートされます。
データ タイプ	ドロップダウン メニューで [文字列] を選択します。
必須	ドロップダウン メニューで [いいえ] を選択します。
表示方法	ドロップダウン メニューで [テキストボックス] を選択します。
有効なユーザー入力	正規表現を入力します。

4 正規表現が動作することを確認するには、テスト用テキスト ボックスに値を入力します。

5 [OK] をクリックします。

結果

カスタム プロパティ定義がリストに追加され、ブループリントに追加できるようになります。

次のステップ

カスタム プロパティをマシン ブループリントに追加します。[ブループリントのマシン コンポーネントで \[プロパティ\] タブを使用してカスタム プロパティまたはプロパティ グループを追加する](#)を参照してください。


vRealize Orchestrator アクションのカスタム プロパティ定義の作成

vRealize Orchestrator アクションを含むカスタム プロパティ定義を作成すると、ブループリントにカスタム プロパティを追加できるようになります。このアクションは、サービス カタログ ユーザーが申請フォームでカスタム プロパティを構成しているときに実行されます。このアクションにより、フォームに表示されているデータが取得されます。

前提条件

- 作成するカスタム プロパティの構成の詳細を確認します。 [vRealize Orchestrator アクションのカスタム プロパティ定義の詳細構成](#)を参照してください。
- テナント管理者またはファブリック管理者として vRealize Automation にログインします。

手順

- 1 [管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [プロパティ定義] の順に選択します。
- 2 [新規] アイコン () をクリックします。
- 3 オプションを入力します。

オプション	説明
名前	構成の詳細を確認します。カスタム プロパティによっては、特定の名前またはフォーマットが必要な場合があります。可能な場合は、新しいプロパティ名に対して、標準の命名規則を使用します (<code>my_grouping_prefix.my_property_name</code> など)。
ラベル	ラベルは名前に基づいて設定されます。ラベルを変更して、わかりやすい名前にすることができます。
可視性	アクションのカスタム プロパティは、現在のテナントでのみ使用できます。別のテナントでできるようにするには、そのテナントにログインして設定する必要があります。
説明	プロパティ定義の目的や、プロパティに関して役立つ情報を説明します。
表示順序	<p>入力した番号によって、申請フォームのどこにプロパティ名が表示されるかが制御されます。次の順序付けルールが適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 表示順序は、[プロンプト表示] または [申請フォームに表示] の設定で設定されているプロパティにのみ適用されます。 ■ 表示順序があるすべてのプロパティが先に表示され、順序インデックスのないプロパティがその後に表示されます。 ■ 表示順序があるプロパティは、表示順序の値に従ってソートされます (最小値から最大値の順)。負の値を使用することができます。 ■ すべてのプロパティがアルファベット順に並べられます。ただし、表示順序があるすべてのプロパティが先に表示され、表示順序がないプロパティはその後に表示されます。 ■ 2 つのプロパティの表示順序の値が同じ場合は、アルファベット順にソートされます。

- 4 構成の詳細を確認し、値に何を指定する必要があるのかを判断します。

構成の詳細には、次の値が含まれています。

- データ タイプ
- 表示方法
- 値
- Action フォルダ
- スクリプト アクション
- 入力パラメータ

- 5 [OK] をクリックします。

結果

カスタム プロパティ定義がリストに追加され、ブループリントに追加できるようになります。

次のステップ

ブループリントにカスタム プロパティを追加します。カスタム プロパティをマシン プロパティとネットワーク プロパティのいずれとして追加するかは、そのプロパティによって決まります。[ブループリントへのカスタム プロパティの追加](#)を参照してください。

カスタム プロパティのバインドによる親子関係の作成

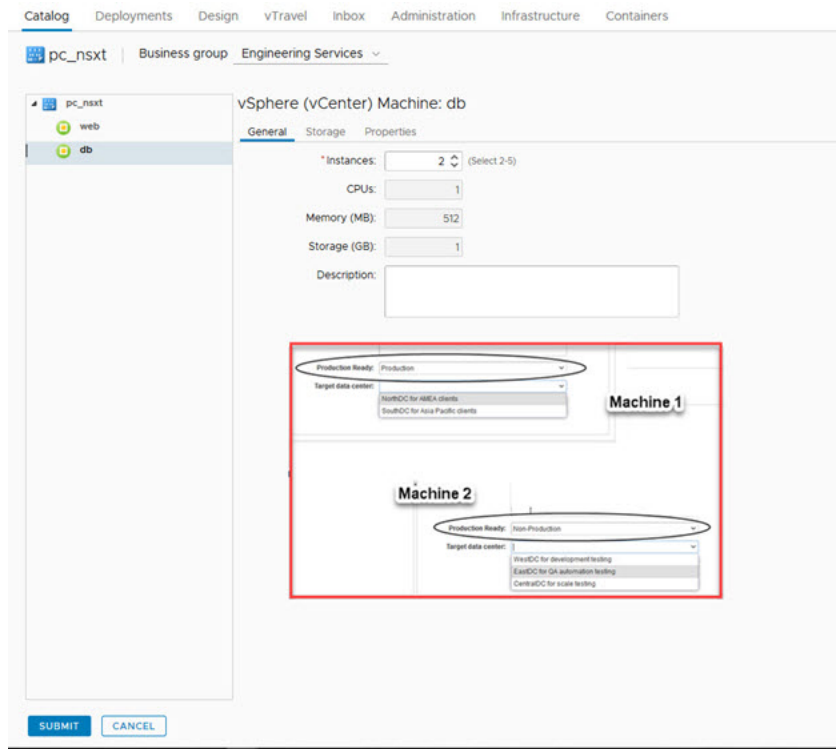
カスタム プロパティ間に親子関係を作成するには、親のプロパティを子のプロパティにバインドします。親と子の各カスタム プロパティをブループリントに追加する際、要求側ユーザーは親プロパティの値を選択します。選択された値によって子プロパティのとり得る値が決まります。

- 親カスタム プロパティの定義は、固定リストにすることも、vRealize Orchestrator アクションによって決まる外部値にすることもできます。このプロパティ定義では、子プロパティ定義に対して設定可能な入力パラメータを指定します。
- 子カスタム プロパティ定義は、vRealize Orchestrator アクションを呼び出す必要があります。子カスタム プロパティでは、入力パラメータ値を指定できるように親カスタム プロパティをバインドします。

たとえば、開発チームが本番環境と非本番環境の各システムで作業を行っているとしします。また、5 つのデータセンターがあります。3 つのデータセンターは開発テスト用のデータセンターであり、残り 2 つでは組織内クライアントにサービスを提供しています。テスト用データセンターと組織内クライアント用のデータセンターのどちらの環境にも同じブループリントを開発者が展開できるように、2 つのカスタム プロパティ定義を作成してバインドを行います。要求側ユーザーは、最初のカスタム プロパティを使用して、本番環境または非本番環境のどちらかを選択できます。申請フォームでユーザーが選択した環境に基づき、2 つ目のカスタム プロパティには下記の値のいずれかが表示されます。

- 非本番環境の 3 つのテスト用データセンターのリスト。
- 本番環境の 2 つの組織内クライアント用データセンター。

次の画面はマシン 1 (db) のカタログ要求ページを示し、スニペットのセクションはマシン 1 (db) からマシン 2 (db) のプロパティにバインドするプロパティを示しています。



この手順の目的は、親子関係でバインドする 2 つのカスタム プロパティを作成することです。バインドにより、選択されている本番環境の状態に基づいて適切な場所を選択できます。

前提条件

- この例では、場所の情報としてデータセンター名を指定する vRealize Orchestrator アクションを作成します。このアクションに `datacenters_prod` という名前をつけ、`prod` という入力パラメータを文字列タイプとして追加して、このサンプル スクリプトをアクション スクリプトに使用します。

```
if(prod == null) {
    return ['Empty1', 'Empty2'];
} else if (prod.equals('nonprod')) {
    return ['WestDC for development testing', 'EastDC for QA automation testing', 'CentralDC for scale testing'];
} else {
    return ['NorthDC for AMEA clients', 'SouthDC for Asia Pacific clients'];
}
```

ワークフローの開発、および vRealize Orchestrator スクリプト アクションの作成と使用については、[vRealize Orchestrator 製品ドキュメント](#)の「VMware vRealize Orchestrator を使用した開発」を参照してください。

- テナント管理者またはファブリック管理者として vRealize Automation にログインします。

手順

1 ユーザーが本番環境または非本番環境を選択できるように、カスタム プロパティ定義を作成します。

- a [管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [プロパティ定義] の順に選択します。
- b production.ready カスタム プロパティを設定します。

The screenshot shows the 'Create Property Definition' form in the vRealize Automation console. The form is for creating a custom property named 'production.ready'. The label is 'Environment'. The display type is 'Dropdown'. The values are set to a static list with two entries: 'Production' (prod) and 'Non-Production' (nonprod). The visibility is set to 'This tenant'. The display order is 1. The data type is 'String' and it is not required.

オプション	値の例
名前	production.ready
ラベル	Environment
説明	Select the production or non-production environment.
表示順序	1 ブループリントでこのカスタム プロパティが最初に表示されるように 1 を選択します。
データ タイプ	文字列
表示方法	ドロップダウン
値	固定リスト
固定リスト値	以下のキーペアのペアを追加します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Production と prod ■ Non-Production と nonprod

- c [OK] をクリックします。

production.ready カスタム プロパティの設定が行われ、使用可能な状態になります。

2 カスタム場所アクションを実行する vRealize Orchestrator アクション カスタム プロパティ定義を作成します。

- [管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [プロパティ定義] の順に選択します。
- datacenter.target カスタム プロパティを設定します。

The screenshot shows the 'Create Property Definition' window in vRealize Orchestrator. The left sidebar lists various management options, with 'Property Dictionary' expanded. The main area contains the following fields and options:

- Name:** datacenter.target (Note: To avoid conflict with vRealize Automation properties, use a prefix such as a company or feature name followed by a dot for all custom property names.)
- Label:** Target datacenter
- Description:** Select the datacenter based on whether you are deploying a production or non-production blueprint.
- Display order:** 2 (Note: You can control the order in which custom properties display on request forms. Set an order index of 1 to display this property at the top of the list.)
- Data type:** String
- Required:** No
- Visibility:** ☒ This tenant
- Display as:** Dropdown
- Values:** ☒ External values
- Enable custom value entry:** ☐
- Script action:** com.vmware.library... (CHANGE... button)
- Input parameters:**

Name	Bind	Value
prod	Yes	production.ready

オプション	値の例
名前	datacenter.target
ラベル	Target data center
説明	Select the datacenter based on whether you are deploying a production or non-production blueprint.
表示順序	2 ブループリントでこのカスタム プロパティが production.ready カスタム プロパティの後にリストされるように 2 を選択します。
データ タイプ	文字列
表示方法	ドロップダウン
値	外部値
スクリプト アクション	[選択] をクリックして datacenters_prod アクションを特定します。

入力パラメータ テーブルには、prod パラメータが含まれています。

- 入力パラメータ テーブルで、prod の行を選択し、[編集] をクリックします。
- [バインド] チェック ボックスをオンにします。
- ドロップダウン メニューで [production.ready] を選択します。

f [OK] をクリックします。

g [OK] をクリックします。

`datacenter.target` カスタム プロパティの設定が行われ、使用可能な状態になります。

次のステップ

- 2 つのプロパティ定義間の関係により、2 つのプロパティ定義をプロパティ グループに追加します。[プロパティ グループの作成](#)を参照してください。
- `production-datacenter` プロパティ グループをブループリントに追加します。[ブループリントのマシン コンポーネント](#)で [\[プロパティ\] タブ](#)を使用してカスタム プロパティまたはプロパティ グループを追加するを参照してください。

ブループリントへのカスタム プロパティの追加

カスタム プロパティは、vRealize Automation の多くの部分、たとえば、承認ポリシー、ビジネス グループ、エンドポイント、予約ポリシーなどに追加できます。ただし、プロパティ定義として構成する表示オプションがサポートされるのは、マシン ブループリントのみです。カスタム プロパティをブループリントに追加すると、プロパティ定義で設計されたようにそのカスタム プロパティがユーザー インターフェイスに表示されることを簡単に確認できます。

カスタム プロパティは、[\[プロパティ\] タブ](#)の仮想マシン ブループリントに関連付けられているものもあれば、[\[ネットワーク\] タブ](#)の仮想マシン ブループリントに関連付けられているものもあります。

- [ブループリントのマシン コンポーネント](#)で [\[プロパティ\] タブ](#)を使用してカスタム プロパティまたはプロパティ グループを追加する

カスタム プロパティをマシン カスタム プロパティとして追加すると、サービス カタログ ユーザーは、アイテムを申請するときに、値を選択または構成できるようになります。プロパティは、個々に追加することも、グループとして追加することもできます。

- [ブループリントのマシン コンポーネント](#)で [\[ネットワーク\] タブ](#)を使用してカスタム プロパティを追加する

カスタム プロパティをネットワーク カスタム プロパティとして追加すると、サービス カタログ ユーザーは、ブループリントを展開するときに、必要なネットワーク プロファイルの値を選択できるようになります。

ブループリントのマシン コンポーネントで [\[プロパティ\] タブ](#)を使用してカスタム プロパティまたはプロパティ グループを追加する

カスタム プロパティをマシン カスタム プロパティとして追加すると、サービス カタログ ユーザーは、アイテムを申請するときに、値を選択または構成できるようになります。プロパティは、個々に追加することも、グループとして追加することもできます。

このワークフローでは、カスタム プロパティを追加し、そのカスタム プロパティがブループリントで正常に機能することを確認します。カスタム プロパティは、ビジネス グループや承認ポリシーなどのコンポーネントにも追加できます。

前提条件

- 必要なプロパティ定義が作成されていることを確認します。[カスタム プロパティ定義の作成](#)を参照してください。

- プロパティ グループを追加する場合は、関連するプロパティ定義がプロパティ グループに追加されていることを確認します。[プロパティ グループの作成](#)を参照してください。プロパティ定義の表示機能をテストするには、プロパティをグループに追加するときに [申請に表示] を選択する必要があります。
- vRealize Orchestrator アクションをカスタム プロパティとして追加する場合は、構成の詳細を調べて、そのカスタム プロパティが正しい場所に追加されたことを確認します。[vRealize Orchestrator アクションのカスタム プロパティ定義の詳細構成](#)を参照してください。
- カスタム プロパティの追加先のブループリントが作成されていることを確認します。『vRealize Automation の構成』を参照してください。
- インフラストラクチャ アーキテクトとして vRealize Automation にログインします。

手順

- 1 [設計] - [ブループリント] を選択します。
- 2 カスタム プロパティの追加先のブループリントを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 ターゲットのマシンのコンポーネントをクリックします。
仮想マシンの構成オプションがキャンバスに表示されます。
- 4 [プロパティ] タブをクリックした後、[カスタム プロパティ] タブまたは [プロパティ グループ] タブをクリックします。
 - カスタム プロパティを追加するには、[新規] をクリックし、ドロップダウン メニューでプロパティ定義を選択します。

オプション	説明
Name	選択したカスタム プロパティ定義の名前。
値	(オプション) デフォルト値を入力します。
暗号化済み	vRealize Orchestrator アクションを実行するカスタム プロパティを追加するときは、値を暗号化しないでください。
オーバーライド可能	このオプションを選択すると、申請中のユーザーが申請フォームの値を選択できます。
申請に表示	このオプションを選択すると、申請中のユーザーがプロパティを確認して、申請フォームの値を選択できます。

- プロパティ グループを追加するには、[追加] をクリックしてグループを選択します。
- 5 [OK] をクリックします。
カスタム プロパティがブループリントに追加されます。
 - 6 [完了] をクリックします。
 - 7 完成したブループリントを公開します。

結果

ブループリントには、カスタム プロパティが含まれます。

次のステップ

申請フォームのカスタム プロパティをテストします。[カタログ申請フォームのカスタム プロパティの確認](#)を参照してください。

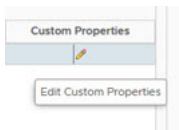
ブループリントのマシン コンポーネントで [ネットワーク] タブを使用してカスタム プロパティを追加する
カスタム プロパティをネットワーク カスタム プロパティとして追加すると、サービス カatalog ユーザーは、ブループリントを展開するときに、必要なネットワーク プロファイルの値を選択できるようになります。

前提条件

- 必要なカスタム プロパティ定義があることを確認します。[vRealize Orchestrator アクションのカスタム プロパティ定義の作成](#)を参照してください。
- vRealize Orchestrator アクションをカスタム プロパティとして追加する場合は、構成の詳細を調べて、そのカスタム プロパティが正しい場所に追加されたことを確認します。[vRealize Orchestrator アクションのカスタム プロパティ定義の詳細構成](#)を参照してください。
- カスタム プロパティの追加先のブループリントが作成されていることを確認します。『vRealize Automation の構成』を参照してください。
- インフラストラクチャ アーキテクトとして vRealize Automation にログインします。

手順

- 1 [設計] - [ブループリント] を選択します。
- 2 編集するブループリントを選択します。
デザイン キャンバスでブループリントが開きます。
- 3 デザイン キャンバスで、編集する仮想マシン コンポーネントをクリックします。
仮想マシンの構成オプションがキャンバスに表示されます。
- 4 マシン コンポーネントの [ネットワーク] タブをクリックします。
- 5 [新規] をクリックして新しいネットワーク行を追加します。
- 6 新しい行で、ネットワークおよび割り当てタイプ (固定 IP アドレスまたは DHCP) を選択し、固定 IP アドレスを使用する場合はアドレスを指定して、[OK] をクリックします。
- 7 新しい行の [カスタム プロパティ] 列で [編集] アイコンをクリックして、カスタム プロパティを割り当てます。



- 8 [新規] をクリックし、カスタム プロパティを選択して、次の表で説明するオプションを設定して、[OK] をクリックします。

オプション	説明
Name	ドロップダウン メニューから既存のカスタム プロパティ名を選択します。
値	(オプション) デフォルト値を入力します。

オプション	説明
暗号化済み	vRealize Orchestrator アクションを実行するカスタム プロパティを追加するときは、値を暗号化しないでください。
オーバーライド可能	このオプションを選択すると、申請中のユーザーが申請フォームの値を選択できます。
申請に表示	このオプションを選択すると、申請中のユーザーがプロパティを確認して、申請フォームの値を選択できます。

ネットワークが、その設定済みのカスタム プロパティと共にブループリントに追加されます。

9 [完了] をクリックします。

10 完成したブループリントを公開します。

結果

ブループリントには、カスタム プロパティが含まれます。

次のステップ

申請フォームのカスタム プロパティをテストします。[カタログ申請フォームのカスタム プロパティの確認](#)を参照してください。

カタログ申請フォームのカスタム プロパティの確認

vRealize Orchestrator アクションを実行するカスタム プロパティ定義の作成者として、カスタム プロパティをテストし、正しい値が申請フォームに表示されることを確認します。

前提条件

- カスタム プロパティをブループリントの適切な場所に追加します。[ブループリントへのカスタム プロパティの追加](#)を参照してください。
- ブループリント内のカスタム プロパティをテストできるように、ブループリントが自分に対して資格付与されていることを確認します。『vRealize Automation の構成』を参照してください。
- テスト ブループリントにアクセスできるユーザーとして vRealize Automation にログインします。

手順

1 [カタログ] をクリックして、使用する資格が付与されているカタログ アイテムを表示します。

公開されたブループリントがカタログ アイテムとしてカタログ ページに表示されます。

2 カatalog アイテムの [申請] をクリックします。

3 申請フォームで、カスタム プロパティを追加したマシンをクリックします。

4 マシンの [プロパティ] タブで、カスタム プロパティを選択し、ドロップダウン矢印をクリックします。

vRealize Orchestrator アクションが実行され、表示するように構成されている値が取得されます。予期される値が表示されることを確認します。

次のステップ

必要に応じてカスタム プロパティを本番のブループリントに追加します。

vRealize Orchestrator アクションのカスタム プロパティ定義の詳細構成

外部ファイルまたは vRealize Automation 構成情報からキーと値のペアを取得するには、vRealize Orchestrator アクションを実行するカスタム プロパティ定義を作成します。カスタム プロパティがカタログ申請フォームに表示されるように、カスタム プロパティをブループリントに追加します。

アイテムを申請するサービス カatalog ユーザーは、展開に含める値を選択できます。ユーザーがドロップダウン メニューをクリックして値を選択すると、vRealize Orchestrator アクションが実行され、ユーザーが選択したメニューに表示されるデータが取得されます。

各 vRealize Orchestrator アクションのプロパティ定義の構成ワークフローは似ていますが、詳細の一部が異なります。たとえば、前提条件および制限に違いがあり、カスタム プロパティをブループリントに適用した場合、異なる可能性があります。

■ ネットワークのカスタム プロパティ定義

申請フォームでネットワークをユーザーに選択させる場合、vRealize Automation データベースからネットワーク名を取得するカスタム プロパティを追加します。ネットワーク セレクタのカスタム プロパティは、vRealize Orchestrator アクションを使用して値を取得します。

■ 予約ポリシーのカスタム プロパティ定義

申請ユーザーにより申請フォームで予約ポリシー名が選択された場合、申請ユーザーに適用できる予約ポリシー名を取得するカスタム プロパティ定義を追加します。予約ポリシー セレクタのカスタム プロパティ定義は、vRealize Orchestrator アクションを使用して値を取得します。

■ PowerShell スクリプトのカスタム プロパティ定義

スクリプトを使用してデータを取得し、申請フォームのカスタム プロパティに取り込む場合、PowerShell スクリプトを実行するカスタム プロパティを追加します。PowerShell スクリプトのカスタム プロパティは vRealize Orchestrator アクションを使用してスクリプトを実行し、値を取得します。

■ データベース クエリのカスタム プロパティ定義

データベースから値を取得して申請フォームのカスタム プロパティに取り込む場合、そのデータベースを照会するカスタム プロパティを追加します。データベース カスタム プロパティは vRealize Orchestrator アクションを使用してクエリを実行し、値を取得します。

■ カスタム アクションのカスタム プロパティ定義

取得した値を申請フォームでユーザーに選択させる場合、vRealize Orchestrator のカスタム アクションを使用してソースからデータを取得するカスタム プロパティを追加します。

ネットワークのカスタム プロパティ定義

申請フォームでネットワークをユーザーに選択させる場合、vRealize Automation データベースからネットワーク名を取得するカスタム プロパティを追加します。ネットワーク セレクタのカスタム プロパティは、vRealize Orchestrator アクションを使用して値を取得します。

制限事項

ネットワーク セレクタのカスタム プロパティを使用する場合は次の制限を考慮します。

- カスタム プロパティの名前は `VirtualMachine.Network0.Name` にする必要があります。この名前は必須です。ネットワーク セレクタ用の複数のプロパティ定義を作成することはできません。

- このアクションは、ターゲット vCenter Server インスタンスにネットワーク名が適用されるかどうかを検証せずに、申請ユーザーのすべてのネットワーク名を取得します。サービス カタログ ユーザーは、選択したターゲットに適用できないネットワークを選択する場合があります。誤ったネットワークが選択された場合、カタログ申請は失敗します。
- このアクションは、申請ユーザーのネットワーク名のみを取得します。他のユーザーの代わりに申請を送信しても、自分のネットワークとして取得されます。たとえば、ネットワーク A とネットワーク C がビジネス グループ 1 に関連付けられている場合、ビジネス グループ 1 ユーザーにはネットワーク B ではなくネットワーク A と C のみが表示されます。

前提条件

外部の vRealize Orchestrator サーバを使用している場合は、正しく設定されていることを確認してください。『vRealize Automation の構成』を参照してください。

カスタム プロパティの設定値

これらのオプションは、カスタム プロパティを作成するために使用します。

表 1-49. ネットワークのカスタム プロパティの設定値

オプション	値
名前	VirtualMachine.Network0.Name を使用する必要があります。 カスタム プロパティ V を参照してください。
データ タイプ	文字列
表示方法	ドロップダウン
値	外部
Action フォルダ	com.vmware.vra.networks
スクリプト アクション	getApplicableNetworks このスクリプト アクションはスクリプトの一例です。環境に固有のアクションを作成できます。
入力パラメータ	パラメータは不要です。

ブループリントの設定

ブループリントの [ネットワーク] タブでカスタム プロパティを追加します。[ブループリントのマシン コンポーネントで \[ネットワーク\] タブを使用してカスタム プロパティを追加する](#)を参照してください。

予約ポリシーのカスタム プロパティ定義

申請ユーザーにより申請フォームで予約ポリシー名が選択された場合、申請ユーザーに適用できる予約ポリシー名を取得するカスタム プロパティ定義を追加します。予約ポリシー セレクタのカスタム プロパティ定義は、vRealize Orchestrator アクションを使用して値を取得します。

制限事項

予約ポリシー セレクタのカスタム プロパティを使用する場合は次の制限を考慮します。

- カスタム プロパティの名前は ReservationPolicyID にする必要があります。この名前は必須です。予約ポリシー セレクタに複数のプロパティ定義を作成することはできません。

- このアクションは、ターゲット エンドポイント（vCenter Server インスタンスや他のプラットフォームなど）に予約ポリシーが適用されるかどうかを検証せずに、申請ユーザーに適用できるすべての予約ポリシーを取得します。サービス カタログ ユーザーは、選択したブループリントのターゲット システムに適用できない予約を選択する場合があります。ユーザーが誤った予約を選択した場合、カタログ申請は失敗します。
- このアクションは、申請ユーザーの予約ポリシーのみを取得します。別のユーザーの代わりに申請を送信しても、自分の予約ポリシーとして取得されます。たとえば、予約 1 と予約 3 がビジネス グループ 1 に関連付けられている場合、ビジネス グループ 1 ユーザーには予約 2 ではなく予約 1 と 3 のみが表示されます。

前提条件

外部の vRealize Orchestrator サーバを使用している場合は、正しく設定されていることを確認してください。『vRealize Automation の構成』を参照してください。

カスタム プロパティの設定値

これらのオプションは、カスタム プロパティを作成するために使用します。

表 1-50. 予約ポリシー カスタム プロパティの設定値

オプション	値
名前	ReservationPolicyID を使用する必要があります。
データ タイプ	文字列
表示方法	ドロップダウン
値	外部
Action フォルダ	com.vmware.vra.reservations
スクリプト アクション	getApplicableReservationPolicies このスクリプト アクションはスクリプトの一例です。環境に固有のアクションを作成できます。
入力パラメータ	パラメータは不要です。

ブループリントの設定

ブループリントの [プロパティ] タブにカスタム プロパティを追加して、プロパティをブループリント全体に関連付けることができます。

PowerShell スクリプトのカスタム プロパティ定義

スクリプトを使用してデータを取得し、申請フォームのカスタム プロパティに取り込む場合、PowerShell スクリプトを実行するカスタム プロパティを追加します。PowerShell スクリプトのカスタム プロパティは vRealize Orchestrator アクションを使用してスクリプトを実行し、値を取得します。

たとえば、vRealize Automation に登録されている Active Directory からユーザー ID を取得する PowerShell スクリプトを、クラウド管理者として使用できます。このスクリプトの目的は、Active Directory の実際の値が「JSmith01」の場合に「John Smith」を取得して表示することです。

PowerShell スクリプト アクションを使用するメリットとして、スクリプトの統合管理があります。中央のサーバにスクリプトを格納してターゲットの仮想マシンで実行することも、vRealize Orchestrator に格納してターゲットの仮想マシンで実行することもできます。統合管理によりメンテナンス時間が短縮されます。バックアップとリストアを構成済みの場合、vRealize Orchestrator にスクリプトを格納すると、システム障害が発生した場合にスクリプトを確実にリストアできます。

前提条件

キー ペア値を返す PowerShell スクリプトが動作することを確認します。このスクリプトはアクセスできるサーバで使用できるか、vRealize Orchestrator にアップロードされている必要があります。

カスタム プロパティの設定値

これらのオプションは、カスタム プロパティを作成するために使用します。

表 1-51. PowerShell スクリプトのカスタム プロパティの設定値

オプション	値
名前	任意の文字列を使用できます。
データ タイプ	文字列
表示方法	ドロップダウン
値	外部
Action フォルダ	com.vmware.vra.powershell
スクリプト アクション	<p>PowerShell スクリプトが配置されている場所に基づいてアクションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ PowerShell スクリプトが中央のサーバにある場合、<code>executeExternalPowerShellScriptOnHostByName</code> を使用します。 ■ PowerShell スクリプトが vRealize Orchestrator にアップロードされている場合、<code>executePowershellScriptFromResourceOnHostByName</code> を使用します。 <p>これらのスクリプト アクションはスクリプトの例です。環境に固有のアクションを作成できます。</p> <p>サンプル PowerShell スクリプト <code>Resources/Sample/vRA/PowerShell/countries.ps1</code> は、アクション <code>executePowershellScriptFromResourceOnHostByName</code> で使用する際のリファレンスとして、vRealize Orchestrator クライアントで入力されます。</p>
入力パラメータ	<p>選択したアクションに基づいて入力パラメータを設定します。</p> <p>パラメータの定義</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>executeExternalPowerShellScriptOnHostByName</code> を使用する場合： <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>[hostName]</code>。スクリプトが配置されている中央のサーバ名。 ■ <code>[externalPowershellScript]</code>。ホスト上の PowerShell ファイルのパス。 ■ <code>[Arguments]</code>。スクリプトに渡すパラメータ。引数はカンマ区切りにします。例：<code>Argument1,Argument2</code> ■ <code>executePowershellScriptFromResourceOnHostByName</code> を使用する場合： <ul style="list-style-type: none"> ■ vRealize Orchestrator。ホストとして使用している vRealize Orchestrator インスタンスの名前。 ■ <code>[scriptResourcePath]</code>。ホスト上の PowerShell ファイルのパス。 ■ <code>[scriptResourceName]</code>。vRealize Orchestrator にアップロードされたリソースとしての PowerShell ファイルのパス。

ブループリントの設定

ブループリントの [プロパティ] タブにカスタム プロパティを追加して、プロパティをブループリント全体に関連付けることができます。

データベース クエリのカスタム プロパティ定義

データベースから値を取得して申請フォームのカスタム プロパティに取り込む場合、そのデータベースを照会するカスタム プロパティを追加します。データベース カスタム プロパティは vRealize Orchestrator アクションを使用してクエリを実行し、値を取得します。

このアクションは次のデータベースでサポートされます。

- Microsoft SQL Server
- MySQL
- Oracle
- PostgreSQL

制限事項

取得されたすべての値は文字列に変換されます。

前提条件

vRealize Orchestrator SQL プラグインがインストールされ、ターゲット データベースに接続するように構成されていることを確認します。

カスタム プロパティの設定値

これらのオプションは、カスタム プロパティを作成するために使用します。

表 1-52. データベース クエリのカスタム プロパティの設定値

オプション	値
名前	任意の文字列を使用できます。
データ タイプ	文字列
表示方法	ドロップダウン
値	外部
Action フォルダ	com.vmware.vra.sql
スクリプト アクション	executeSQLSelectOnDatabase このスクリプト アクションはスクリプトの一例です。環境に固有のアクションを作成できます。
入力パラメータ	<ul style="list-style-type: none"> ■ [databaseName]。vRealize Orchestrator が接続されるデータベースの名前。 ■ [sqlSelectQuery]。値を取得するためにデータベースで実行される SQL の選択クエリ。select * <table name> など。 ■ [keyColumnName]。キー ペア値のキーであるデータベース カラムの名前。 ■ [valueColumnName]。値を取得するデータベース カラムの名前。

ブループリントの設定

ブループリントの [プロパティ] タブにカスタム プロパティを追加して、プロパティをブループリント全体に関連付けることができます。

カスタム アクションのカスタム プロパティ定義

取得した値を申請フォームでユーザーに選択させる場合、vRealize Orchestrator のカスタム アクションを使用してソースからデータを取得するカスタム プロパティを追加します。

制限事項

サポートされているスクリプト アクションは次のとおりです。

- Any および Array/Any
- 定義フォームで文字列データ タイプを選択した場合は Array/String および Array/Properties
- 定義フォームで整数または 10 進数データ タイプを選択した場合は Array/Number

前提条件

動作する vRealize Orchestrator アクションがあることを確認します。vRealize Orchestrator スクリプト アクションの開発ワークフロー、作成および使用方法については、『VMware vCenter Orchestrator における開発』を参照してください。

アクション スクリプトは入力パラメータ値を受け入れる必要があります。この値はキーと値のペアとして設定できます。キーと値のペアを使用して、わかりにくい ID に対してユーザーが判別可能な名前を示すことができます。

カスタム プロパティの設定値

これらのオプションは、カスタム プロパティを作成するために使用します。

表 1-53. カスタム アクションのカスタム プロパティの設定値

オプション	値
名前	任意の文字列を使用できます。
データ タイプ	10 進数、整数、または文字列
表示方法	ドロップダウン
値	外部
Action フォルダ	カスタム アクションの場所。
スクリプト アクション	カスタム アクションの名前。
入力パラメータ	カスタム アクションによって異なります。

ブループリントの設定

通常は、ブループリントの [プロパティ] タブでカスタム プロパティを追加します。カスタム プロパティを [プロパティ] タブに追加するかどうかは、アクションによって異なります。[ブループリントへのカスタム プロパティの追加](#)を参照してください。

プロパティ グループの使用

プロパティ グループを作成し、プロパティを単一のユニットにまとめることができます。

プロパティ グループは、論理的かつ再利用可能なプロパティのグループです。プロパティ グループには、自分で作成するプロパティ定義または提供されているカスタム プロパティを含めることができます。プロパティ グループは、プロパティをブループリントまたは他の使用可能な vRealize Automation 要素に追加するプロセスを簡素化します。プロパティを論理的にグループ化することで、個別に追加する場合に比べ、効率的にプロパティを追加できるようになります。

一般的に、プロパティ グループには、一緒に使用されるプロパティが含まれます。たとえば、WIM ベースのプロビジョニングで広く使用されるプロパティをまとめて、WimImagingProperties という名前のプロパティ グループを作成できます。

- Image.ISO.Location
- Image.ISO.Name
- Image.Network.Password
- Image.Network.User
- Image.WIM.Index
- Image.WIM.Name
- Image.WIM.Path

また、次のプロパティを含む、vCloud Air または vCloud Director マシン プロビジョニングのプロパティ グループを作成することもできます。

- VirtualMachine.Network0.Name
- VCloud.Template.MakeIdenticalCopy
- VMware.SCSI.Type
- Sysprep.Identification.DomainAdmin
- Sysprep.Identification.DomainAdminPassword
- Sysprep.Identification.JoinDomain

`vra content list --type property-definition vRealize CloudClient` コマンドを使用すると、現在の vRealize Automation テナントのすべてのプロパティ定義を一覧表示できます。また、`vra content list --type property-group vRealize CloudClient` コマンドを使用すると、すべてのプロパティ グループを一覧表示できます。

プロパティ グループの作成

特定のカスタム プロパティをプロパティ グループに編成し、複数のカスタム プロパティをより簡単にブループリントに追加できるようにします。

前提条件

テナント管理者またはファブリック管理者として vRealize Automation にログインします。

手順

- 1 [管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [プロパティ グループ] を選択します。

2 [新規] (+) をクリックします。

3 新しいプロパティ グループ名と ID を入力します。

[名前] の値を最初に入力すると、[ID] テキスト ボックスに同じ値が取り込まれます。

4 [可視性] セクションでは、[すべてのテナント] または [このテナント] を選択してプロパティを使用できる場所を判断します。

テナント管理者の権限のみでログインする場合、[このテナント] のみを使用できます。ファブリック管理者の権限のみでログインする場合、[すべてのテナント] のみを使用できます。

アイテム作成後に、[すべてのテナント] または [このテナント] の設定を変更することはできません。

5 (オプション) プロパティ グループの説明を、たとえば **My_CloningProperties_vSphere** と入力します。

6 [新規] をクリックし、プロパティをグループに追加します。

オプション	説明
Name	新しいプロパティを追加するか、ドロップダウン メニューから既存のプロパティを選択します。たとえば、 VirtualMachine.Storage.ReserveMemory と入力します。
値	(オプション) デフォルトのプロパティ値を入力します。たとえば、 True と入力します。
暗号化済み	プロパティ値を暗号化することを指定するには、このオプションを選択します。たとえば、値がパスワードやその他のセキュア エントリとなる場合、暗号化されたオプションを使用して値の文字を非表示にします。 vRealize Orchestrator アクションを実行するカスタム プロパティを追加するときは、値を暗号化しないでください。
申請に表示	このオプションを選択すると、ユーザーがマシンのプロビジョニングを申請するとき、プロパティを確認して申請フォームの値を選択できます。

7 [OK] をクリックして、グループにプロパティを追加します。

8 追加のプロパティをグループに追加します。

9 [OK] をクリックします。

コンポーネント プロファイル設定の定義

コンポーネント プロファイルを使用して、vRealize Automation ブループリントに詳細なプロパティ管理機能を設定することができます。それにより、展開担当者は、ブループリントで Size および Image コンポーネント プロファイルを使用して、事前定義された値セットを選択できます。

Size および Image コンポーネント プロファイルと、値セットを使用することにより、大規模、中規模、小規模、または開発、テスト、本番など、論理的なグループにマッピングすることができます。これらの設定を使用すると、管理が必要なブループリントの数を減らすことができます。

コンポーネント プロファイルでは、ブループリント内の vSphere マシン コンポーネントの設定を定義します。たとえば、小規模の仮想マシン展開用のコンポーネント プロファイルを定義できます。大規模のマシン展開用に別のコンポーネント プロファイルを定義することもできます。vRealize Automation を使用して、次のコンポーネント プロファイル タイプを定義できます。

- サイズ

[カタログ展開用コンポーネント プロファイルのサイズの設定](#)を参照してください。

- イメージ

[カタログ展開用コンポーネント プロファイルのイメージの設定](#)を参照してください。

Size および Image コンポーネント プロファイル タイプ内には複数の値セットを名前付きで定義できます。また、1 つ以上の値セットをブループリント内のマシン コンポーネントに追加できます。コンポーネント プロファイル タイプで定義する値セットにはそれぞれ、次の設定項目があります。

- マシンをプロビジョニングするときに表示される名前
- テナントの一意の識別子
- 説明
- 値セットの各オプションで選択できる値のセット

他のコンポーネント プロファイル タイプを定義することはできません。

プロビジョニングの申請時に、使用可能な Size および Image オプションの中から選択することができます。1 つの値セットを選択すると、対応するプロパティ値がその申請にバインドされます。

カタログ展開用コンポーネント プロファイルのイメージの設定

コンポーネント プロファイルの Image を設定することにより、ブループリントの vSphere マシン コンポーネントのビルド情報をコントロールできます。

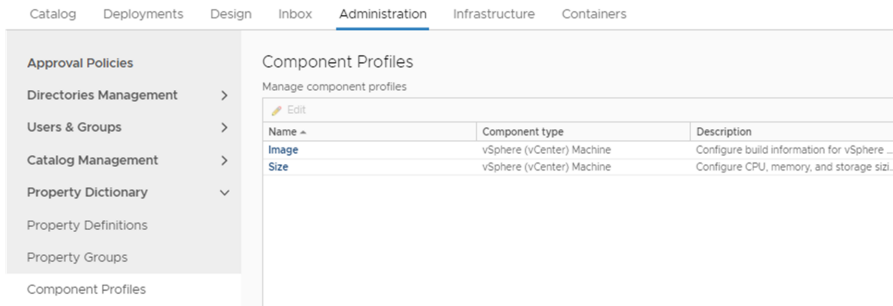
Image コンポーネント プロファイルに値セットを定義すると、ブループリント内の vSphere マシン コンポーネントのコンポーネント プロファイルに 1 つまたは複数の値セットを追加できるようになります。そのため、ユーザーは、カタログ アイテムを申請するときに Image 値セットを選択することができます。

前提条件

テナント管理者および IaaS 管理者のアクセス権を持つ管理者として vRealize Automation にログインします。

手順

- 1 [管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [コンポーネント プロファイル] の順に選択します。



- 2 [名前] 列で [イメージ] をクリックします。

指定されたイメージ コンポーネントのプロパティに関する情報が表示されます。

- 3 [値セット] タブをクリックします。

- 4 新しい値を定義するには、[新規] をクリックし、Image を設定します。

- a [表示名] フィールドでは、ValueSet 区切り記号に付加する値、たとえば **CloneA** を入力します。
- b [名前] テキスト ボックスでは、表示されるデフォルト値、たとえば [ValueSet.CloneA] を受け入れるか、カスタム名を入力します。
- c [説明] テキスト ボックスには、**シナリオ A のクローンを作成するためのビルド設定**などの説明を入力します。
- d [ステータス] ドロップダウン メニューでは、[有効] または [無効] を選択します。
カタログ プロビジョニングの申請フォームで値が表示されるように設定する場合は、[有効] を選択します。
- e ブループリントのタイプとして、[サーバ] または [デスクトップ] を選択します。
- f この値セットに使用するビルド アクション、たとえば [クローン作成] を選択します。
その他のアクションは次のとおりです。
 - [作成]
 - [クローン作成]
 - [リンク クローン]
 - [NetApp FlexClone]
- g CloneWorkflow プロビジョニング ワークフローを選択します。
- h (オプション) クローン作成元のソース マシン ([centos7264] など) を選択します。
- i (オプション) vSphere のカスタム仕様へのパスを入力します。

- 5 [保存] をクリックします。

6 設定が完了したら、[完了] をクリックします。

次のステップ

vSphere マシン コンポーネントの [プロファイル] タブを使用して、Image コンポーネント プロファイルに 1 つまたは複数の値セットを追加します。『vRealize Automation の構成』を参照してください。

カタログ展開用コンポーネント プロファイルのサイズの設定

コンポーネント プロファイルの Size を設定することにより、ブループリントの vSphere マシン コンポーネントの CPU、メモリ、およびストレージのサイズを設定できます。

Size コンポーネント プロファイルに値セットを定義すると、ブループリント内の vSphere マシン コンポーネントのコンポーネント プロファイルに 1 つまたは複数の値セットを追加できるようになります。そのため、ユーザーは、カタログ アイテムを申請するときに Size 値セットを選択することができます。

前提条件

テナント管理者および IaaS 管理者のアクセス権を持つ管理者として vRealize Automation にログインします。

手順

1 [管理] - [プロパティ ディクショナリ] - [コンポーネント プロファイル] の順に選択します。

2 [名前] 列で [サイズ] をクリックします。

提供された Size コンポーネント プロファイルに関する情報が [全般] タブに表示されます。

3 [値セット] タブをクリックします。

4 大規模展開などのために新しい値セットを定義するには、[新規] をクリックし、Size を構成します。

- a [表示名] フィールドでは、ValueSet 区切り記号に付加する値、たとえば **small_1** を入力します。
- b [名前] テキスト ボックスでは、表示されるデフォルト値、たとえば [ValueSet.small_1] を受け入れるか、カスタム名を入力します。
- c [説明] テキスト ボックスには、**小規模展開**などの説明を入力します。
- d [ステータス] ドロップダウン メニューでは、[有効] または [無効] を選択します。
カタログ プロビジョニングの申請フォームで値が表示されるように設定する場合は、[有効] を選択します。
- e 展開を実行できる仮想 CPU の数を、たとえば 1 と入力します。
- f 展開内の仮想マシンによって使用される RAM の容量を、たとえば 2 MB と入力します。
- g 展開内の仮想マシンによって使用されるストレージ容量を、たとえば 1 GB と入力します。

5 [保存] をクリックします。

6 設定が完了したら、[完了] をクリックします。

The screenshot shows the vRealize Automation Administration console. The left sidebar contains a navigation menu with categories like Approval Policies, Directories Management, Users & Groups, Catalog Management, Property Dictionary, Component Profiles, Reclamation, Branding, Notifications, Events, vRO Configuration, Active Directory Policies, Health, Message Board Whitelist, and Request History. The main content area is titled 'Edit Component Profile: Size' and has a sub-header 'Manage component profile value set that will be available while creating blueprints'. The 'Value Sets' tab is selected, showing a table with columns 'Name', 'Display name', 'Description', and 'Status'. The table contains one entry: 'small_1' with display name 'ValueSet.small_1', description 'small deployment', and status 'Active'. Below the table is the 'Create Value Set' form with fields for 'Display name' (small_1), 'Name' (ValueSet.small_1), 'Description' (small deployment), 'Status' (Active), 'CPUs' (1), 'Memory (MB)' (2), and 'Storage (GB)' (1). Buttons for 'SAVE', 'FINISH', and 'CANCEL' are at the bottom.

次のステップ

vSphere マシン コンポーネントの [プロファイル] タブを使用して、Size コンポーネント プロファイルに 1 つまたは複数の値セットを追加します。『vRealize Automation の構成』を参照してください。